

HP OpenView Performance Insight

HP-UX、Linux、Solaris、Windows オペレーティングシステム用

ソフトウェアバージョン : 5.30

Oracle データベースのインストールおよび アップグレードガイド

Manufacturing Part Number: J5223-99041

ドキュメントリリース日 : 2007 年 10 月

ソフトウェアリリース日 : 2007 年 10 月



ご注意

保証

HP 製品およびサービスに対する保証は、当該製品およびサービスに付属の保証規定に明示的に記載されているものに限られます。本書のいかなる内容も、新たな保証を追加するものではありません。HP は、本書中の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負わないものとします。

本書に含まれる情報は、予告なく変更されることがあります。

権利の制限

本製品は機密コンピュータソフトウェアです。所有、使用、または複製には、HP から有効な使用許諾を得る必要があります。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商業用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアドキュメント、および商業用製品の技術データは、ベンダ標準の商業用ライセンスのもとで、米国政府にライセンスが付与されます。

著作権

© Copyright 2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Windows® および Windows Server™ 2003 は、Microsoft® Corp. の米国登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Java™ は、Sun Microsystems, Inc. の米国商標です。

Oracle® は、Oracle Corporation (カリフォルニア州レッドウッドシティ) の米国商標です。

ドキュメントの更新

本書のタイトルページには、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョン番号 (ソフトウェアバージョンを示します)
 - ピリオドの前の数字はメジャーリリース番号を示しています。
 - ピリオドの直後の数字はマイナーリリース番号を示しています。
 - ピリオドの後 2 番目の数字はマイナーリリース後のマイナーリリース番号を示しています。
- ドキュメントリリース日 (ドキュメントが更新されると変更されます)
- ソフトウェアリリース日 (該当バージョンのソフトウェアのリリース日を示します)

最近の更新があるかどうか、または最新版のドキュメントを使用しているかどうかを確認するには、以下の **Web** ページをご覧ください。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv/

該当する製品サポートサービスをご契約になれば、更新版または新しい版を受け取ることもできます。さらにご質問がある場合は、詳細について **HP** にお問い合わせください。

サポート

以下の HP ソフトウェアサポートサイトをご覧ください。

<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>

HP のオンラインソフトウェアサポートでは、対話形式の技術サポートツールに効率的にアクセスできます。HP ソフトウェアサポートサイトでは次のことが可能です。

- 関心のあるドキュメントを検索する
- 改善要求を登録する
- ソフトウェアパッチをダウンロードする
- サポートケースを登録/トラッキングする
- サポート契約を管理する
- HP サポートの問い合わせ先を調べる
- 利用可能なサービスに関する情報を確認する
- 他のお客様とのディスカッションに参加する
- ソフトウェアトレーニングの検索および登録を行う

サポートの多くでは、HP Passport へのユーザー登録とサインインが必要です。多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセスレベルおよび HP Passport に関する詳細は、以下の Web ページをご覧ください。

http://www.hp.com/managementsoftware/access_level

目次

1	OVPI のインストールについて	9
	運用環境	9
	スタンドアロン OVPI 環境	9
	分散 OVPI 環境	11
	機能の分散	11
	サーバーの分散	12
	スタンドアロン環境か分散環境かの選択	15
	質問事項	15
	OVPI コンポーネント	17
	OVPI データベース	17
	OVPI パフォーマンスマネージャ	17
	OVPI Web アクセスサーバー	18
	OVPI クライアント	18
	OVPI クライアントのみのインストール	20
	リモートポーター	20
	OVPI の共存	21
	OVPI のインストールの概要	22
	システムの役割による一般的なインストール	23
	スタンドアロン環境システムの役割	23
	分散環境システムの役割	23
	サポートされる OVPI 構成	26
	インストールメディア	26
2	インストールの前提条件	27
	ライセンスが付与されたインストールに Evaluation を変換する	27
	インストール前の作業	28

国際化とローカライズの計画.....	36
db3 モジュールのインストール (Red Hat Linux システムの場合のみ).....	36
インストールの前提条件のチェックリスト	37
メモリーおよび記憶領域の要件	39
インストールパラメータ値	40
3 Oracle 10g Enterprise Edition のインストール.....	43
Oracle のインストールの前提条件	43
OVPI 用 Oracle データベースの作成	46
Oracle データベースサーバーのインストール	46
表領域のサイズ設定のガイドライン.....	52
表領域の作成.....	54
tnsnames.ora ファイルの編集	59
リモート Oracle データベースの設定.....	60
インストール後の作業.....	63
Oracle の開始と停止	65
Oracle の開始.....	65
Oracle の停止.....	66
Oracle のインストールのトラブルシューティング	67
4 スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール.....	69
OVPI インストールプログラムの起動	69
次の手順	73
5 分散環境での OVPI のインストール.....	97
OVPI インストールプログラムの起動	97
次の手順	100
中央サーバーへの OVPI のインストール	102
サテライトサーバーへの OVPI のインストール.....	102
Web アクセスサーバーのインストール.....	129
OVPI クライアントのインストール	136
リモートポーターコンポーネントのインストール.....	139
OVPI クライアントのみのインストール.....	143

6	インストール後の作業	145
	サービスパックの適用.....	145
	分散システムでの共通キャラクタセットの使用.....	145
	証明書管理アプリケーションのルート権限.....	146
	レポートパックのインストール前に実行する作業.....	146
	設定作業の実行.....	146
	システムのバックアップ.....	148
	OVPI の稼動とデータ収集の確認.....	148
	OVPI の開始と停止.....	150
	OVPI のインストールのトラブルシューティング.....	151
	OVPI のログファイル.....	151
	Windows の場合のみ : NNM の統合.....	151
7	OVPI のアンインストール	153
	OVPI のアンインストールで事前に必要な作業.....	153
	OVPI のアンインストール手順.....	154
	OVPI の手動アンインストール (Windows システムの場合).....	156
	OVPI のアンインストール後の作業.....	158
	OVPI のインストール先ディレクトリの削除.....	158
	不要なディレクトリの削除.....	159
	.ovpi ディレクトリの削除.....	159
	RDBMS のアンインストール.....	160
8	Oracle RDBMS のアンインストール	161
9	Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード	163
10	OVPI 5.30 へのアップグレード	165
	アップグレード前の作業.....	166
	ウィザードを使用したアップグレード.....	166
	レポートパックのアップグレード.....	178
	リモートポラーのアップグレード.....	178
	アップグレード後の作業.....	178

索引 179

1 OVPI のインストールについて

このマニュアルでは、ユーザーの最適な運用環境に HP OpenView Performance Insight (OVPI) 5.30 をインストールする方法について説明します。

OVPI 5.30 は Oracle バージョン 10g のみに対応しています。これよりも古いバージョンを使用している場合は、アップグレードが必要です。アップグレード方法については、第 9 章「Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード」で説明します。

運用環境

OVPI は、スタンドアロン運用環境または分散運用環境としてインストールできます。この項では、2 つの実装についてと、どちらを選択するかについて説明します。

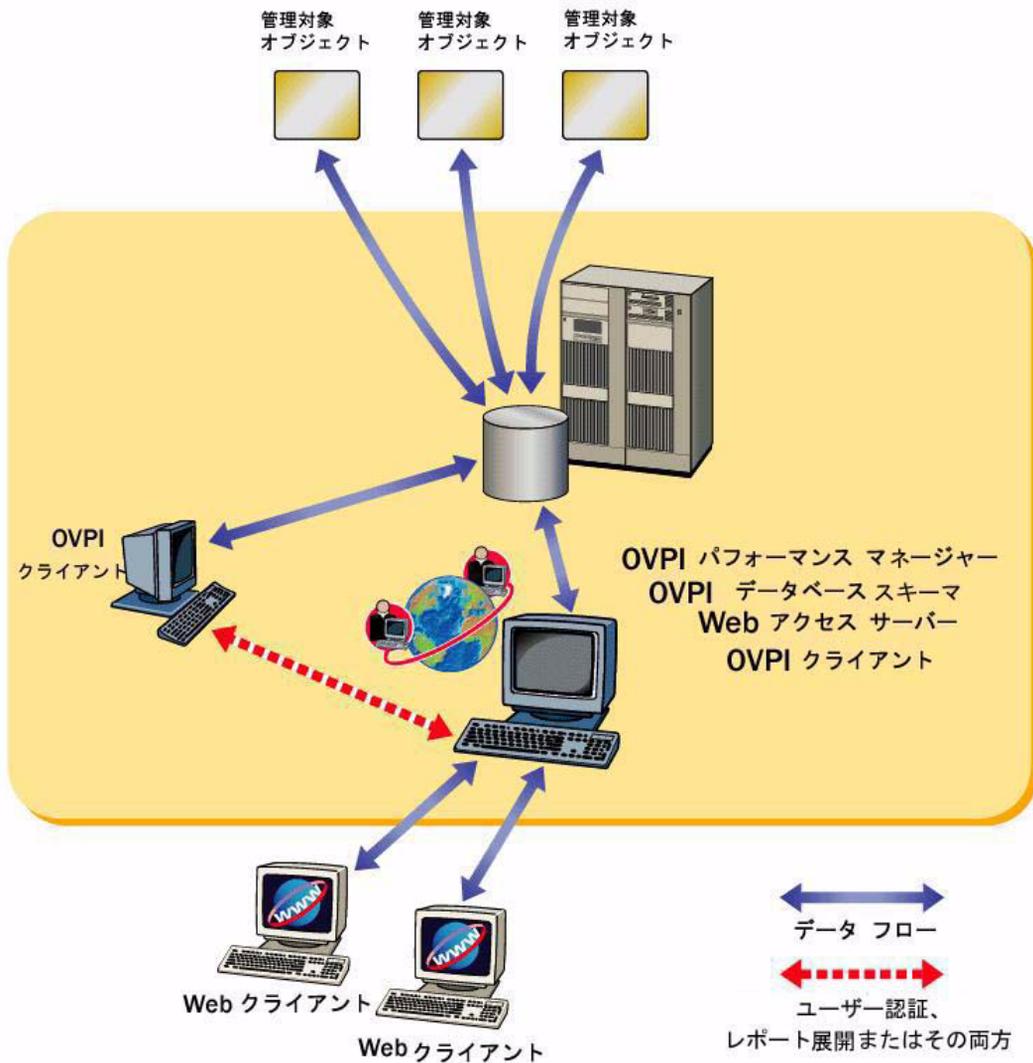
OVPI では、1 台のスタンドアロンシステムから開始して、必要に応じて追加できるモジュール式のクライアントサーバーアーキテクチャを採用しています。複数のリモートクライアントをインストールして 1 台のデータベースサーバーの管理下に置くことも、必要な数のデータベースサーバーをネットワークに設置して分散 OVPI 環境を構築することもできます。

スタンドアロン OVPI 環境

1 つの建物内または 1 つのユーザーグループに対してネットワークのパフォーマンスを監視する場合、またはネットワーク上の管理対象オブジェクトの数がおよそ 20,000 未満の場合は、スタンドアロンの OVPI 環境を構築します。

スタンドアロン構成では、すべての OVPI コンポーネントが 1 つのシステムにインストールされます。このシステムでは、管理対象オブジェクトのポーリング、パフォーマンスデータの収集と処理、OVPI Web サイトのホスティング、パフォーマンスレポートの作成、OVPI クライアントの実行が可能です。

このタイプの環境は、OVPI 機能を分散させる環境に比べて、実装、連携、維持するコンポーネントの数が少ないため、管理が簡単で管理コストが安く済みます。次の図はスタンドアロン OVPI 環境を示しています。



分散 OVPI 環境

大企業では、1つのシステムでは処理能力やディスク領域が不足して、OVPIでネットワークを最適に監視できない場合があります。そのため、負荷分散が必要なことがあります。

OVPI コンポーネントを複数のシステムにインストールしてネットワーク全体の構成を構築している環境を「分散 OVPI 環境」と呼びます。OVPI の各コンポーネントは物理的に異なる複数のシステムにインストールされますが、コンポーネント全体は1つのシステムとして動作します。

監視を必要とするネットワークは規模が大きく地理的に分散していることが多いため、OVPI は分散環境にも対応できるように設計されています。さまざまなコンポーネントを環境全体に機能的に配置することで、ネットワークの負荷を軽減し、システムのパフォーマンスを最適化することができます。



分散 OVPI 環境では、環境内のすべてのシステムに、サービスパック (パッチレベル) も含めて同じバージョンの OVPI をインストールする必要があります。

機能の分散

分散可能な OVPI の機能は次のとおりです。

- データ収集
- データ管理 (処理と要約)
- データレポート

3つの機能はすべて統合されており、物理的な場所は統合に影響しません。

リソース利用の費用対効果を最大化するには、各機能を別々のプラットフォームで実行することです。たとえば、データを収集するリモートポーリングシステムとして **Windows** オペレーティングシステムが稼動する **PC** を使用し、データを保存し処理するデータベースサーバーとして **UNIX** マシンを使用します。

サーバーの分散

分散 OVPI 環境では、環境内におけるメインの処理およびレポートのプラットフォームは**中央データベースサーバー**で、ネットワーク全体のユーザーがアクセスできます。通常、設置される中央データベースサーバーは**1台**のみで、大量のディスク領域やメモリー、高い処理能力を必要とします。

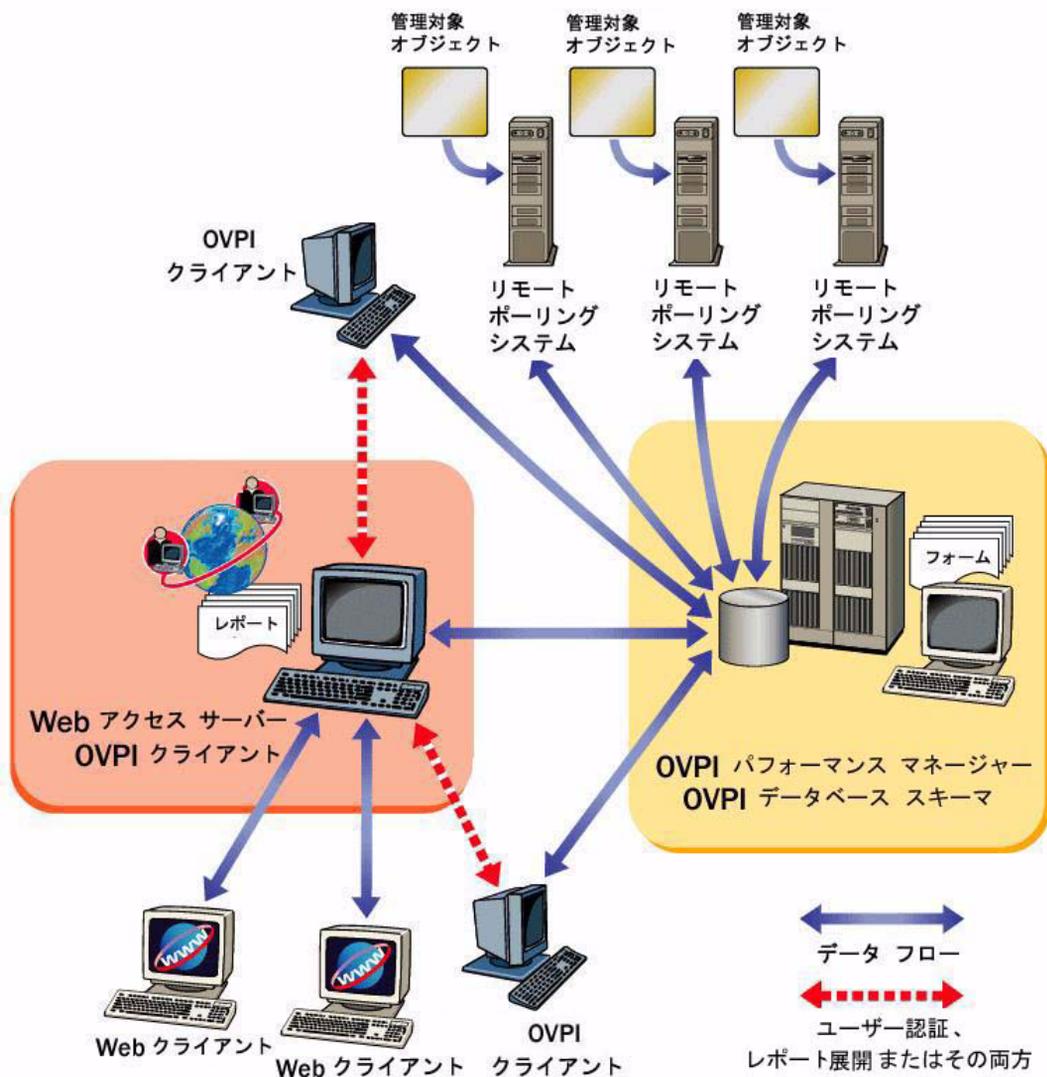
逆に、分散環境には任意の数の**サテライトデータベースサーバー**を置くことができます。各サテライトデータベースサーバーは、データ収集および初期データ処理の役割を果たします。各サテライトデータベースサーバーからのデータは、中央データベースサーバーにアップロードされ、そこで他のデータと結合されま

す。

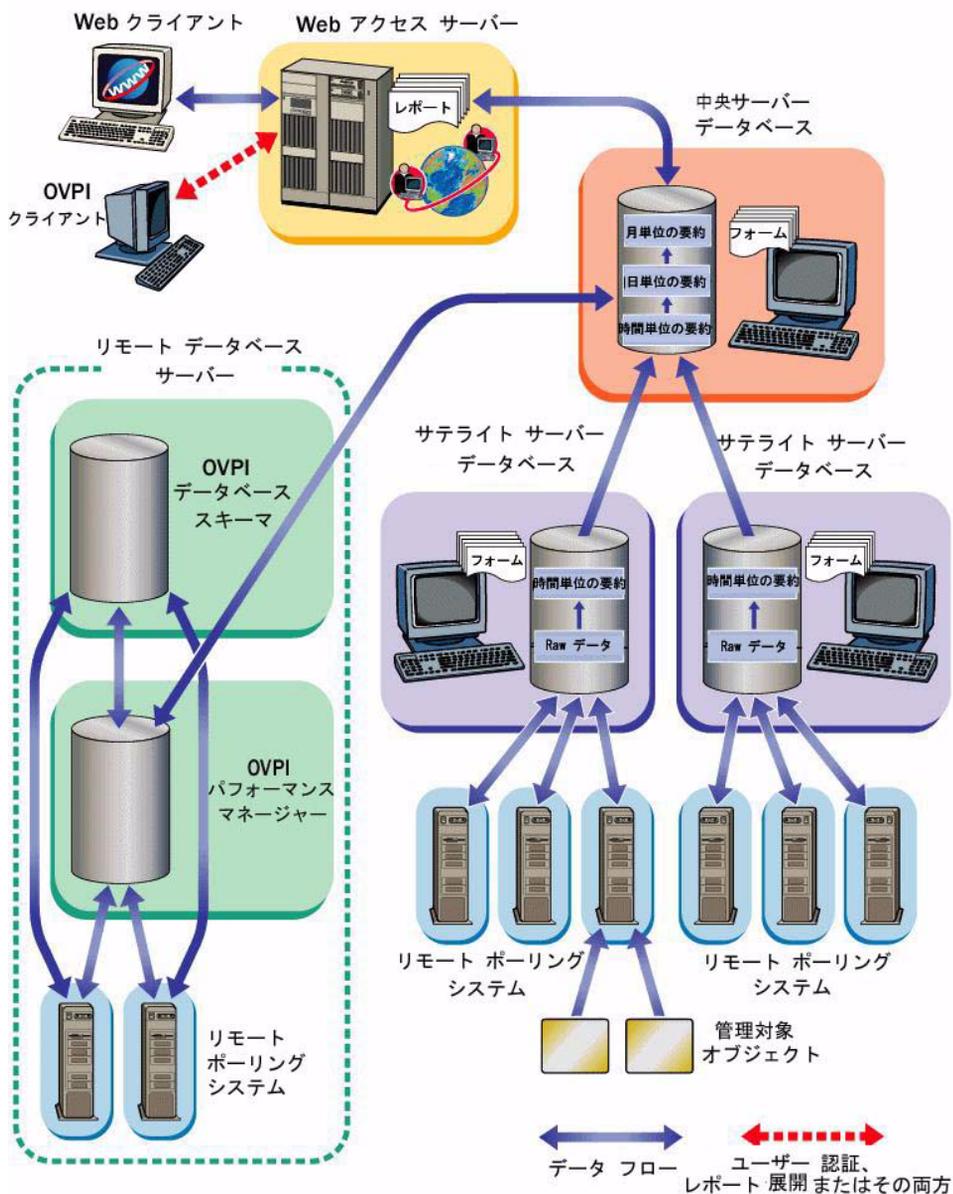
データ収集はネットワークに大きな負荷がかかる処理で、**OVPI**において時間に依存する数少ない処理の**1つ**です。分散環境では、ポーリングのトラフィックを局所化し遅延を最小化するために、ポーリング対象のデバイスの近くにリモートポーリングシステムを設置するのが通常です。各ポーリングシステムは複数デバイスのポーリングを実行し、親のサテライトデータベースサーバー（通常はその地域の拠点）と通信します。

また、通常は分散環境に設置する **Web** アクセスサーバーは**1台**のみで、専用のシステムにインストールし、アクセス可能な **Web** ベースのクライアントワークステーションおよび **OVPI** クライアントワークステーションから送られてくるレポート要求を処理します。

次の図は単純な分散 OVPI 環境の例で、中央データベースサーバーが Web ホスティングおよびリモートポーリング以外の全機能を処理しています。



次の図はより複雑な分散 OVPI 環境で、地理的に分散した大規模なネットワークでパフォーマンスを向上しています。



この例では、複数のサテライトデータベースサーバーが各地域でサービスを提供しています。収集されたパフォーマンスデータは各サテライトサーバーでまとめられ、中央データベースサーバーにアップロードされます。

各サテライトサーバーは、完全なデータ集約およびレポート生成を実行する完全にスタンドアロンのシステムとして機能します。さらに、データの一部を中央データベースサーバーにコピーします。このため、サテライトサーバーにおいて局所的なレポートを表示できると共に、中央データベースサーバーでネットワーク全体のレポートも利用することができます。

スタンドアロン環境か分散環境かの選択

分散 OVPI 環境を導入する理由やタイミングを検討中なら、この項の説明が役に立ちます。

以下の条件のいずれかに当てはまる場合は、分散 OVPI 環境によってパフォーマンスの向上が期待できます。

- 地理的に分散している大規模なネットワークを使用していて、各地域についてそれぞれ独自のレポートが必要な場合。
- 1つのポーリングシステムで処理できる量（一般的にポーリングおよび要約対象のオブジェクト数 **20,000**）を超える管理対象オブジェクトがある場合。この制限は、ポーリング間隔（ポーリングの時間が増えるとポーリングできるインスタンスの数が増える）、生成される子コレクタの数（同時に実行する数が増えるとシステムの速度が上がる）、ネットワーク遅延時間、デバイス遅延時間など、多くの要因に影響されます。

質問事項

処理負荷の分散というメリットのほか、地理的、組織的、または機能的な要因も分散環境を検討する対象となります。以下の質問事項は必要性を判断するときに役立ちます。

- 管理対象オブジェクトの数。十分な処理能力が確保されているかを検証します。

OVPI がレポートする必要があるオブジェクトの数は、必要なシステムの数に直接影響します。最低 1 台ずつ各種システムを用意する必要がありますが、分散環境をまったく必要としない場合もあります。HP の営業担当者がシステム要件を決めるお手伝いをします。

- 管理対象デバイスの位置。ネットワーク管理インフラストラクチャの速度を検証します。

管理対象デバイスが地理的に分散している場合は、リモートポーリングシステムが必要になります。一般的なケースとしてデータ収集が **SNMP** を使用して行われる場合、デバイスの近くにリモートポーラーを導入すると、パケットの移動距離を短くすることができます。このため、ポーリング応答時間が向上し、データ収集の信頼性とパフォーマンスが改善されます。

- サテライトデータベースサーバーでのレポートの必要性。ユーザーの種類と各種ユーザーの作業内容を検証します。

複数のサテライトデータベースサーバーを設置しなければならないほどネットワークが大きい場合は、各サテライトデータベースサーバーに、ユーザーグループの作業対象であるデバイスグループを割り当てるかを検討します。

たとえば、ネットワークが複数の地域に分散している場合は、各地域に1つずつサテライトデータベースサーバーを配置するとよいでしょう。各地のユーザーがその地域に固有のレポートを表示したいかどうか、またその場合、レポートシステムへのアクセスをローカルにするかどうかを検討します。このような場合には、各サテライトサーバーは完全なデータ処理サイクルを実行する必要があり、**Web** アクセスサーバーもインストールする必要があります。その場合、サテライトデータベースサーバーにかかる処理負荷は大きくなりますが、地域的に存在するユーザーと中央に配置した **Web** アクセスサーバー間のネットワークトラフィックは軽減されます。

- 中央データベースサーバーでの準リアルタイムレポートの必要性。ユーザーの種類と各種ユーザーの作業内容を検証します。

収集したデータをサテライトデータベースサーバーで時間単位まで処理してから、中央データベースサーバーにコピーする方法が、データの集約や転送に関して最も効率の良い構成です。

この構成の利点は、中央データベースサーバーの処理負荷を減らすことができるだけでなく、サテライトデータベースサーバーと中央データベースサーバーとの間のネットワークトラフィックも軽減できることです。ただし、中央データベースサーバーは詳細なレポートが利用できなくなります。準リアルタイムレポートなどの一部のレポートを表示するには、最も精度の高い割合データが必要です。もしデータが中央データベースサーバーにないときは、これらのレポートを削除した方がよい場合があります。

OVPI コンポーネント

OVPI は以下のコンポーネントで構成されています。

OVPI データベース

OVPI データベースは RDBMS と OVPI データベーススキーマで構成されています。OVPI のインストールを開始するには、まず OVPI 運用環境用のデータベースサーバーを構築する必要があります。データベースサーバーの構築では以下のことを行います。

- OVPI でサポートされている RDBMS をシステムにインストールするか、サポートされている既存の RDBMS を OVPI で必要なバージョンにアップグレードします。

RDBMS をインストールすると、OVPI データベースインスタンスが作成されます。これは OVPI によって収集、処理、およびレポートされるパフォーマンスデータの指定リポジトリです。データベースインスタンスの初期状態は空です。

- OVPI データベーススキーマをインストールします。パフォーマンスデータを保存するテーブルおよびデータ間の関係を決めるインデックスが作成されます。データベーススキーマをインストールすると、OVPI はテーブルを作成し、テーブルのいくつか(時間範囲テーブル、データベースに関する情報テーブルなど)にデータを設定します。また、デバイスファイルを追加し、OVPI データベースインスタンスをチューニングします。

OVPI パフォーマンスマネージャ

OVPI パフォーマンスマネージャ (HP OpenView Performance Manager とは別の製品) には、収集したパフォーマンスデータの保存、処理、およびレポート用のツールが付属しています。OVPI パフォーマンスマネージャは、OVPI データベースのデータ集約と要約を実行し、期限が切れたデータを除外します。OVPI パフォーマンスマネージャには全機能を装備した管理コンソールが付属しており、OVPI 環境を管理するためのツールとなります。さらに、OVPI クライアントに Web サービスを提供する Web アプリケーション、OVPI 管理サーバーも付属しています。

OVPI パフォーマンスマネージャは環境内の複数のシステムにインストールできますが、インストール先のシステムはデータベースサーバーか、既存のリモートデータベースサーバーに接続しているシステムでなければなりません。

もっとも一般的な方式は、OVPI パフォーマンスマネージャをデータベースサーバーシステムにインストールする方法です。RDBMS および OVPI パフォーマンスマネージャは CPU およびディスクを大量に使用するため、専用のシステムにインストールするのが理想的です。

データベースサーバーにリモートでアクセスするシステムに OVPI パフォーマンスマネージャをインストールすることもできます。これが有利になるのは、データベースを中央管理で制御しながら、データベースファームを使っている場合、またはインストールでデータベースのライセンスが問題となる場合（購入済みの RDMS を使用するなど）です。このような場合は、OVPI をインストールする前に、OVPI をサポートするリモートデータベースをセットアップする必要があります。

OVPI Web アクセスサーバー

システムに OVPI Web アクセスサーバーをインストールすると、OVPI Web サイトに対するホストが作成されます。このホストは、認証サービスおよび構成サービス、Web ベースのレポートユーティリティ、OVPI クライアントコンポーネントを使用したユーザー管理ユーティリティを提供します。OVPI Web アクセスサーバーは大量のメモリーと CPU を必要とするため、地域でのレポート出力以外の目的ではデータベースサーバーにはインストールしません。

OVPI クライアント

OVPI クライアントは、レポートの作成、表示、および配布、さらに管理作業のような機能のために OVPI とユーザー間のインタフェースを提供します。OVPI クライアントは、OVPI グラフィカルユーザーインタフェースを使用して利用できます。ほとんどはコマンド行ユーティリティでも利用できます。

OVPI クライアントは、OVPI Web アクセスサーバーに接続可能なネットワーク接続されたシステムにグループとして（別の OVPI コンポーネントの有無に関係なく）インストールされます。

OVPI クライアントは次の機能を提供します。

- **レポートビルダ** : OVPI データベースのデータに基づき、複数の表とグラフを使用してパフォーマンスレポートを作成し、カスタマイズできます。
- **レポートビューア** : パフォーマンスレポートを対話形式で表示、変更、保存、印刷できます。
- **管理コンソール** : 以下のコンポーネントを使用して管理作業を実行できます。
 - **カタログマネージャ** : OVPI データベースのデータをもとに OVPI レポートおよびリンクカタログを管理します。
 - **MIB ブラウザ** : SMI に準拠した SNMP MIB の分析、照会、トラブルシューティングを行います。
 - **SNMP 検出** : ノードセットが OVPI システムから接続可能かどうか、また、ノードセットが SNMP をサポートしているかどうかを判定します。SNMP 検出によって検出されたノードは OVPI ノードデータベースに追加されます。
 - **タイプ検出** : 検出したノードのデバイスタイプ (たとえばルーター、ハブ、スイッチ) を調べます。
 - **パッケージマネージャ** : パッケージのインストール、Web アクセスサーバーへのレポートの配布、タイプ検出、およびパッケージのアンインストールを実行します。
 - **オブジェクトマネージャ** : システム上の管理対象オブジェクトのプロパティを表示および変更します。
 - **システムマネージャ** : 他のシステムにインストールした OVPI に対する参照を、追加、変更、削除します。
 - **グループマネージャ** : ポーリンググループを作成し、管理します。
 - **ポーリングポリシーマネージャ** : ポーリングポリシーの管理、ノードのインポートおよび管理、ポーリンググループの管理を行います。
 - **テーブルマネージャ** : データベースの監視、データおよびプロパティテーブルの表示、個別のテーブルまたはすべてのテーブルのデフォルト値の設定を行います。

OVPI クライアントのみのインストール

他の OVPI コンポーネントとは別に、OVPI クライアントのみをインストールすることができます。これを「クライアントのみ」のインストールと呼びます。クライアントのみのインストールは、ローカルのワークステーションで作業し、OVPI Web アクセスサーバーにリモートでアクセスするユーザーに対して、特定のレポート機能と管理機能を提供します。

ただし、クライアントのみのインストールでは、管理コンソールの全機能が使えるわけではないことに注意してください。次のコンポーネントは、管理コンソールの [ツール] メニューからは利用できません。

- カタログマネージャ
- MIB ブラウザ
- SNMP 検出
- タイプ検出
- パッケージマネージャ
- コピーポリシーマネージャ

さらに、ユーザーは新しいデータテーブルまたはプロパティテーブルを登録することも、収集データをデータベースに自動的に追加することもできません。管理コンソールの全機能を有効にするには、OVPI パフォーマンスマネージャをインストールする必要があります。

リモートポーター

ネットワーク上の 1 つまたは複数のノードからデータを収集する処理、および OVPI データベースサーバーにデータを格納する処理をポーリングといいます。OVPI のポーリング機能は、およそ 20,000 の管理対象オブジェクト (パフォーマンスを監視するネットワークデバイスまたはインタフェース) を処理することができます。

ポーリング機能を処理するソフトウェアは、OVPI パフォーマンスマネージャをインストールすると自動的にインストールされます。このソフトウェアは、自動でデータベースサーバーから直接ノードをポーリングすることができます。

管理対象オブジェクトが 20,000 を超える場合や、地理的な理由でリモートポーリングシステムを別途、ポーリング対象のデバイスの近く (特定の地域やユーザーグループなど) に設置したい場合があります。

その場合、各リモートポーリングシステムに **OVPI** リモートポーラーコンポーネントをインストールする必要があります。各リモートポーリングシステムはポーリング機能専用となります。リモートポーラーには **OVPI** データベースがなく、データに対する処理を一切行いません。パフォーマンスデータの収集およびデータベースサーバーへのアップロードのみを行います。

各データベースサーバーは任意の数のリモートポーリングシステムをサポートできます。

OVPI の共存

次の OpenView 製品は OVPI 5.30 と共存することができます。

- Network Node Manager 7.5x
- HP Performance Agent 4.7
- HP Operations agent 7x, 8x

OVPI のインストールの概要

OVPI のインストールと設定に必要な主な作業は次のとおりです。

- **インストール要件の確認**

RDBMS および OVPI をインストールする前に、ハードウェア、ソフトウェア、機能の各要件を決定します (9 ページの「[OVPI のインストールについて](#)」を参照してください)。

事前の作業がすべて完了していることを確認するには、37 ページの「[インストールの前提条件のチェックリスト](#)」を参照してください。

- **Oracle RDBMS のインストール**

事前の作業を完了し、第 3 章「[Oracle 10g Enterprise Edition のインストール](#)」の説明に従って、RDBMS をインストールします。

- **OVPI コンポーネントのインストール**

スタンドアロン環境では、第 4 章「[スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール](#)」の手順に従います。

分散環境では、第 5 章「[分散環境での OVPI のインストール](#)」の手順に従います。

パフォーマンスレポートはインストールによって異なるため、レポートパックのインストールはインストール前の設定処理の一部になっています。インストール前の設定の詳細については、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』で説明しています。

- **OVPI の設定**

OVPI 5.30 のインストールが正常に終了したら、第 6 章「[インストール後の作業](#)」のインストール後の作業をすべて実行し、OVPI の設定を行います。設定処理の詳細については、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』を参照してください。

- **RDBMS のアップグレード**

OVPI 5.30 は Oracle バージョン 10g のみに対応しています。これよりも古いバージョンを使用している場合は、アップグレードが必要です。アップグレードの手順については、第 9 章「[Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード](#)」で説明しています。

- **OVPI のアップグレード**

古いバージョンの OVPI を使用している場合は、バージョン 5.30 にアップグレードします。アップグレードの手順については、第 10 章「OVPI 5.30 へのアップグレード」で説明しています。

システムの役割による一般的なインストール

適切な運用環境（スタンドアロン環境または分散環境）が決まったら、それに従って OVPI コンポーネントをインストールします。

環境において個々のシステムが担う役割（サテライトデータベースサーバー、リモートポーラー、Web クライアントなど）によって、どの OVPI コンポーネントをインストールする必要があるかが決まります。システムの役割を決めるには、そのシステムが実行するタスクの種類を理解する必要があります。

スタンドアロン環境システムの役割

スタンドアロンシステムとは、すべてのデータ処理タスクを実行する単一のシステムのことです。スタンドアロンシステムはすべての役割を実行するため、すべての OVPI コンポーネントをインストールする必要があります。データ収集はデータベースサーバーから実行されるため、スタンドアロンシステムには個別のリモートポーリングシステムは必要ありません。

分散環境システムの役割

分散環境では、システムは次の特殊な役割を実行します。

- **リモートポーリングシステム**：データ収集を実行します。
- **サテライトデータベースサーバー**：以下の処理を実行します。
 - 未処理のデータから割合データへの変換処理
 - 割合データから時間単位データへの要約

通常、サテライトデータベースサーバーは、時間単位以上の頻度で収集されたデータの処理を実行することはありません。一部集約されたデータは中央データベースサーバーにコピーされ、そこで集約が完了します。

- **中央データベースサーバー** : 1 つまたは複数のサテライトサーバーから一部処理済のデータを受信し、時間単位以上のデータ処理を担当し、最終段階までデータを処理します。中央データベースサーバーは、日単位、月単位、および予測データの要約を実行します。
- **リモートデータベースサーバー** (省略可) : 特殊な付加的役割を実行します。
- **Web アクセスサーバー** : OVPI Web サイトをホストし、OVPI クライアントから出されるレポート要求、レポート表示、レポート作成の各タスクを処理します。
- **OVPI クライアント** : レポートの表示と作成、さらに多くのシステム管理タスクを実行する複数のアプリケーションで構成されます。

次の表に、通常インストールする OVPI コンポーネントを環境の種類と役割別に示します。

システムの役割	RDBMS	OVPI データ ベース スキーマ	OVPI パフォーマンス マネージャ	Web アクセス サーバー	OVPI クライアント	リモート ポーター
スタンドアロン環境						
中央データ ベースサーバー	X	X	X (ポーリング 機能を含む)	X (OVPI クライアントを含 む)	該当なし	該当なし
分散環境						
中央データ ベースサーバー	X	X	X	X (省略可)	X (WAS がない 場合)	
サテライト データベース サーバー	X	X	X	X (省略可)	X (省略可)	
リモートデータ ベースサーバー	X	X				

システムの役割	RDBMS	OVPI データ ベース スキーマ	OVPI パフォーマンス マネージャ	Web アクセス サーバー	OVPI クライアント	リモート ポーター
Web アクセス サーバー				X (OVPI クライア ントを含 む)		
リモートポーリ ングシステム						X
<hr/>						
クライアントの み						
OVPI クライア ント					X	

サポートされる OVPI 構成

オペレーティングシステム	RDBMS	OVPI コンポーネント
HP-UX 11.11 HP-UX 11.23 PA-RISC HP-UX 11.23 Itanium	Oracle Database Server 10g (10.2.0.3.0)	すべて
Solaris 9 および 10	Oracle Database Server 10g (10.2.0.3.0)	すべて
Red Hat Enterprise Linux AS 4.0 x86 (SP3)	Oracle Database Server 10g (10.2.0.3.0)	すべて
Windows 2003 Server R2 Windows 2003 Server x86 Standard Edition Windows 2003 Server x86 (Enterprise/ Datacenter)	Oracle Database Server 10g (10.2.0.3.0)	すべて
Windows XP	サポートされていません	クライアントのみ

インストールメディア

OVPI の現バージョンには次のインストールメディアが含まれています。

- OVPI 5.30 インストール DVD (RDBMS インストールおよびマニュアルを含む)
- レポートパック CD



OVPI は、スペースを含む DEPOT パスによるインストールはサポートしていません。たとえば、/my space/DVDROM というパスには「my space」という名前のフォルダーが含まれていますが、このパスを使ってインストールしたりアップグレードしたりすることはできません。

2 インストールの前提条件

インストール前に、『HP OpenView Performance Insight リリースノート』に目を通しておくことを強くお勧めします。リリースノートでは、新機能、バグ修正、OVPI への直前の変更、そのリリースで利用可能なレポートパックのリストについて説明しています。

ライセンスが付与されたインストールに Evaluation を変換する

すでに **Evaluation** の **PI 5.20** バージョンをダウンロードしてインストールしている場合、そのインストール済みのバージョンをライセンスが付与されたインストールに変換するには、次の手順を実行します。

- 1 PI GUI と Web ブラウザをすべて閉じます。
- 2 PI 5.20 製品 DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 3 製品ソフトウェアの「設定」コマンドファイルを検索します。
- 4 コマンド行から、()setup -noeval
- 5 PI Installation GUI が表示された場合は、これを閉じます。
- 6 PI HTTP Server を再起動します。

注：これは再インストールの手順ではありません。**Evaluation** のバージョンは製品バージョンと同じですが、レポートには **Evaluation** バージョンに「無許可ソフトウェア」ウォーターマークが表示され、**ヘルプ**のバージョン情報は製品バージョンと異なります。インストーラによって、インストール済みのバージョンのウォーターマークが表示されなくなります。

インストール前の作業

RDBMS または OVPI コンポーネントをインストールする前に、次の作業を指定の順に完了する必要があります。

タスク 1: オペレーティングシステムソフトウェアの更新

オペレーティングシステムソフトウェアに必要なパッチをすべてインストールします。



必要なパッチの最新の一覧については HP の営業担当者にお問い合わせください。

1 パッチのリリースレベルを確認します。

オペレーティングシステムが適切なリリースレベルであることを確認します。RDBMS をインストールする前に、オペレーティングシステムのパッチをインストールする必要があります。

Windows システムの場合

- a Windows エクスプローラの [ヘルプ] メニューから [バージョン情報] を選択します。
- b バージョンの行に記載されているサービスパックの番号を見つけます。次の例では、xxxx がビルド番号であり n がサービスパックの番号です。

Version 5.0 (Build xxxx:Service Pack n)

Windows 2003 では Service Pack 1 が必要です。

HP-UX システムの場合

次のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swlist -l product | fgrep PH
```

Solaris システムの場合

次のコマンドを入力します。

```
showrev -p
```


タスク 2: 実行中の Java 用パッチの確認

OVPI には Java 1.4.2.13 が含まれており、OVPI のインストール時に自動的にシステムにロードされます。ただし、お使いのオペレーティングシステムで必要なパッチを適用しないと、Java が正常に実行されない可能性があります。

オペレーティングシステムのすべてのパッチをインストールしてから、Oracle データベースまたは OVPI をインストールする必要があります。このマニュアルの印刷時点でテストが完了している必要なパッチを掲載しています。必要なパッチの最新の一覧については HP の営業担当者にお問い合わせください。

インストールされているパッチの確認

システムにインストールされているパッチを確認するには、次のコマンドを入力します。

HP-UX システムの場合：

```
/usr/sbin/swlist -l product | fgrep PH
```

Solaris システムの場合：

```
showrev -p
```

Windows システムの場合：

- a Windows エクスプローラの [ヘルプ] メニューから [バージョン情報] を選択します。
- b バージョンの行に記載されているサービスパックの番号を見つけます。次の例では、*xxxx* がビルド番号であり *n* がサービスパックの番号です。
Version 5.0 (Build *xxxx*:Service Pack *n*)

必要な Java パッチ

お使いのオペレーティングシステム用の最新の Java 関連パッチを検索するには、以下の URL にアクセスしてください。

HP-UX システムの場合：<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> (英語)

Solaris システムの場合：<http://java.sun.com/j2se/1.4/download.html> (「Solaris OS Patches」の項)

Windows システムの場合：<http://windowsupdate.microsoft.com>

URL は予告なく変更されることがあります。

タスク 3: (HP-UX の場合のみ) HP-UX Measurement Interface for 11i 製品のインストール

新しい OVPI 監視機能では、OVPI システムのステータスを適切に監視できるよう、HP-UX Measurement Interface for 11i 製品をインストールする必要があります。HP-UX Measurement Interface for 11i パッケージは、HP-UX Mission Critical Operating Environment (MC-OE) と HP-UX Enterprise Operating Environment のメディアにバンドルされて配布されます。HP-UX アプリケーションリリース配布メディアからも入手できます。

/opt/perf/lib/libnums.sl があれば、必要なファイルはお使いのシステムにインストールされています。

GlancePlus または OpenView Performance Agent がインストールされた HP-UX システムは OVPI 監視機能が必要とするファイルを持っているため、前提となる製品を追加でシステムにインストールする必要はありません。

タスク 4: ネットワーク接続性のためのポート識別

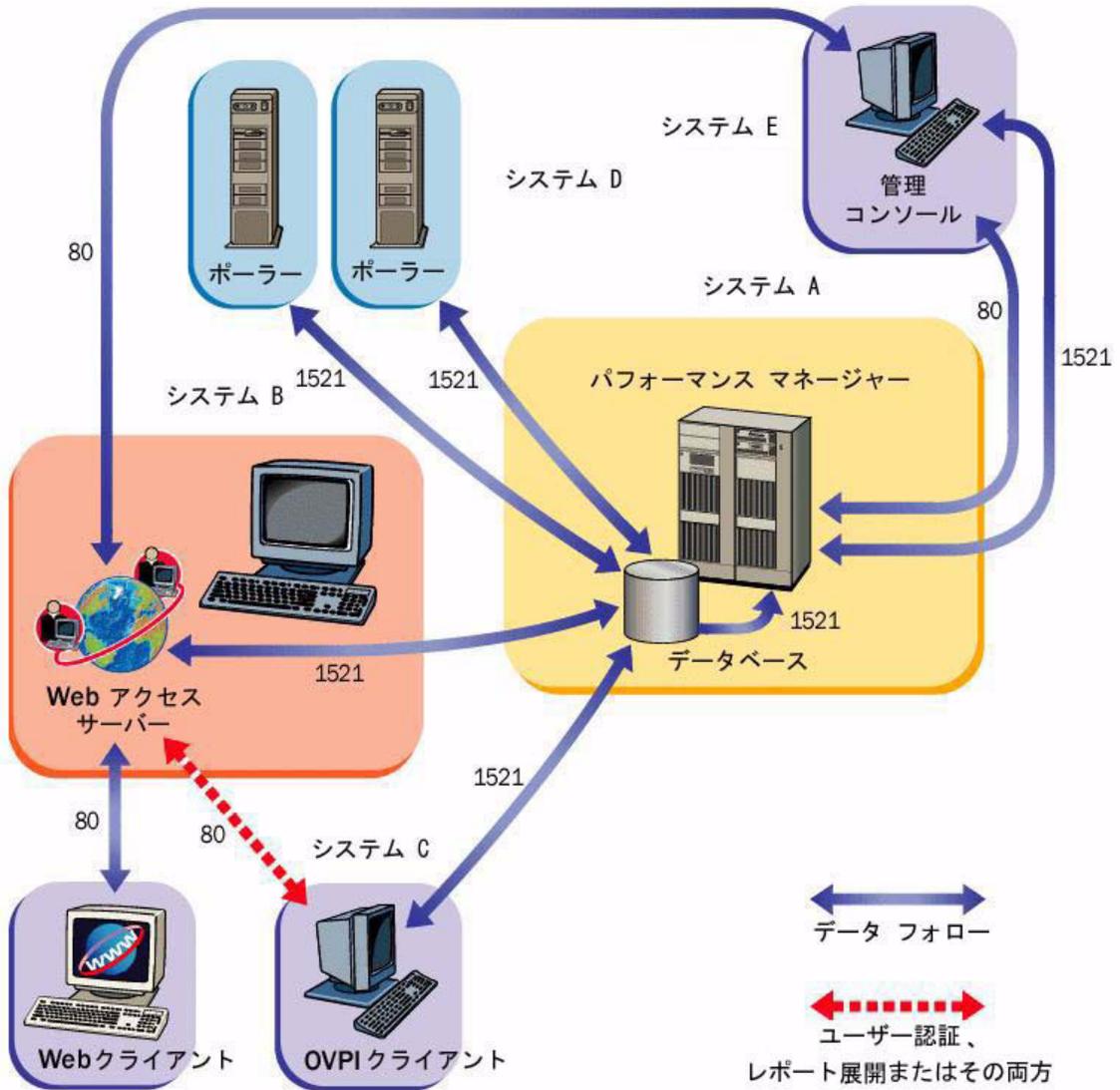
OVPI のシステム間はポートによって接続されます。OVPI は以下のデフォルトのポート番号を使用します。

OVPI コンポーネント	デフォルトのポート番号
Oracle RDBMS	1521 (Windows システム) 1521 (UNIX システム)
Web アクセスサーバー (デフォルトでポート 80 を使用する管理サーバーも含まれます。他の Web サーバーがポート 80 で実行されている場合は、OVPI 用にポート 8080 など他のポートを使用します。)	80 (SSL 非対応) 443 (SSL 対応)
管理コンソール	80



ファイアウォールソフトウェアを使用している場合は、ファイアウォールの OVPI ポートを開く必要があります。手順については、ファイアウォールのマニュアルを参照してください。

次の例は、デフォルトのポート番号を使用した OVPI の構成を示しています。



ポーリングおよび SNMP の接続性

ネットワークからデータを収集するシステムは、中間的なファイアウォールを介してネットワークデバイスに接続する必要があります。リモートポーラーシステムとポーリング対象デバイスはファイアウォールの外側に配置し、リモートポーラーはファイアウォールを介してデータベースサーバーに接続することをお勧めします。こうすることでファイアウォールを介する接続の数が減ります。

サテライトデータベースサーバーが複数のポーリングシステムを管理する場合は、各ポーリングシステムがポーリングするデバイスを分割するための特殊なポーリングポリシーを作成する必要があります。ポーリングポリシーの作成の詳細については、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』を参照してください。

クライアントの接続性

Web ブラウザを使用してレポートを表示するには、システムと Web アクセスサーバー間の HTTP 接続が必要です。

レポートビューアまたはレポートビルダアプリケーションを使用するには、クライアントシステムと Web アクセスサーバーシステム、適切なポート上のデータベースサーバー間の接続性が必要です。クライアントをインストールする場合は、Web アクセスサーバーの参照ページで指定したのと同じ Web アクセスサーバーとポート番号を指定します。Web アクセスサーバーのインストールの詳細については、129 ページの「[Web アクセスサーバーのインストール](#)」を参照してください。

タスク 5: Web アクセスの計画

- 1 サポートされている Web ブラウザを使用していることを確認します。

Web ユーザーは次のいずれかの Web ブラウザに接続できる必要があります。

 - Microsoft Internet Explorer 5.5 以降
 - Mozilla Firefox 1.5 以降
- 2 Java スクリプトが有効になっていることを確認します。

Web ブラウザでは Java スクリプトが有効になっている必要があります。そうでないと、Web アクセスサーバーアプリケーションのナビゲーションフレームを参照できません。

Java スクリプトを有効にするには、Web ブラウザによって以下のいずれかを実行します。

Internet Explorer の場合

- a ブラウザの [ツール] メニューから [インターネットオプション] を選択します。 [インターネットオプション] ダイアログボックスが開きます。
- b [セキュリティ] タブを選択します。 Web コンテンツのゾーンで [インターネット] をクリックし、 [レベルのカスタマイズ] をクリックします。 [セキュリティの設定] ダイアログボックスが開きます。
- c 設定の一覧を下へスクロールし、スクリプトの設定を探します。 [アクティブスクリプト] の下の [有効にする] を選択します。
- d [セキュリティの設定] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。
- e [インターネットオプション] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。

Mozilla Firefox の場合

- a ブラウザの [ツール] メニューから [オプション] を選択します。 [オプション] ダイアログボックスが開きます。
- b [コンテンツ] タブを選択し、 [JavaScript を有効にする] チェックボックスをオンにします。
- c [オプション] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。

タスク 6: SNMPv3 ノード用 SNMP セキュリティパックのインストール

SNMPv3 ノードからデータを収集する場合は、SNMP Research International, Inc. から入手できる SNMP セキュリティパック製品をインストールする必要があります。詳細については、次の SNMP の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.snmp.com>

オペレーティングシステムに合わせて以下のバージョンをインストールしてください。

- Windows システムの場合 : バージョン 16.1.0.35
- UNIX システムの場合 : バージョン 16.1.0.19

インストールに続いて SNMPv3 ノードを設定する必要があります。設定の詳細については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

タスク 7: Network Node Manager との統合

- 1 NNM バージョン 7.5 以降を実行していることを確認します。

お使いのシステムですでに NNM バージョン 7.5 を実行している場合は、OVPI のインストールが可能です。OVPI と NNM でコンポーネントを共有することで、OVPI MIB ブラウザおよび収集ウィザードツールが機能するようになります。これらのツールは古いバージョンの NNM では機能しません。

OVPI をインストールする前に、NNM をバージョン 7.5 以降にアップグレードすることをお勧めします。



NNM 6.4 より前のバージョンの NNM では、OVPI のインストールができません。

- 2 OVPI をインストールする前に NNM プロセスを停止します。

インストール中のエラー発生を回避するため、OVPI をインストールする前に NNM プロセスを停止します。以下の手順に従ってください。

Windows システムの場合

- a Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンから、[プログラム]→[HP OpenView]→[Network Node Manager 管理] とクリックし、[NNM サービス - 停止] を選択します。
- b NNM プロセスが停止されていることを確認します。Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンから、[プログラム]→[HP OpenView]→[Network Node Manager 管理] とクリックし、[NNM サービス - ステータス] を選択します。
- c [サービス] ウィンドウを閉じます。ウィンドウを閉じないと、OVPI サービスのインストールに失敗します。

UNIX システムの場合

- a コマンドプロンプトから以下のように入力します。
ovstop -c
- b NNM プロセスが停止されていることを確認します。コマンドプロンプトから以下のように入力します。
ovstatus -c

タスク 8: Compaq Insight Manager サービスの停止 (HP Compaq システムの場合のみ)

Compaq システムに OVPI をインストールする場合は、Compaq Insight Manager サービスを停止する必要があります。

タスク 9: (Windows システムの場合のみ) HP 独自のメモリー管理デバイスの無効化

お使いの環境に HP 独自のメモリー管理サービスを稼動している Windows システムがあるときは、サービスマネージャを使用してそれらのサービスを「無効」にする必要があります。無効にするサービスは以下のとおりです。

- HpComponent
- HPEventLog
- HPFpcSvc
- HpLerSvc
- HPSdnSvc

タスク 10: (UNIX システムの場合のみ) サポートされているデスクトップを使用しているかの確認

OVPI は、Common Desktop Environment (CDE) をサポートしています。
OVPI は OpenWindows をサポートしていません。

国際化とローカライズの計画

OVPI では、国際化をサポートしています。OVPI は、サポートされているオペレーティングシステムのどの言語バージョンにもインストールできます。データベースサポートは Oracle 向けに国際化されています。

OVPI バージョン 5.30 は、英語、日本語、簡体字中国語でのみ提供されています。

db3 モジュールのインストール (Red Hat Linux システムの場合のみ)

Red Hat Linux システムに OVPI クライアントアプリケーションをインストールする場合は、Linux システムをインストールするときに db3 モジュール (rpm) もインストールする必要があります。このモジュールは Red Hat インストール CD にバンドルされていますが、自動的にインストールされません。OVPI を使用するには、db3 モジュールのインストールが必要です。

インストールの前提条件のチェックリスト

- このリリースの『Performance Insight リリースノート』に目を通してある。
- スタンドアロン環境と分散環境のどちらを使用するかを決定してある。 9 ページの「[運用環境](#)」を参照してください。
- 必要なインストールメディアがすべてそろっている。 26 ページの「[インストールメディア](#)」を参照してください。
- サポートされているシステム構成(オペレーティングシステムと RDBMS)を使用している。 28 ページの「[インストール前の作業](#)」を参照してください。
- 各システムにインストールする OVPI コンポーネントを確認してある。 23 ページの「[システムの役割による一般的なインストール](#)」および 28 ページの「[インストール前の作業](#)」を参照してください。
- オペレーティングシステムに必要なパッチをインストールしてある。 28 ページの「[オペレーティングシステムソフトウェアの更新](#)」を参照してください。
- ネットワークおよびクライアント接続性のためのポート番号を確認してある。 31 ページの「[ネットワーク接続性のためのポート識別](#)」を参照してください。
- Web クライアントでサポートされているブラウザを使用していることを確認し、ブラウザで Java スクリプトを有効にしてある。 33 ページの「[Web アクセスの計画](#)」を参照してください。
- 必要に応じて、SNMP セキュリティパックをインストールしてある。 34 ページの「[SNMPv3 ノード用 SNMP セキュリティパックのインストール](#)」を参照してください。
- NNMを実行しているシステムにOVPIをインストールする場合は、適切なバージョンの NNM を使用していることを確認し、NNM プロセスを停止している。 35 ページの「[Network Node Manager との統合](#)」を参照してください。
- Red Hat Linux システムにインストールする場合は、db3 モジュールがインストールしてある。 29 ページの「[Red Hat Linux 固有のパッチをインストールします。](#)」を参照してください。

- Compaq システムにインストールする場合は、Compaq Insight Manager サービスを停止してある。 36 ページの「[Compaq Insight Manager サービスの停止 \(HP Compaq システムの場合のみ\)](#)」を参照してください。
- HP 独自のメモリー管理サービスを Windows で実行している場合は、それらのサービスを無効にしてある。 36 ページの「[\(Windows システムの場合のみ\) HP 独自のメモリー管理デバイスの無効化](#)」を参照してください。
- UNIX ユーザーの場合は、サポートされているデスクトップを使用している。 36 ページの「[\(UNIX システムの場合のみ\) サポートされているデスクトップを使用しているかの確認](#)」を参照してください。

メモリーおよび記憶領域の要件

次の表に、OVPI コンポーネントに必要な最低限のディスク容量をオペレーティングシステム別に示します。

コンポーネント	HP-UX	Solaris	Windows	Linux
OVPI データベーススキーマ	2500MB	2100MB	2500MB	2000MB
OVPI パフォーマンスマネージャ	840MB	400MB	340MB	400MB
Web アクセスサーバー	810MB	420MB	340MB	400MB
OVPI クライアント	800MB	340MB	1700MB	320MB
リモートポーター	840MB	200MB	130MB	200MB
完全スタンドアロン	2500MB	2200MB	2100MB	2100MB

次の表に、OVPI に必要な最低限のメモリー容量と推奨されるメモリー容量を示します。この要件はもとのシステムサイズでの推奨要件に基づいており、ポーリング要件によって変更される可能性があります。

コンポーネント	最低	推奨
OVPI データベーススキーマ	512MB	1GB
OVPI パフォーマンスマネージャ (OVPI データベーススキーマを含む)	2GB	4GB
管理サーバー	256MB	512MB
OVPI クライアント	それぞれ 256MB ^a	512MB
コマンド行ユーティリティ	256MB ^b	512MB
リモートポーター	256MB	512MB
完全スタンドアロンインストール	4GB	8GB

- a. 複数のコンポーネントを同時に実行する場合は、メモリー要件はそれぞれに必要な容量の合計値になります。たとえば、管理コンソール、レポートビルダ、**Web** アクセスサーバーを 1 つのシステムで同時に実行する場合、最低メモリー要件は **768MB** になります。スタンドアロンインストールでは、**Web** アクセスサーバと管理サーバは同じ **Java** 仮想マシン (**JVM**) のメモリーを使用します。従って、最低限のメモリー容量は **256MB** になります。
- b. コマンド行ユーティリティはメモリーをほとんど使用しません。

OVPI データベーススキーマは、メモリー総量の **50 ~ 60%** に設定されます。管理サーバー、**OVPI** クライアント、コマンド行ユーティリティ、リモートポーターは最小限 (メモリー **1 ~ 2GB**) でインストールされます。残りの処理容量は **OVPI** パフォーマンスマネージャが使用します。この容量がポーリング処理とデータのロードに十分な大きさであることを確認してください。

インストール後にレポートビルダ、レポートビューア、または **Web** アクセスサーバー用のメモリー容量を変更するには、**Web** アクセスサーバーを使用して **Java** の設定を変更します。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

インストールパラメータ値

OVPI では、さまざまなインストールパラメータ用のデフォルト値が用意されています。いずれかのデフォルトを変更するときは、前もって変更点を明確にしておくことでインストールに余分な時間をかけずに済みます。

Windows システムのデフォルトのパス設定を変更する場合は、ディレクトリパスにスペースを入れないようにしてください。

次の表は、変更が可能なパラメータのデフォルトの一覧です。特に記載のないかぎり、パラメータはスタンドアロンインストールと分散インストールの両方に適用されます。

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム の場合	デフォルト値 UNIX システム の場合
インストール先フォルダー OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリです。	C:\OVPI	/usr/ovpi
Oracle TCP/IP ポート番号 Oracle が他のシステムのクライアントおよびサーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート番号です。	5000	2052
データベースデバイス OVPI がデータベースデバイスファイルを作成するディレクトリです (raw デバイスを使用する場合は、デバイスファイルは作成されません)。	Oracle_directory\dbfiles 50%	Oracle_directory/dbfiles 50%
データベースのサイズ データベースデバイスファイルのサイズです。	800MB	800MB
トランザクションログ / データベース使用率	Oracle_directory\dbfiles 50%	Oracle_directory/dbfiles 50%
一時領域 / データベース使用率	Oracle_directory\dbfiles (Windows) 50%	Oracle_directory/dbfiles (UNIX) 50%
キャッシュフォルダー 収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくためのキャッシュディレクトリです。	\$DPIPE_HOME \collect	\$DPIPE_HOME /collect

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム の場合	デフォルト値 UNIX システム の場合
ユーザー名 Web アクセスサーバー管理者の名前です。	trendadm	trendadm
HTTP ポート Web アクセスサーバーとの HTTP 通信に使用するポート番号です。	80	80
Web アクセスサーバーホスト (分散インストールでのみ使用)		
Web アクセスサーバーポート (分散インストールでのみ使用) Web アクセスサーバーが使用する HTTP ポート番号です。	80	80
リモート管理サーバーのポート (分散インストールでのみ使用) データベースホストシステムが使用する HTTP ポート番号です。	80	80

3 Oracle 10g Enterprise Edition のインストール

OVPI をインストールする前に、Oracle RDBMS をインストールして実行しておく必要があります。OVPI 用に作成された Oracle リスナープログラムのインスタンスが実行されていることを確認します。

Oracle のインストールの前提条件

- 1 Oracle のマニュアルを確認します。

Oracle をインストールする前に、Oracle の関連ドキュメントを読み、インストール時に簡単に参照できるよう Oracle のインストールガイドの印刷を検討してください。Oracle のマニュアルは Oracle インストール CD にあります。[ドキュメントの参照] をクリックして、リリースノート、readme ファイル、製品マニュアルを必要に応じて確認します。Oracle のドキュメントは、インターネットでも利用できます (www.oracle.com)。

- 2 データベース管理者に相談します。

できればインストールする前に Oracle データベース管理者 (DBA) に相談してください。データベース管理者なら、OVPI の最適な利用のための Oracle データベースの設計および設定、表領域の作成の手助けをしてくれます。

- 3 一般的なパフォーマンスガイドラインを参照します。

OVPI とともに使用する目的で Oracle をインストールするときは、可能な限り次のガイドラインに従ってください。

- Oracle と OVPI を別々の物理デバイスにインストールします。
- 少なくとも 3 台の異なる物理デバイス上に、データベース制御ファイルのアクティブコピーをそれぞれに 1 つ以上保存します。

- 少なくとも **3** つの **REDO** ロググループを使用します。**REDO** ログは、データベースの使用中に発生するアクティビティを少なくするために、できるだけデバイスごとに分けます。可能な限り、再実行ログを監査してください。
- 可能であれば、システム表領域を別のデバイスに置きます。
- 可能であれば、データとインデックスの各データファイルを別々のデバイスに置きます。
- 可能であれば、アーカイブログファイルを別のデバイスに置きます。



これらの推奨事項はディスクの競合を減らすことを意図したものです。一般に、同時に動くディスクヘッドの数が多いほど、データベースの処理は速くなります。

4 データベースサイズ、記憶領域、メモリーが十分かどうかを確認します。

Oracle をインストールする前に、システムが以下のハードウェア要件を満たしていることを確認します。

- **OVPI データベースのサイズ**

OVPI データベースのサイズは、ポーリングするデバイスの数、収集するデータオブジェクトの量、データの保存期間を考慮して決定します。合計サイズは、さまざまな表領域に配分されます。

システム要件の見積りに役立つサイズ設定スプレッドシートは、最新バージョンのレポートバック **CD** にあります。必要なデータベース全体のサイズを決定するには、インストールする各レポートバックの値と管理対象オブジェクト（デバイス、インタフェース、VPN など）の数を入力します。

サイズ要件の決定は、設定を行うときに必要なハードウェアリソースを正確に算出するために重要です。

- **OVPI データベースのメモリーおよび記憶領域の要件**

すべての **OVPI** コンポーネントを、同一の **UNIX** ファイルシステムまたは **Windows** パーティションにインストールする必要はありません。ただし、特定のコンポーネントをインストールする場合、そのデフォルトの領域は **1** つのファイルシステムまたはパーティションにする必要があります。



OVPI のインストール後に **OVPI** データベースのサイズを拡張する手順については、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **OVPI データベースの最小記憶領域**

データベースサーバーの最小記憶領域要件については、**Oracle** のインストールガイドを参照してください。最初のインストール後、**Oracle Enterprise** の管理コンソールにアクセスし、メモリー領域 (キャッシュ、PGA など) に適切な値を設定できます。

OVPI データベースのサイズは多くの要素によって決まります。レポートパック **CD** で提供されているスプレッドシートを完成させたら、これを使用してデータベースのサイズと構成を算出します。

OVPI を **Oracle** データベースサーバーと同じシステムにインストールする場合は、**OVPI** のインストールで予想合計サイズより小さいデータベースを作成することが可能です。**OVPI** のインストールでは、「**autoextend**」オプションが有効になっている表領域が作成されるため、**Oracle** が必要に応じて **OVPI** データベースの領域を拡張することができます。

OVPI 用 Oracle データベースの作成

この項では、Oracle のインストール方法を手順を追って説明することはありません。インストール手順については、Oracle のインストールガイドを参照し、該当するオペレーティングシステム用の手順に従ってください。

この項では、Oracle のインストールと OVPI で使用する Oracle データベースの作成で検討すべき情報について説明します。

Oracle データベースサーバーを OVPI データベースと同じシステムにインストールする場合は、OVPI のインストールで表領域を作成する必要があります。Oracle データベースサーバーを OVPI データベースとは異なるシステムにインストールする場合（リモートデータベースへのインストール）は、OVPI をインストールする前に、Oracle を使用してそのデータベースサーバー上に表領域を作成する必要があります。

Oracle データベースをインストールして設定し、Oracle を実行してから OVPI のインストールに進みます。OVPI のインストール方法の詳細は、[第 4 章「スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール」](#) または [第 5 章「分散環境での OVPI のインストール」](#) を参照してください。

Oracle データベースサーバーのインストール

Oracle のインストールガイドに記載されているオペレーティングシステム別のインストール手順に従ってインストールします。インストールプロセスでは、何をインストールするか、またどの設定を指定するかを決定する必要があります。

Oracle のインストールに関する一般的なガイドライン

- Oracle 10.2.0.1.0 をインストールします。このプロセスの後半で 10.2.0.3.0 へのアップグレードパッチを適用します。
- Enterprise Edition を選択してインストールする代わりに、[カスタム] を選択してインストールします。これによってインストールするコンポーネントの数が減り、コンポーネントの編集にかかるオーバーヘッドと時間が短くなります。
- Oracle 10g をインストールする場合、OVPI に必要な最小コンポーネントは次のとおりです。インストール時にはグループ化されて表示されます。追加の Oracle コントロールを利用する場合は、追加コンポーネントをインス

トールしますが、それらは **OVPI** には必要ありません。インストール時には、よく使用されるいくつかのオプションコンポーネントが表示されますが、領域に問題がある場合は省略することも可能です。

選択：

- Oracle 10.2.0.1.0
- Enterprise Edition Options 10.2.0.1.0
- Oracle Net Services 10.2.0.1.0
 - Oracle Net Listener 10.2.0.1.0
- Oracle Enterprise Manager Products 10.2.0.1.0
 - Oracle Management Server 10.2.0.1.0 (省略可)
 - Oracle Intelligent Agent 10.2.0.1.0
 - Enterprise Manager Client 10.2.0.1.0
 - Oracle Change Management Pack 10.2.0.1.0 (省略可)
 - Oracle Diagnostics Pack 10.2.0.1.0 (省略可)
 - Oracle Tuning Pack 10.2.0.1.0 (省略可)

選択解除：

- Oracle HTTP Server 10.2.0.1.0 (可能な場合)。別のアプリケーションで必要な場合は、選択解除できないことがあります。

一部のコンポーネントは **Oracle** でインストールが必須であり、自動的に選択された状態で表示されるか淡色表示されます。それらは選択解除しないでください。

適切なコンポーネントを選択および選択解除した後、インストールを続行します。



OVPI のインストールにデータベースのパーティショニングは必須ではありませんが、データベースのパーティショニングを使用することをお勧めします。

タスク 1: Oracle データベースの作成

[データベースの作成] ウィンドウが開いたら、**[はい]** をクリックします。



OVPI をインストールする前に、データベースを作成しておく必要があります。

タスク 2: Oracle データベースの設定

Oracle でデータベースを自動で作成することを選択した場合、データベース設定プロセスで以下のとおり指定することで、簡単に機能的なデータベースが作成されます。より堅固なデータベースの作成方法については、Oracle データベース管理者に問い合わせてください。

- プロトコル: **TCP** を指定
- ポート番号: **1521** を指定
- ネットサービス名: **OVPI** データベースの **Oracle SID** と一致させる必要があります。サイトでそれができない場合は、追加の手順について **59** ページの **「tnsnames.ora ファイルの編集」** を参照してください。

[データベース・コンフィギュレーション・アシスタント: ようこそ] ウィンドウが開いたら、以下の手順に従います。

- 1 操作のステップで **[データベースの作成]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
- 2 データベーステンプレートのステップで **[汎用]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
- 3 データベース識別情報のステップで **[グローバル・データベース名]** および **[SID]** を入力し、**[次へ]** をクリックします。



グローバルデータベース名と **SID** が異なると、作成された **tnsnames.ora** ファイルを後で **OVPI** 用に変更する必要があります。グローバルデータベース名と **SID** が一致していない、または **tnsnames.ora** ファイルを変更しないと、レポートバックは正しくインストールされないため、これは重要です。

- 4 データベース接続オプションのステップで **[専用サーバー・モード]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
- 5 初期化パラメータのステップで物理メモリー量を指定します。

- **[標準]** をクリックします。デフォルト設定を **60%** から **70%** に変更します。通常、**Oracle** データベースにできるだけ多くのメモリーを割り当てます。
 - **[キャラクタ・セット]** タブをクリックします。**[Unicode (AL32UTF8) を使用]** をクリックし、**[次へ]** をクリックします。
- 6 データベース記憶域のステップで **[次へ]** をクリックします。これによって、**OVPI** データベースを構成する物理ファイルをファイルシステム全体に分散させることができます。推奨事項については、**Oracle** のマニュアルを参照してください。
 - 7 作成オプションのステップで **[データベースの作成]** をクリックしてオンにし、**[終了]** をクリックします。
 - 8 データベースのサマリを確認し、インストールを終了します。
 - a **[確認]** ウィンドウが開き、作成されるデータベースの概要が表示されます。**[OK]** をクリックします。
 - b データベースの作成が完了すると、**[データベース・コンフィギュレーション・アシスタント]** ウィンドウが開きます。**SYS** と **SYSTEM** のアカウントパスワードを入力し、**[終了]** をクリックします。
 - c **[インストールの終了]** ウィンドウが開きます。**[終了]** をクリックします。

タスク 3: Oracle 10.2.0.3 パッチセットの適用

OVPI をインストールして実行する前に、インストール済みの **Oracle** を **10.2.0.3.0** にアップグレードする必要があります。パッチをダウンロードしたら、**README** ファイルを開き、該当するオペレーティングシステム用の手順に従います。

タスク 4: listener.ora ファイルの編集

OVPI をインストールするには、**tnsnames.ora** ファイルを編集する必要があります。**tnsnames.ora** ファイルを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 次のいずれかのディレクトリに格納されている **tnsnames.ora** ファイルを探します (オペレーティングシステムにより異なる)。

Windows システムの場合

```
oracle_install_dir\network\admin
```

UNIX システムの場合

```
oracle_install_dir/network/admin
```

この例では、*oracle_install_dir* は Oracle クライアントのインストール先ディレクトリです。

- 2 テキストエディタを使用してファイルを開きます。
- 3 Oracle のインストール先システムの GLOBAL_DBNAME のエントリを追加します。

次の例では、Oracle のインストール先システムの GLOBAL_DBNAME は **PI52** です。例では、太字が追加する必要のある行を示しています。

```
# listener.ora Network Configuration File:/opt/oracle10g/
network/admin/listener.ora
# Generated by Oracle configuration tools.
```

```
SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (SID_NAME = PLSExtProc)
      (ORACLE_HOME = /opt/oracle10g)
      (PROGRAM = extproc)
    )
  )
```

```
SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (GLOBAL_DBNAME= PI52)
      (SID_NAME = PI52)
      (ORACLE_HOME = /opt/oracle10g)
    )
  )
```

```
LISTENER =
  (DESCRIPTION_LIST =
    (DESCRIPTION =
      (ADDRESS_LIST =
        (ADDRESS = (PROTOCOL = IPC) (KEY = EXTPROC))
      )
    )
  (ADDRESS_LIST =
```

```
(ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST =
dbl.ackcat.com) (PORT = 1521))
)
)
)
```

- 4 **listener.ora** ファイルを保存します。
- 5 次の手順に従ってリスナーを再起動します。

Windows システムの場合

- [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] をダブルクリックします。[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- [サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- リスナープログラムとデータベースサーバーを選択して再起動します。

UNIX システムの場合

コマンドプロンプトで次のように入力してリスナープログラムを再起動します。

```
>lsnrctl stop
> lsnrctl start
```

タスク 5: 表領域の作成

Oracle データベースサーバーを **OVPI** データベースと同じシステムにインストールする場合、**OVPI** のインストール時に自動的に表領域を作成するか、または **Oracle** を使用して手動で作成します。**OVPI** のインストール時に表領域を作成すると、ファイルシステム設定パラメータは制限されますが、プロセスはより単純です。表領域を手動で作成すると、**Oracle** のすべてのオプションを使用できるため、作成する方法と場所を完全に制御できますが、手順がより複雑になるため、**Oracle** データベース管理者の協力のもとでのみ行ってください。

Oracle データベースサーバーを OVPI データベースとは異なるシステムにインストールする場合（リモートデータベースへのインストール）は、OVPI をインストールする前に、Oracle を使用してそのデータベースサーバー上に表領域を作成する必要があります。



表領域を手動で作成する場合は、サポートに問い合わせるか、Oracle データベース管理者に OVPI で使用する表領域を作成してもらうことをお勧めします。手動での表領域作成では、表領域名を以下に示す名前と正確に一致させる必要があります。

表領域のサイズ設定のガイドライン

この項のガイドラインは、OVPI データベース全体を特定のサイズで拡張することを検討する場合に重要です。



OVPI のインストール後に表領域のサイズを変更することができます。詳細は、112 ページの「(省略可能)特定の Oracle 設定パラメータの変更」を参照してください。

次の表は、Oracle 表領域およびデータベースに対する表領域の割合を示しています（メインデータベースの最小サイズを 800MB とした場合）。

表領域	データベース全体に対する割合
dpipe_default_seg	2%
dpipe_property_ind_seg	2%
dpipe_property_seg	2%
dpipe_upload_ind_seg	3%
dpipe_upload_seg	3%
dpipe_rate_ind_seg	10%
dpipe_rate_seg	10%
dpipe_summary_ind_seg	10%
dpipe_summary_seg	10%
dpipe_overflow_seg	30%

表領域	データベース全体に対する割合
dpipe_archive_ind_seg	6%
dpipe_archive_seg	6%
dpipe_event_ind_seg	2%
dpipe_event_seg	4%
データベースの合計サイズ	100%

次の表は、上記の表の割合とエクステントサイズルールを使って 10GB のデータベースを設定する場合の例です。

表領域	初期表領域サイズ	エクステント
dpipe_default_seg	20MB	10MB
dpipe_property_ind_seg	20MB	10MB
dpipe_property_seg	20MB	10MB
dpipe_upload_ind_seg	31MB	15MB
dpipe_upload_seg	31MB	15MB
dpipe_rate_ind_seg	102MB	51MB
dpipe_rate_seg	102MB	51MB
dpipe_summary_ind_seg	102MB	51MB
dpipe_summary_seg	102MB	51MB
dpipe_overflow_seg	307MB	154MB
dpipe_archive_ind_seg	61MB	30MB
dpipe_archive_seg	61MB	30MB
dpipe_event_ind_seg	20MB	10MB
dpipe_event_seg	41MB	20MB

表領域	初期表領域サイズ	エクステント
データベース合計	10GB	デフォルト
TEMP	40GB	デフォルト
UNDO	10GB	デフォルト

エクステントサイズルールは初期表領域サイズの 50% 未満か 1 GB 未満になります。たとえば、80 GB のデータベースでは、`dpipes_overflow_seg` の初期サイズは 24 GB で、エクステントは初期表領域サイズの 50% ではなく、1 GB になります。

HP-UX と Solaris の場合、データおよび 32K ブロックサイズのプロパティ表領域と 8K ブロックサイズのインデックス表領域を作成する必要があります。Windows と Linux の場合、データおよび 16K ブロックサイズのプロパティ表領域と 8K ブロックサイズのインデックス表領域を作成する必要があります。`dpipes_default_seg` の表領域も、データの表領域と同じブロックサイズにします。

表領域の作成

表領域を作成するには、以下の手順に従うか、Oracle Enterprise Manager を使用します。

- 1 **SQL*Plus** を使用して次のコマンドを入力し、`dpipes_default_seg` 表領域と `dsi_dpipes` ユーザーを作成して `dsi_dpipes` ユーザーに必要な権限を与えます。

```
SQL> CREATE TABLESPACE dpipes_default_seg
DATAFILE 'dpipes_default_seg.dbf' SIZE 500M REUSE
AUTOEXTEND ON NEXT 250M MAXSIZE UNLIMITED BLOCKSIZE 32K
LOGGING ONLINE PERMANENT
EXTENT MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE
SEGMENT SPACE MANAGEMENT AUTO;
SQL> CREATE USER dsi_dpipes IDENTIFIED BY dsi_dpipes DEFAULT
TABLESPACE dpipes_default_seg TEMPORARY TABLESPACE temp
PROFILE DEFAULT ACCOUNT UNLOCK;
SQL> GRANT connect TO dsi_dpipes;
SQL> GRANT dba TO dsi_dpipes;
SQL> GRANT exp_full_database TO dsi_dpipes;
SQL> GRANT imp_full_database TO dsi_dpipes;
SQL> GRANT unlimited_tablespace TO dsi_dpipes;
SQL> GRANT select any table TO dsi_dpipes;
```

```

SQL> GRANT select any dictionary TO dsi_dpipe;
SQL> GRANT execute ON sys.dbms_lock TO dsi_dpipe;
SQL> COMMIT;
SQL> CONNECT dsi_dpipe/dsi_dpipe;

```

Oracle データベース管理者が **dsi_dpipe** への **dba** 権限の付与を許可する場合もあります。その場合、データベース管理者と協力して **OVPI** 用に以下の権限セットを設定してください。

Grant < 権限 >	To < 名前 >
connect	dsi_dpipe
resource;	dsi_dpipe
create session	dsi_dpipe
create table	dsi_dpipe
create view	dsi_dpipe
create procedure	dsi_dpipe
create trigger	dsi_dpipe
create sequence	dsi_dpipe
alter session	dsi_dpipe
select any table	dsi_dpipe
select any dictionary	dsi_dpipe
execute ON sys.dbms_lock	dsi_dpipe

また、領域不足を防止するために、表領域の使用可能な拡張制限を以下のように変更する必要がある場合もあります。

```

user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_default_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_property_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_property_ind_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_summary_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_summary_ind_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_rate_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_rate_ind_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_upload_seg;
user dsi_dpipe quota unlimited on dpipe_upload_ind_seg;

```

- 2 **dsi_dpipe** ユーザーで以下の表領域を作成します。

- dpipe_property_ind_seg
- dpipe_property_seg
- dpipe_upload_ind_seg
- dpipe_upload_seg
- dpipe_rate_ind_seg
- dpipe_rate_seg
- dpipe_summary_ind_seg
- dpipe_summary_seg
- dpipe_overflow_seg
- dpipe_archive_ind_seg
- dpipe_archive_seg
- dpipe_event_ind_seg
- dpipe_event_seg

以下に **SQL*Plus** を使用して **dpipe_property_ind_seg** 表領域を作成する方法の 1 例を示します。

```
SQL> CREATE TABLESPACE dpipe_property_ind_seg
DATAFILE 'dpipe_property_ind_seg.dbf' SIZE 200M REUSE
AUTOEXTEND ON NEXT 100M MAXSIZE UNLIMITED BLOCKSIZE 8K
LOGGING ONLINE PERMANENT
EXTENT MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE
SEGMENT SPACE MANAGEMENT AUTO;
```

この例では、**200MB** の表領域を作成しています。データベースのサイズに基づいて表領域の適切なサイズを設定する方法については、**52** ページの「[表領域のサイズ設定のガイドライン](#)」を参照してください。

次の表に、設定パラメータとそれぞれの推奨値を示します。
V\$SYSTEM_PARAMETER テーブルを照会すると、パラメータの最新の値一覧を入手できます。

パラメータと説明	推奨値
<p>SGA_MAX_SIZE</p> <p>Oracle データベースが使用するメモリの最大量。このメモリは共有メモリで、すべての Oracle サーバードキュメントによって使用されます。</p> <p>共有メモリ = SGA サイズの 40% バッファキャッシュ = SGA サイズの 40% ラージプール = SGA サイズの 12% Java プール = SGA サイズの 8%</p>	全システムメモリの 70%
<p>PGA_AGGREGATE_TARGET (M)</p> <p>インスタンスに関連付けられているすべてのサーバードキュメントが使用できるターゲット集合 PGA メモリ。</p>	200M
<p>DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT</p> <p>順次スキャン時に 1 回の I/O 操作で読み取られる最大ブロック数 (テーブルスキャン時の I/O を最小限に抑えることができる)。</p>	ストライプサイズ (KB) ^a / DB_BLOCK_SIZE (KB) ^b
<p>WORKAREA_SIZE_POLICY</p> <p>作業領域のサイズの設定と、作業領域をチューニングするモードの制御のためのポリシー。</p>	AUTO
<p>DB_16K_CACHE_SIZE (Windows)</p> <p>一次ブロックサイズを持つバッファのデフォルトバッファプールのサイズ。</p> <p>DB_32K_CACHE_SIZE (UNIX)</p> <p>32K バッファのキャッシュのサイズ。</p>	使用可能なバッファ キャッシュの 95% ^c

- 58 ページの「ストライプサイズを決定します。」を参照してください。
- 58 ページの「データベースブロックサイズを決定します。」を参照してください。
- 58 ページの「キャッシュサイズを決定します。」を参照してください。

- 3 ストライプサイズを決定します。

RAID アレイはストライピングを使用してパフォーマンスを高めています。ストライピングはファイルを分割して、複数のディスクドライブに分散する技術です。ストライピングを使用すると、ディスクから高速にデータを取り出すことができます。

ストライプサイズは、ストライピングで使用されるブロックのサイズです。この値は、**2KB ~ 512KB** (以上) で、**2** の累乗の範囲で指定できます。ストライプサイズについては、データベース管理者にお問い合わせください。

- 4 データベースブロックサイズを決定します。

DB_BLOCK_SIZE を決定するには、以下の SQL*Plus コマンドを入力します。

```
SELECT value
FROM   V$PARAMETER
WHERE  name = 'db_block_size';
```

- 5 キャッシュサイズを決定します。

使用可能なバッファキャッシュの 95% を算出するには、以下の SQL*Plus コマンドを入力します。

```
SELECT (dc.CURRENT_SIZE + fm.CURRENT_SIZE) * 0.95
FROM   V$SGA_DYNAMIC_FREE_MEMORY fm,
       V$SGA_DYNAMIC_COMPONENTS dc
WHERE  dc.COMPONENT = 'buffer cache';
```

Oracle のインストールと設定が完了すれば、OVPI をインストールできます。

tnsnames.ora ファイルの編集

グローバルデータベース名と OVPI データベースの **SID** が一致しない場合は、**tnsnames.ora** ファイルを以下のように編集する必要があります。

- 1 次のいずれかのディレクトリに格納されている **tnsnames.ora** ファイルを探します (オペレーティングシステムにより異なる)。

Windows システムの場合

```
oracle_install_dir\network\admin
```

UNIX システムの場合

```
oracle_install_dir/network/admin
```

この例では、**oracle_install_dir** は Oracle クライアントのインストール先ディレクトリです。

- 2 テキストエディタを使用してファイルを開きます (または、**Oracle Net Manager** を使用してサービス名を作成します)。
- 3 Oracle のインストール先システムの **SERVICE_NAME** のエントリを追加します。

▶ **SERVICE_NAME** が機能しないときは、**SID** を使用してシステムエントリを定義します。

次の例では、Oracle のインストール先システムの **SERVICE_NAME** が **PI51** で、**HOST** は **dbl.ackcat.com** です。

```
# This is a sample TNS entry in the tnsnames.ora file.
# Note that the key is the same as the SERVICE_NAME; this
# is necessary for OVPI applications to find the correct
# server entry.
PI51 =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST =
db1.ackcat.com) (PORT = 1521))
    )
    (CONNECT_DATA =
      (SERVICE_NAME = PI51)
    )
  )
```

- 4 **tnsnames.ora** ファイルを保存します。

リモート Oracle データベースの設定

通常は同じデータベースサーバーに OVPI データベースと OVPI パフォーマンスマネージャをインストールします。同じサーバーにインストールしている場合は、この項は省略してください。

OVPI データベースを OVPI パフォーマンスマネージャとは別にインストールすることを「リモート Oracle データベース」と呼びます。この項では、Oracle データベースをリモートで使用するための設定方法について説明します。



Oracle 10.2.0.3.0 を使用する必要があります。Oracle データベースの以前のバージョンで OVPI 5.30 を使用するには、アップグレードが必要です。以下の手順で説明する 10.2.0.3.0 パッチセットをインストールしてください。

リモート Oracle データベースを設定するには、次のタスクを実行します。

タスク 1: インストールプログラムの起動と Oracle 10g クライアントのインストール

インストール手順については、Oracle のマニュアルを参照してください。

タスク 2: リモート Oracle データベースを指定するようにするための Oracle クライアントの設定

- 1 [Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ] ウィンドウで [いいえ] を選択して、[次へ] をクリックします。[ネット・サービス名の構成 - データベース・バージョン] ウィンドウが開きます。
- 2 [Oracle9i またはそれ以降のデータベースまたはサービス] (デフォルト) のままで、[次へ] をクリックします。[ネット・サービス名の構成 - サービス名] ウィンドウが開きます。
- 3 [サービス名] フィールドにデータベースのサービス名を入力し、[次へ] をクリックします。[ネット・サービス名の構成 - プロトコルの選択] ウィンドウが開きます。



ネットサービス名と SID 名が一致しない場合は、59 ページの「[tnsnames.ora ファイルの編集](#)」に記載されている手順に従います。

- 4 [TCP] (デフォルト) のままで、[次へ] をクリックします。[ネット・サービス名の構成 - TCP/IP プロトコル] ウィンドウが開きます。

- 5 データベースのあるコンピュータのホスト名を入力し、**[標準のポート番号の 1521 を使用]**(デフォルト)のままで**[次へ]**をクリックします。**[ネット・サービス名の構成 - テスト]**ウィンドウが開きます。

タスク 3: Oracle データベースへの接続テスト

- 1 **[ネット・サービス名の構成 - テスト]**ウィンドウで**[はい。テストを実行します。]**を選択し、**[次へ]**をクリックします。**[接続]**ウィンドウに、テストが成功したかどうかが表示されます。通常、最初のテストは失敗します。
 - a テストが失敗した場合は、**[戻る]**をクリックして設定した情報を確認します。リモート Oracle サーバーで作成済みの OVPI データベース用に指定した **dsi_dpiped** ユーザー名およびパスワードを入力します。
 - b テストが正常終了したら、**[次へ]**をクリックします。**[ネット・サービス名の構成 - ネット・サービス名]**ウィンドウが開きます。

タスク 4: インストールの終了

- 1 **[ネット・サービス名の構成 - ネット・サービス名]**ウィンドウでネットサービス名を入力し、**[次へ]**をクリックします。**[ネット・サービス名の構成 - 別のネット・サービス名]**ウィンドウが開きます。
- 2 **[いいえ]**を選択して**[次へ]**をクリックします。**[ネット・サービス名の構成が終了しました]**ウィンドウが開きます。
- 3 **[次へ]**をクリックします。**[Oracle Net Configuration Assistant: 完了]**ウィンドウが開きます。
- 4 **[完了]**をクリックします。**[インストールの終了]**ウィンドウが開きます。
- 5 **[終了]**をクリックします。Oracle データベースを 10.2.0.3.0 にアップグレードする必要がある場合は、**タスク 5**に進みます。それ以外は**タスク 6**に進みます。

タスク 5: Oracle データベースへのパッチセットの適用 (Oracle 10.2.0.3.0 へのアップグレード)

49 ページの「**Oracle 10.2.0.3 パッチセットの適用**」に記載されている手順に従って、パッチをインストールします。

タスク 6: Oracle クライアントシステムからリモート Oracle データベースへの接続テスト
以下の SQL*Plus コマンドを入力します。

```
sqlplus system/password@oracle_SID_value
```

この例では、*system* は Oracle ユーザー、*password* は Oracle ユーザーのパスワード、*oracle_SID_value* は OVPI データベース用の Oracle SID の値です。

タスク 7: Oracle データベースサーバーでの dsi_dpipe ユーザーおよび表領域の作成

- 1 dsi_dpipe ユーザーを作成して、特定の権限を付与します。
- 2 dsi_dpipe ユーザーで特定の表領域を作成します。
51 ページの「[表領域の作成](#)」の手順に従ってください。

タスク 8: OVPI システムへの OVPI データベースのインストール



Oracle Client がインストールされているシステムで OVPI インストールウィザードを実行する場合は、最低限、[コンポーネントの選択] ウィンドウで **[OVPI データベーススキーマ]** および **[パフォーマンスマネージャ]** チェックボックスを選択する必要があります。これで、スキーマがリモートデータベースにインストールされ、OVPI でリモートデータベースを使用できるよう正しく設定されました。

実行しているインストールの種類によっては、その他のチェックボックスも選択できます。たとえば、これがスタンドアロンインストールの場合、ウィンドウの 4 つすべてのチェックボックスを選択します。

インストール後の作業

- 1 Oracle リスナープログラムおよびデータベースを起動します。

リモートデータベースを使用する場合は、データベースとリスナーが Oracle データベースサーバー上で実行されていること、リスナーが OVPI クライアントシステム上で実行されていること、接続性が確認されていることが必要です。

以下の作業は、10.2.0.3 パッチセットの適用後、OVPI のインストール前に行ってください。順序が異なると、OVPI でシステムテーブル IND_ONLINE\$ が見つからないというエラーが表示されます。

- a リスナーを起動します。

Windows システムの場合

- [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] をダブルクリックします。[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- [サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- リスナープログラムとデータベースサーバーを選択して起動します。

UNIX システムの場合

- b コマンドプロンプトから次のように入力してリスナープログラムを起動します。

```
>lsnrctl start
```

- c 次のように入力し、SQL*PLUS を使用して sysdba としてログオンします。

```
>sqlplus/nolog
SQL>connect sys/manager as sysdba
```

- d 次のように入力してデータベースを起動します。

```
SQL>shutdown
SQL>startup migrate
```

- 2 分散システムで共通キャラクタセットを使用します。

分散型構成では、中央データベースサーバー、サテライトデータベースサーバー、およびポーリングシステムが異なるオペレーティングシステムプラットフォームにインストールされていることがあります。オペレーティングシステム間でデフォルトのデータベースキャラクタセットが異なる場合があるため、必ずすべてのデータベースインスタンスと **OVPI** クライアントが共通のキャラクタセットを使用するようにします。

- 3 **Oracle** が動作していることを確認します。

Windows システムの場合

- a [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] ウィンドウ、[サービス] ウィンドウの順に開きます。
- b **Oracle** サービスを探します (<*db name*> は **OVPI** データベースの名前)。

```
Oracle OraHome 10 TNSListener  
OracleService <db name>
```

[状態] は **[開始]** になっているはずです。

UNIX システムの場合

- a コマンド行で以下を入力します。
- b 結果リストに、リスナープログラムと、その他の一連の **Oracle** プロセスが表示されることを確認します。

```
ps -ef | grep -i oracle  
  
$oracle/home/bin/tnslsnr  
ora_xxx_<sid value>
```

この例では、*xxx* はプロセス名、<*sid value*> は **Oracle** システム識別子です。プロセスがリスト内に表示されない場合、データベースが稼動していません。

Oracle の開始と停止

Oracle の開始

Windows システムの場合

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] アイコンをダブルクリックします。[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- 2 [サービス] アイコンをダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- 3 次のサービス名を右クリックします。

```
Oracle OraHome 10 TNSListener  
OracleService <db name>
```

この例では、<db name> は OVPI データベースの名前です。これは OVPI を実行するために最小限のサービスセットです。

- 4 ショートカットメニューから [開始] を選択します。

 システムを再起動したときに Oracle サービスを自動的に開始するには、以下の手順に従います。

- 1 サービス名を右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 2 [スタートアップの種類] リストから [自動] を選択します。

UNIX システムの場合

UNIX システムで Oracle を開始するには、以下の手順に従います。

- 1 Oracle ユーザーとしてログインし、Oracle の home/bin ディレクトリから以下のコマンドを入力します。

```
sqlplus
```

- 2 ユーザー名を入力します。

```
sys as sysdba
```

- 3 適切なパスワードを入力します。
- 4 次のコマンドを入力します。

```
startup
```

これで、\$Oracle_SID で指定したデータベースが開始します。

Oracle の停止

Windows システムの場合

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] をダブルクリックします。[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- 2 [サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- 3 次のサービス名を右クリックします。

```
Oracle OraHome 10 TNSListener  
OracleService <db name>
```

この例では、<db name> は OVPI データベースの名前です。

- 4 ショートカットメニューから [停止] を選択します。

UNIX システムの場合

- 1 Oracle ユーザーとしてログインし、Oracle の home/bin ディレクトリから以下のコマンドを入力します。

sqlplus

- 2 次のようにユーザー名を入力します。

```
sys as sysdba
```

- 3 適切なパスワードを入力します。
- 4 以下のいずれかのコマンドを入力します。

- **shutdown**

ソフトシャットダウンを実行し、実行中のすべてのタスクを正常に終了します。

- **shutdown immediate**

ユーザーとタスクが現在の動作を終了した後にシステムをシャットダウンします。

- **shutdown abort**

ハードシャットダウンを実行し、すべてのタスクをできるだけ早く終了します。

- 5 「exit」と入力し、sqlplus を終了します。

Oracle のインストールのトラブルシューティング

Oracle のインストール先ディレクトリにあるエラーログファイルは、インストールに失敗した原因の判断に役立ちます。**Oracle** は、システムが起動したときと **Oracle** のエラーが発生したときに、その都度このファイルにメッセージを書き込んでいます。

Oracle のログファイルの詳細およびアクセス方法と使用方法については、**Oracle** のインストールガイドを参照してください。問題の原因が特定できたら、**Oracle** のマニュアルで詳細な手順を確認します。

UNIX システムの場合、このエラーログは `$ORACLE_BASE/oraInventory/logs` にあります。

4 スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール

OVPI インストールプログラムの起動

OVPI のインストールプログラムには、OVPI コンポーネントとリモートポーターをインストールするためのオプションが用意されています。データベースをアップグレードするには、[第 9 章「Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード」](#)を参照してください。OVPI およびリモートポーターをアップグレードするには、[第 10 章「OVPI 5.30 へのアップグレード」](#)を参照してください。

以下の手順に従ってください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。

Windows システムの場合

管理者アカウントを使用してログオンします。

UNIX システムの場合

root としてログオンします。

- 2 OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。

UNIX システムの場合

次の表に示す指示に従って DVD をマウントします。

オペレーティングシステム	コマンド
Solaris	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<code>root</code> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre>mkdir /dvdrom mount -r /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</pre> <p>この例では、<code>dvd_devicename</code> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
HP-UX	<p>SAM ユーティリティを使用して DVD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。</p> <pre>mkdir /dvdrom mount /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</pre> <p>この例では、<code>dvd_devicename</code> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
Red Hat Linux	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<code>root</code> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre>mount -r /dev/dvdrom <mount_directory></pre> <p>この例では、<code>mount_directory</code> は DVD-ROM の内容が保存されているディレクトリです。</p>

Solaris システムの場合

- a 次のコマンドを入力して `dvd_label` を表示します。

```
ls -l /dvdrom
```

- b 次のコマンドを入力してディレクトリを変更します。

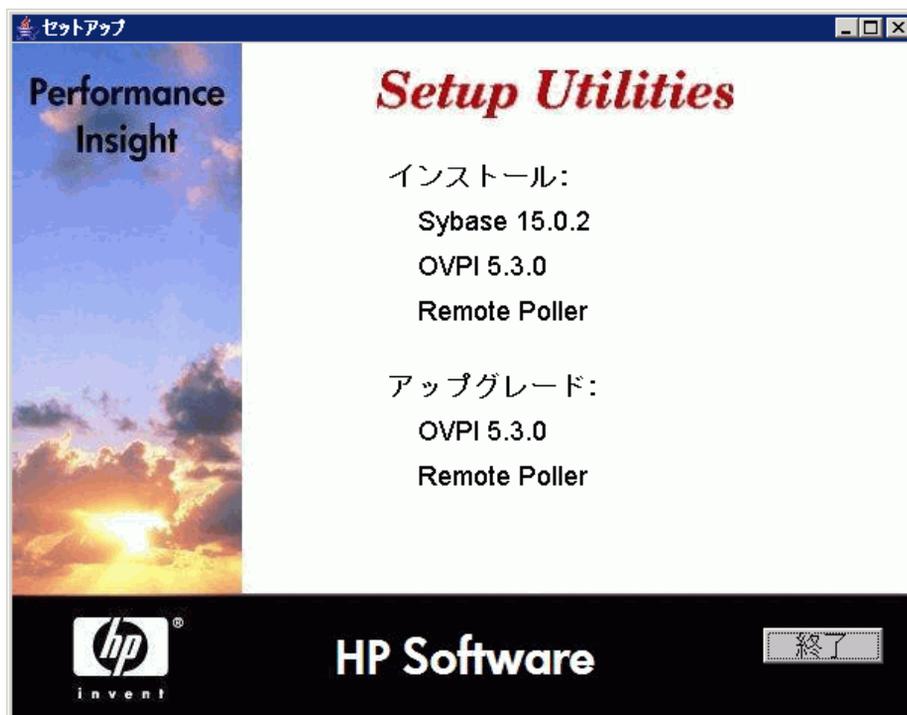
```
dvd /dvdrom/dvd_label
```

この例では、`dvd_label` は DVD 名です。

- 3 インストールプログラムを起動します。

Windows システムの場合

OVPI インストール DVD を挿入します。セットアッププログラムが自動的に起動します。自動的に起動しない場合は、DVD の最上位のフォルダーにある **setup.exe** をダブルクリックします。[Setup Utilities] ウィンドウが開きます。



ウィンドウが正しく表示されない場合は、次の手順に従って Windows フォントのテキストサイズを変更します。

- [コントロールパネル] ウィンドウから、[画面] アイコンをダブルクリックします。
- [設定] タブを選択し、[詳細] をクリックします。
- [全般] タブを選択し、[フォントサイズ] リストから [小さいフォント] を選択します。

UNIX システムの場合

セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力して起動します。

./setup

[Setup Utilities] ウィンドウが開きます。

引き続きスタンドアロン環境に OVPI をインストールするには、73 ページの「次の手順」に進みます。

分散環境に OVPI をインストールするには、第 5 章「分散環境での OVPI のインストール」に進みます。

次の手順

スタンドアロン環境に OVPI をインストールする場合は、すべての OVPI コンポーネントを 1 つのシステムにインストールします。

OVPI のインストール手順は Windows システムと UNIX システムでほとんど同じです。違いについては、各指示に注釈として記載されています。

リモートの Oracle データベースを使用してインストールするときは、[第 5 章「分散環境での OVPI のインストール」](#)の指示に従います。



OVPI のインストールを開始する前に、Oracle の dbconsole プロセスを停止する必要があります。次を実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop dbconsole
```

この手順は、インストール中に OVPI インストーラによって Oracle データベースが再起動されるため、必要になります。dbconsole プロセスが実行されていると、OVPI のインストールが失敗します。

タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

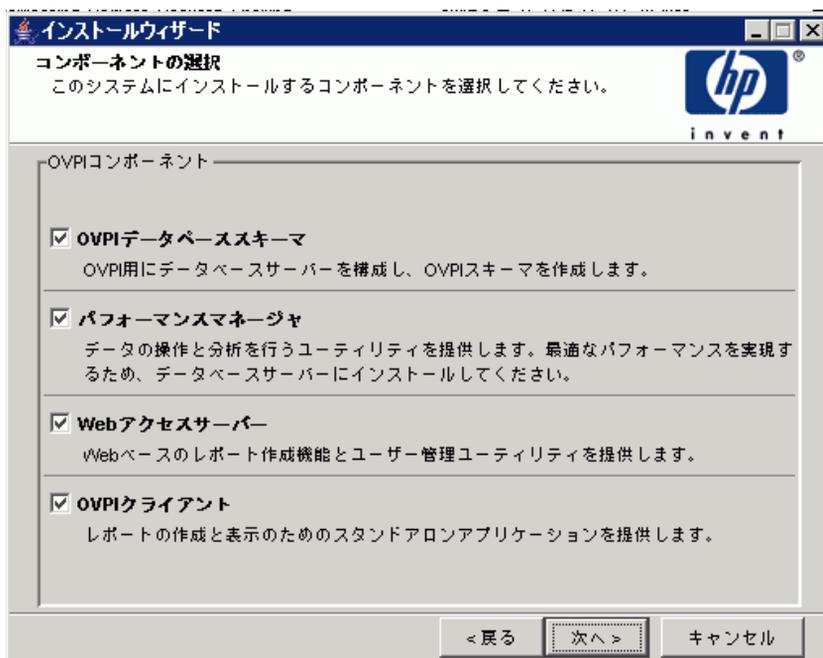
- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。[セットアップ] ウィンドウが開きます。

- 2 ウィンドウの [インストール] セクションから **[OVPI 5.3.0]** を選択します。
[ようこそ] ウィンドウが開きます。



- 3 [ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。

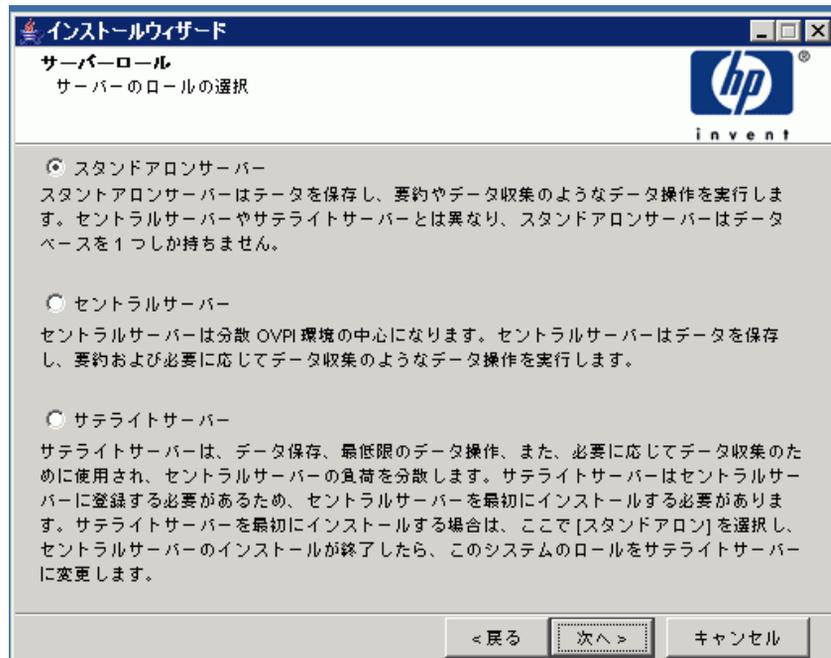
- 4 使用許諾条件に同意し、**[次へ]**をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]**をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。**[コンポーネントの選択]**ウィンドウが表示されます。



タスク 2: インストールするすべての OVPI コンポーネントの選択

- 1 **[コンポーネントの選択]**ウィンドウで、インストールするすべての **OVPI** コンポーネントを選択します。スタンドアロンでは、すべてのコンポーネントをインストールする必要があります。

[次へ] をクリックして続行します。[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



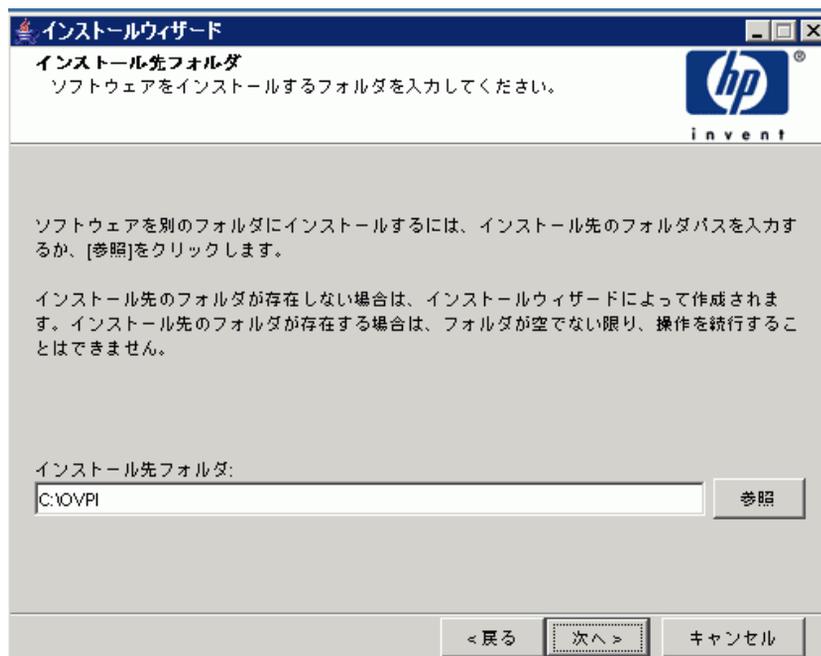
タスク 3: データベースシステムの役割の選択

[サーバーロール] ウィンドウで、[スタンドアロンサーバー] を選択します。

後で役割を変更する場合は、OVPI 管理コンソールのシステム / ネットワークの管理アプリケーションを使用します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

タスク 4: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

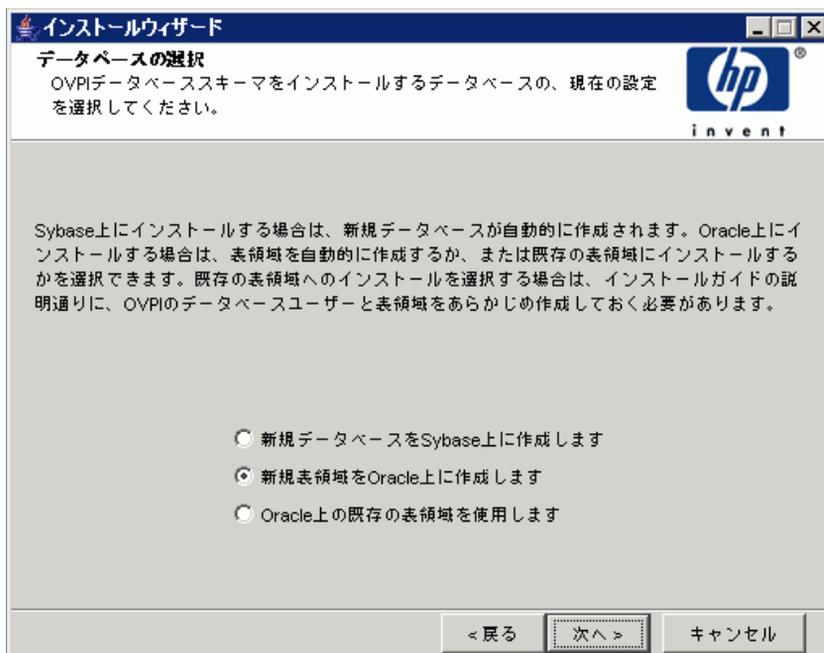
[インストール先フォルダ] ウィンドウが開きます。



[インストール先フォルダ] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
 - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
 - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
 - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。



タスク 5: OVPI データベースインスタンスの作成先となる RDBMS の選択

[データベースの選択] ウィンドウで、OVPI データベースインスタンスの作成先となるデータベースを確認し、新しい表領域を作成するのか、既存の表領域にインストールするのかを指定します。

- 1 以下のいずれかのオプションを選択します。

- **[新規表領域を Oracle 上に作成します]**

52 ページの「表領域のサイズ設定のガイドライン」で説明されているデータベースユーザーアカウント (`dsi_dpiped`) と表領域を作成していない場合はこのオプションを選択します。`dsi_dpiped` ユーザーと以下の表領域が存在していないことを確認してください。

- `dpiped_default_seg`
- `dpiped_property_ind_seg`

- dpipe_property_seg
- dpipe_upload_ind_seg
- dpipe_upload_seg
- dpipe_rate_ind_seg
- dpipe_rate_seg
- dpipe_summary_ind_seg
- dpipe_summary_seg
- dpipe_overflow_seg
- dpipe_archive_ind_seg
- dpipe_archive_seg
- dpipe_event_ind_seg
- dpipe_event_seg

- **[Oracle 上の既存の表領域を使用します]**

以下の条件のいずれかに当てはまる場合は、このオプションを選択します。

- OVPI をインストールしているシステムで、Oracle Client を使ってリモート Oracle データベースにアクセスする。
- 52 ページの「[表領域のサイズ設定のガイドライン](#)」の説明に従って OVPI データベースユーザーアカウント (dsi_dpipe) と前記の表領域を作成し、54 ページの「[表領域の作成](#)」の説明に従って Oracle の推奨パラメータを調整している。

どのオプションを使用すべきか不明な場合は、**[新規表領域を Oracle 上に作成します]**を選択してください。

2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 6: データベースの場所の確定と接続

[Oracle 管理者ユーザーを使用した Oracle 参照] ウィンドウで、Oracle データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

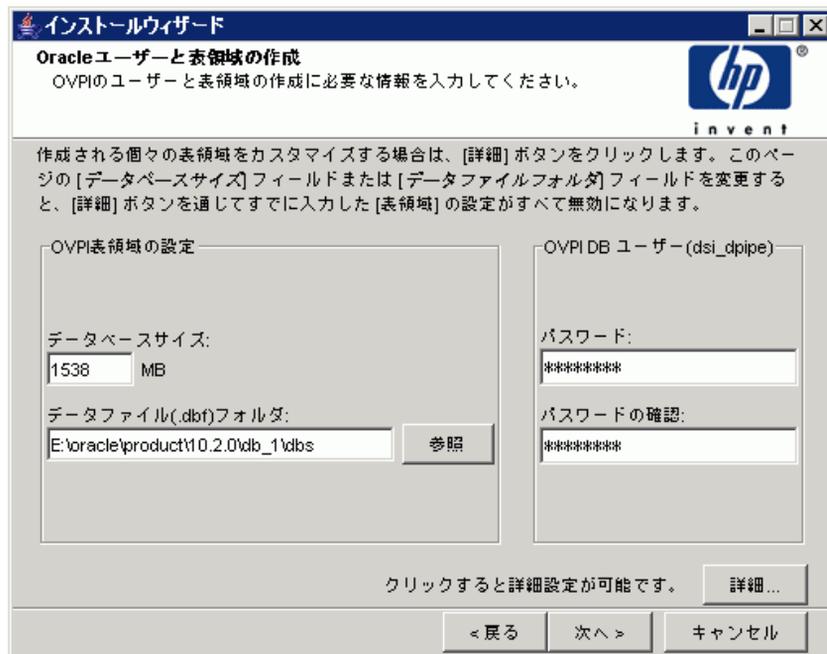
- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。

- **[Oracle インスタンス ID (SID)]:** Oracle データベースのインスタンス名を入力します。

Oracle 環境変数 ORACLE_SID が設定されている場合にのみデフォルト値が表示されます。複数のデータベースインスタンスが実行されている場合があるため、表示された SID が正しいことを確認してください。

- **[Oracle TCP/IP ポート番号]:** Oracle TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。
- **[DBA 権限を持つ Oracle ユーザー]:** デフォルトは sys です。これは変更しないでください。
- **[Oracle ユーザーパスワード]:** Oracle RDBMS のインストール時に作成した sys アカウントのパスワードを入力します。
- **[Oracle ホームディレクトリ]:** Oracle のインストール先ディレクトリを指定します。インストールプログラムが Oracle のホームディレクトリの場所を確定できる場合は、それがデフォルト値として表示されます。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[Oracle ユーザーと表領域の作成] ウィンドウが開きます。



タスク 7: Oracle ユーザーアカウントと新しい表領域の作成



表領域は **autoextend** を **on** にして作成されているため、表領域に現在十分な空き領域がない場合、データの増加に合わせてデータファイルが自動的に拡張されます。物理ファイルシステムが **100%** を超えないようにシステムを監視してください。

[データベースサイズ] および [データファイル (.dbf) フォルダ] パラメータの値を変更する前に、[詳細] ボタンをクリックしてデータベースセグメントのデータファイルを変更するかどうかを決めてください。[データベースサイズ] および [データファイル (.dbf) フォルダ] の設定によって、[OVPI 詳細設定] ウィンドウを使用して行った設定が上書きされます。

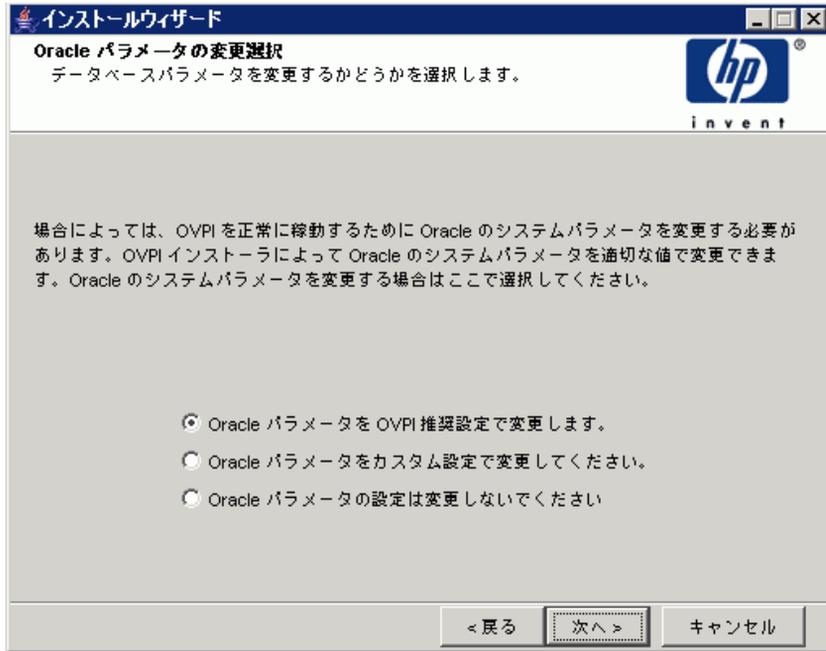
- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
 - **[データベースサイズ]:** データベースのサイズを入力します。デフォルトのサイズは **1024MB** です。最小サイズは **500MB** です。表領域は適切に領域を分散して作成されます。
 - **[データファイル (.dbf) フォルダ]:** データベースファイル (.dbf) を作成するディレクトリを入力します。
 - **[パスワード]:** OVPI データベースユーザーアカウント (**dsi_dpipes**) のパスワードを入力します。

パスワードはアルファベットで始まり、**1** 文字以上 **30** 文字以内の長さでなければなりません。有効な文字は、すべての英数字とアンダースコア (**_**) です。このパスワードは大文字と小文字を区別しません。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。

タスク 8: (省略可能) 特定の Oracle 設定パラメータの変更

[Oracle パラメータの変更選択] ウィンドウには、Oracle の設定を変更する 3 つのオプションが表示されます。



- OVPI の推奨設定に合わせてパラメータを変更できます。
- カスタム設定でパラメータを変更できます。55 ページの **手順 2** の表に、値を決定するための推奨事項が記載されています。
 - **[SGA_MAX_SIZE]**: Oracle データベースが使用するメモリの最大量を指定します。このメモリーは共有メモリーで、すべての Oracle サーバープロセスによって使用されます。
 - **[PGA_AGGREGATE_TARGET (M)]**: インスタンスに関連付けられているすべてのサーバープロセスが使用できる、ターゲット集合 PGA メモリーを指定します。デフォルト値は 200M です。
 - **[DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT]**: 順次スキャン時に 1 回の I/O 操作で読み取られる最大ブロック数を指定し、テーブルスキャン時の I/O を最小限に抑えます。

- **[WORKAREA_SIZE_POLICY]:** 作業領域のサイズ設定のためのポリシーを指定し、作業領域をチューニングするモードを制御します。デフォルト値は **AUTO** です。この値に **MANUAL** を指定しないことをお勧めします。
- **[DB_16K_CACHE_SIZE]:** 一次ブロックサイズを持つバッファのデフォルトバッファプールのサイズを指定します。デフォルト値は **TRUE** です。 **FALSE** に指定しないことをお勧めします。
- **[DB_32K_CACHE_SIZE]:** 32K バッファのキャッシュのサイズを指定します。

設定のカスタマイズを選択すると、以下のウィンドウが表示されます。

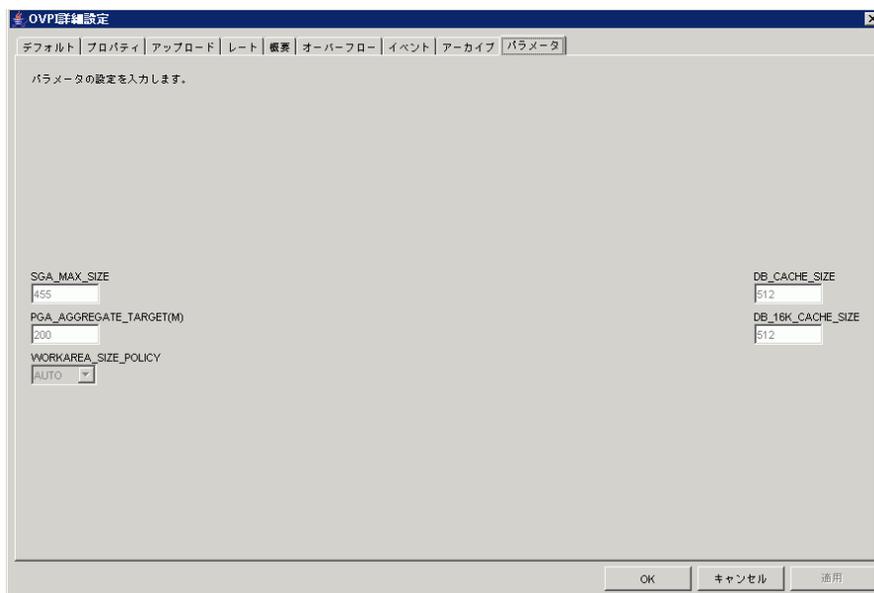
The screenshot shows a window titled "インストールウィザード" (Installation Wizard) for Oracle parameter settings. The window contains the following fields and values:

Parameter Name	Value
SGA_MAX_SIZE	455
PGA_AGGREGATE_TARGET(M)	200
WORKAREA_SIZE_POLICY	AUTO
DB_CACHE_SIZE	512
DB_32K_CACHE_SIZE	512

At the bottom of the window, there are three buttons: "<戻る" (Back), "次へ>" (Next), and "キャンセル" (Cancel).

- a 必要な値を入力します(図に示されている値は例です)。

- b [次へ] をクリックします。入力した値は [OVPI 詳細設定] ウィンドウに以下のとおり自動的に表示されます。

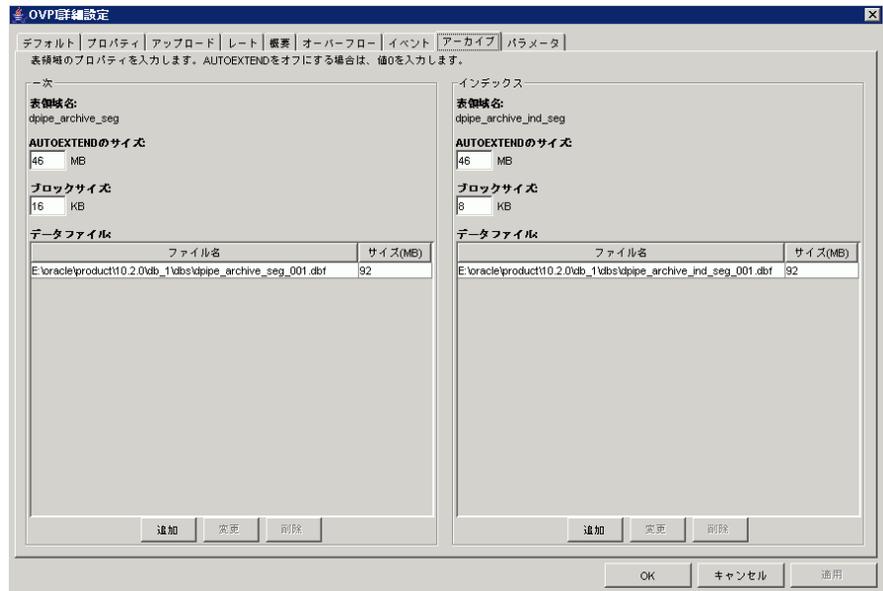


- Oracle パラメータを変更しないことも可能です。
- 2 オプションを選択して、[次へ] をクリックします。
 - 3 (省略可能) 必要に応じて [詳細] をクリックし、[OVPI 詳細設定] ウィンドウを開きます。このウィンドウを使用して、表領域を構成するデータファイルの追加、変更、または削除を行います。



[OVPI 詳細設定] ウィンドウを使用してデータベースセグメントを変更した後は、[Oracle ユーザーおよび表領域の作成] ウィンドウの [データベースのサイズ] および [データファイル(.dbf) フォルダー] オプションの値は変更しないでください。これらのオプションの値を変更すると、リセットすることはできません。[OVPI 詳細設定] ダイアログボックスで行った変更が上書きされてしまいます。これらのオプションをリセットするには、インストールプログラムをキャンセルして初めからやり直すことになります。

- a 値を入力して [詳細] をクリックします。

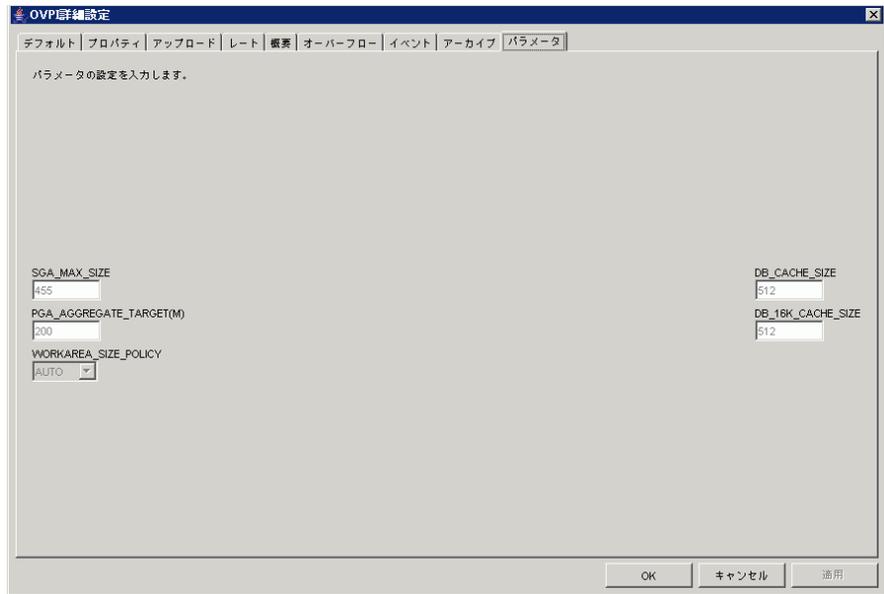


表領域のサイズ設定ガイドラインについては、第3章「Oracle 10g Enterprise Edition のインストール」を参照してください。

- 4 変更する表領域に関連するタブを選択します。表領域のタブは以下のとおりです。
- [デフォルト]: dpipe_default_seg 表領域
 - [プロパティ]: dpipe_property_seg および dpipe_property_ind_seg 表領域
 - [アップロード]: dpipe_upload_seg および dpipe_upload_ind_seg 表領域
 - [レート]: dpipe_rate_seg および dpipe_rate_ind_seg 表領域
 - [概要]: dpipe_summary_seg および dpipe_summary_ind_seg 表領域
 - [オーバーフロー]: dpipe_overflow_seg 表領域
 - [アーカイブ]: dpipe_archive_seg 表領域
 - [イベント]: dpipe_event_seg 表領域

- 5 表領域パラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。それぞれの場合のパラメータは次のとおりです。
- **[AUTOEXTEND のサイズ]**: 拡張するサイズを **MB** 単位で指定します。拡張するサイズに **0** を指定すると、**Oracle** の自動拡張機能は無効になります。
 - **[データファイル]** (ファイル名および **MB** 単位でのサイズ): 各表領域に対して少なくとも **1** つのデータファイルを作成する必要があります。論理名と説明を使用し、オペレーティングシステムの最大値を適用します。
 - データファイルを追加するには、**[追加]** をクリックします。[データファイル] ウィンドウが開きます。このウィンドウでデータファイル名とそのデータファイルのサイズを入力し、**[OK]** をクリックします。
 - データファイルを変更するには、データファイルを選択して **[変更]** をクリックします。[データファイル] ウィンドウが開きます。このウィンドウでデータファイル名とそのデータファイルのサイズのいずれかまたは両方を変更し、**[OK]** をクリックします。
 - データファイルを削除するには、データファイルを選択して **[削除]** をクリックします。

— [OK] をクリックします。次の画面が表示されます。



- 6 [OK] をクリックして、[Oracle ユーザーと表領域の作成] ウィンドウに戻ります。

タスク 9: データベースの場所の確定と接続

[データベース管理者ユーザーを使用した Oracle 参照] ウィンドウで、Oracle データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

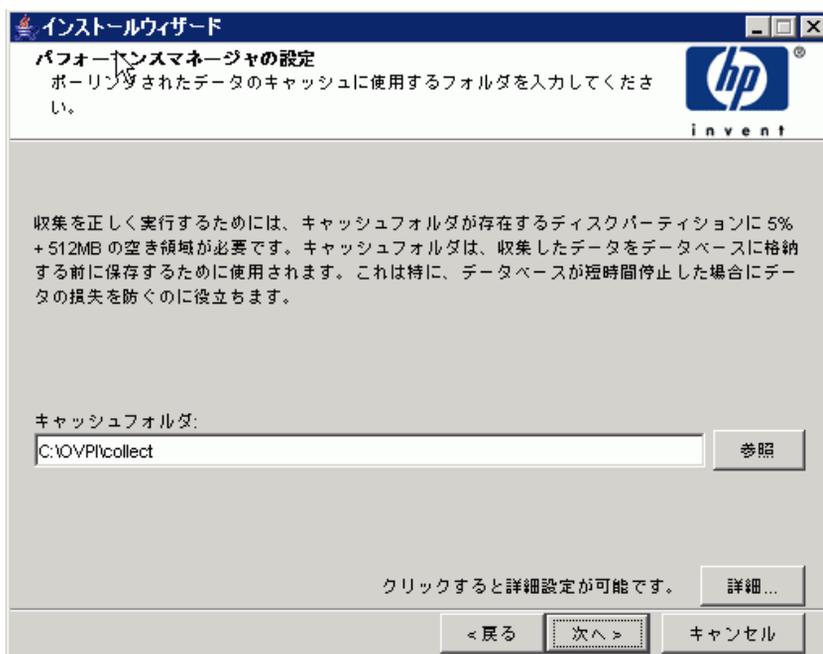
- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
 - **[Oracle インスタンス ID (SID)]:** Oracle データベースのインスタンス名を入力します。

Oracle 環境変数 ORACLE_SID が設定されている場合にのみデフォルト値が表示されます。複数のデータベースインスタンスが実行されている場合があるため、表示された SID が正しいことを確認してください。
 - **[Oracle TCP/IP ポート番号]:** Oracle TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。
 - **[DBA 権限を持つ Oracle ユーザー]:** デフォルトは sys です。これは変更しないでください。

- **[Oracle ユーザーパスワード]:** Oracle RDBMS のインストール時に作成した sys アカウントのパスワードを入力します。
 - **[Oracle ホームディレクトリ]:** Oracle のインストール先ディレクトリを指定します。インストールプログラムが Oracle のホームディレクトリの場所を確定できる場合は、それがデフォルト値として表示されます。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[Oracle ユーザーおよび表領域の作成] ウィンドウが開きます。

タスク 10: ポーリングの収集の設定

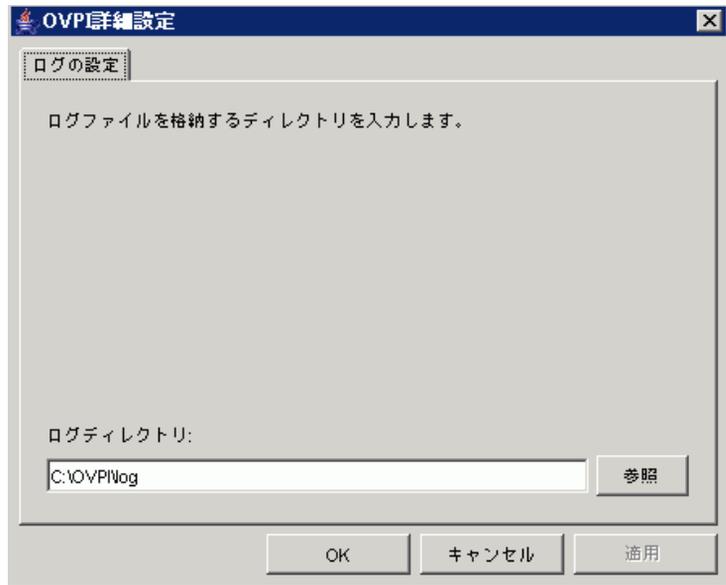
[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウで、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。



- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。

収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの 5% の空き領域に加えて、さらに 512MB の空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが 10GB の場合は、1GB の空き領域が必要です。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[OVPI 詳細設定]** ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。



- a デフォルトのパスのままにすると、**OVPI** をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ (指定するディレクトリにかかわらずここでログファイルが管理される) が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
 - b **[OK]** をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウに戻ります。
- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 11: オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー] ウィンドウで、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、OVPI が稼動する環境を保存するときに使用します。

インストールウィザード

パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー
パフォーマンスマネージャは、オペレーティングシステムユーザーアカウント
trendadmと、グループ**trendadm**を作成します

trendadmアカウントのパスワードとパスワードの確認を入力してください。入力したパスワードとパスワードの確認が一致しない限り、作業を続行することはできません。パスワードは必ず指定する必要があります。

パスワード:

パスワードの確認:

<戻る 次へ> キャンセル

▶ UNIX の場合のみ：この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する Web アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

オペレーティングシステムのアカウントとグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。

- a **【パスワード】**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。また、すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。
- b **【パスワードの確認】**: パスワードを再入力します。

2 **【次へ】**をクリックして続行します。

オペレーティングシステムアカウントのユーザー環境を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかをクリックします。
 - **【ユーザー環境を変更する】**: このパラメータは、trendadm アカウントの `.profile` または `.cshrc` を OVPI 環境変数 (COLLECT_HOME、DPIPE_HOME、DPIPE_TMP、および TREND_LOG) で更新します。
 - **【ユーザー環境を変更しない】**: このパラメータは、アカウントの `.profile` または `.cshrc` を OVPI 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から OVPI 環境変数を手作業で追加する必要があります。
- 2 **【次へ】**をクリックして続行します。

タスク 12: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウで、Web アクセスサーバーがリスンする HTTP ポートのほかに、Web アクセスサーバー用の OVPI 管理者アカウントを作成します。

インストールウィザード

Web アクセスサーバーの設定

OVPI Web アクセスサーバー コンポーネントには、Web アクセスサーバー上の OVPI 管理者ユーザーの作成と、リスン対象の HTTP ポートが必要です。

ユーザー設定

OVPI Web アクセス管理者のユーザー名とパスワードを入力してください。

ユーザー名:
trendadm

パスワード:

パスワードの確認:

ポート設定

Web アクセスサーバーのリスン対象である HTTP ポートを入力してください。80以外のポートを選択すると、Web アクセスサーバーにアクセスするには URL の中にそのポート番号を指定する必要があります。

HTTP ポート:
80

クリックすると詳細設定が可能です。 詳細...

< 戻る 次へ > キャンセル

1 以下のパラメータの値を入力します。

- **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。

▶ **UNIX の場合のみ:** このアカウントは OVPI の実行環境を保存するために使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワード]:** Web アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]:** Web アクセスサーバーのデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

[ディレクトリ]: すべての配布レポートを保存するレポートディレクトリの場所を変更します。レポートディレクトリの場所を変更するには、以下の手順に従います。

- a デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- b **[適用]** をクリックします。
- c **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

[OVPI ユーザー]: OVPI クライアントへのログオンに使用するユーザーアカウントの作成と変更を行います。通常ユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常ユーザーアカウントで OVPI クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、**Web** アクセスサーバーの管理機能 (**[管理]** リンク) にアクセスできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- a **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (new-user)、パスワード (new-user)、役割 (user) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- b 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- c **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- a ユーザー名を選択して **[ユーザーの削除]** をクリックします。
- b **[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、Web アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

[SSL の設定]: SSL 通信を有効にすると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、**[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

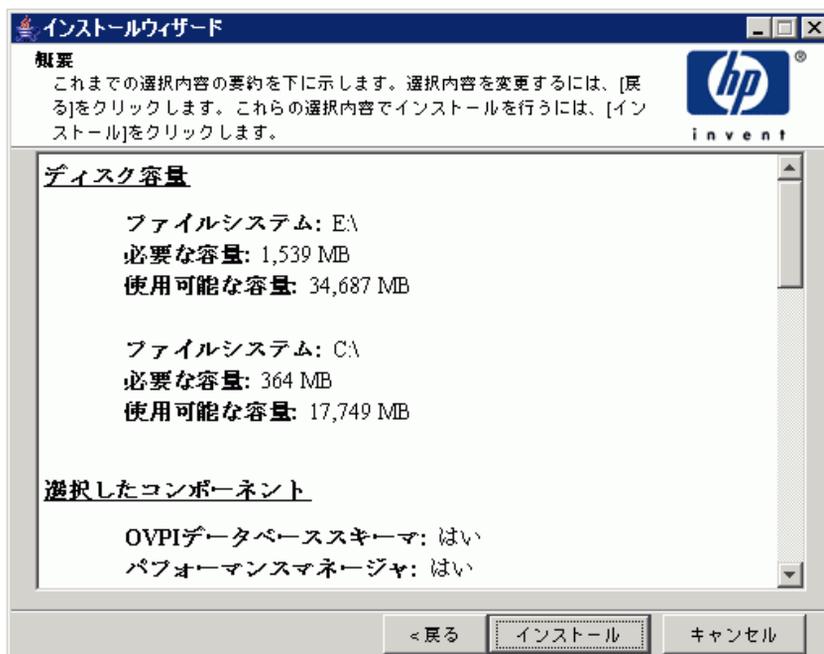
このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効にはなりません。これで、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効になります。

- a **[SSL ポート]:** デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。
- b **[キーストアパスワード]:** 6 文字以上のパスワードを入力します。パスワードは記録して安全な場所に保管してください。これは署名入り証明書を作成するときに必要になります。自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。

- a **[組織]** (省略可): 自分が所属する組織名を入力します (「ABC システム株式会社」など)。

- b **[組織単位]** (省略可): 部または課の名前を入力します (「Northeast Sales」など)。
 - c **[市町村]** (省略可): 所在地の市町村名を入力します (「新宿区」など)。
 - d **[州 / 都道府県]** (省略可): 都道府県名を入力します (「東京」など)。
 - e **[国]** (必須): [国] ボックスに 2 文字の国コードを入力します (「JP」など)。
- 3 **[適用]** をクリックします。
 - 4 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。
 - 5 **[次へ]** をクリックして続行します。 **[概要]** ウィンドウが開きます。



タスク 13: インストール情報の確認

- 1 必要があれば、**[戻る]**をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして**[概要]**ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]**をクリックして続行します。**[インストールの進捗状況]**ウィンドウが開きます。

タスク 14: インストールの終了

[インストールの進捗状況]ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

OVPI のインストールが正常終了したら、**[完了]**をクリックします。

- **UNIX** システムの場合: インストールは終了です。
- **Windows** システムの場合: システムを再起動し、インストールを完了します。

OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。

- 1 **[インストールの進捗状況]**ウィンドウの一番下にある**[詳細]**をクリックし、詳細情報を確認します。
- 2 サポートに問い合わせます(4 ページの「[サポート](#)」を参照してください)。

レポートパックやデータパイプをインストールするには、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』の手順を参照してください。

5 分散環境での OVPI のインストール

OVPI インストールプログラムの起動

OVPI のインストールプログラムには、OVPI コンポーネントとリモートポータルをインストールするためのオプションが用意されています。OVPI のアップグレード前に実行する必要があるデータベースのアップグレードを行うには、[第 9 章「Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード」](#)を参照してください。OVPI およびリモートポータルをアップグレードするには、[第 10 章「OVPI 5.30 へのアップグレード」](#)を参照してください。

以下の手順に従ってください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。

Windows システムの場合

管理者アカウントを使用してログオンします。

UNIX システムの場合

root としてログオンします。

- 2 OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。

UNIX システムの場合

次の表に示す指示に従って DVD をマウントします。

オペレーティングシステム	コマンド
Solaris	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<code>root</code> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre>mkdir /dvdrom mount -r /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</pre> <p>この例では、<code>dvd_devicename</code> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
HP-UX	<p>SAM ユーティリティを使用して DVD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。</p> <pre>mkdir /dvdrom mount /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</pre> <p>この例では、<code>dvd_devicename</code> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
Red Hat Linux	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<code>root</code> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre>mount -r /dev/dvdrom <mount_directory></pre> <p>この例では、<code>mount_directory</code> は DVD-ROM の内容が保存されているディレクトリです。</p>

Solaris システムの場合

- a 次のコマンドを入力して `dvd_label` を表示します。

```
ls -l /dvdrom
```

- b 次のコマンドを入力してディレクトリを変更します。

```
cd /dvdrom/dvd_label
```

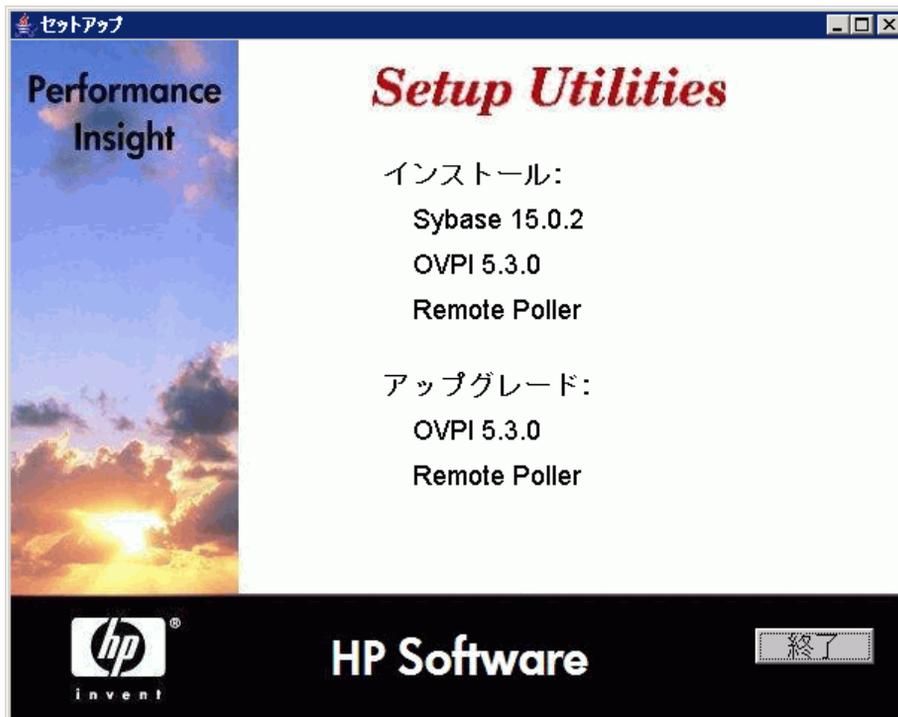
この例では、`dvd_label` は DVD 名です。

- 3 次の手順でインストールプログラムを起動します。

Windows システムの場合

OVPI インストール DVD を挿入します。セットアッププログラムが自動的に起動します。自動的に起動しない場合は、DVD の最上位のフォルダーにある `setup.exe` をダブルクリックします。

[Setup Utilities] ウィンドウが開きます。



ウィンドウが正しく表示されない場合は、次の手順に従って Windows フォントのテキストサイズを変更します。

- a [コントロールパネル] ウィンドウから、[画面] アイコンをダブルクリックします。
- b [設定] タブを選択し、[詳細] をクリックします。
- c [全般] タブを選択し、[フォントサイズ] リストから [小さいフォント] を選択します。

UNIX システムの場合

セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力して起動します。

```
./setup
```

次の手順

分散型構成に **OVPI** をインストールするには、さまざまな方法があります。この手順では、**第 1 章「OVPI のインストールについて」** で説明した複雑で典型的な分散型構成に、**OVPI** コンポーネントを個別にインストールする方法について説明します。

分散環境へのインストールの順番は次のとおりです。

- まず中央データベースサーバーに **OVPI** データベーススキーマおよび **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストールします。

Web アクセスサーバーをインストールします。複数の **Web** アクセスサーバーがある場合は、それぞれについてインストール手順を繰り返してください。

中央データベースサーバーにレポートパックをインストールします。中央サーバーがポーリングしていない場合は、中央データベースサーバーにはデータパイプをインストールしないでください。次に、レポートを各 **Web** アクセスサーバーに配布します。この作業は、インストールが完了するまで延期できます。

- 各サテライトデータベースサーバーに **OVPI** データベーススキーマおよび **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストールします。

この時点で、サテライトデータベースサーバーでネットワークを検出することができます。

- 各サテライトデータベースサーバーにレポートパックおよびデータパイプをインストールします。
- リモートポーラーコンポーネントを各リモートポーリングシステムにインストールします。複数のリモートポーリングシステムがある場合は、それぞれについてインストール手順を繰り返してください。

この時点で、各サテライトデータベースサーバーのタイプ検出、分散環境における運用のためのレポートパックの設定、およびリモートポーリングシステムのポーリングポリシーの設定を実行できます。この作業は、インストールが完了するまで延期できます。

- **OVPI** クライアントアプリケーションを、**Web** アクセスサーバーにアクセスする各ワークステーションにインストールします。

リモート **Oracle** データベースを使用する場合は、開始する前に **60** ページの「**リモート Oracle データベースの設定**」を参照してください。



OVPI のインストールを開始する前に、**Oracle** の **dbconsole** プロセスを停止する必要があります。次を実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop dbconsole
```

この手順は、インストール中に **OVPI** インストーラによって **Oracle** データベースが再起動されるため、必要になります。**dbconsole** プロセスが実行されていると、**OVPI** のインストールが失敗します。

中央サーバーへの OVPI のインストール

分散環境では、最初に中央サーバーに OVPI をインストールする必要があります。その後、サテライトサーバーをインストールし、中央サーバーにサテライトサーバーを登録します。中央サーバーに OVPI をインストールするには、[第 4 章「スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール」](#)の手順に従います。[76 ページのタスク 3](#)の手順で、[スタンドアロンサーバー]の代わりに[**セントラルサーバー**]オプションを選択します。

サテライトサーバーへの OVPI のインストール

この項では、サテライトサーバーのデータベースサーバーに、OVPI データベーススキーマおよび OVPI パフォーマンスマネージャをインストールする手順について説明します。リモートデータベースを使用しているのであれば、この両方のコンポーネントを同じシステムにインストールする必要があります。

手順の大部分は、スタンドアロンシステムへの OVPI データベーススキーマおよび OVPI パフォーマンスマネージャのインストールと同じです。

タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。

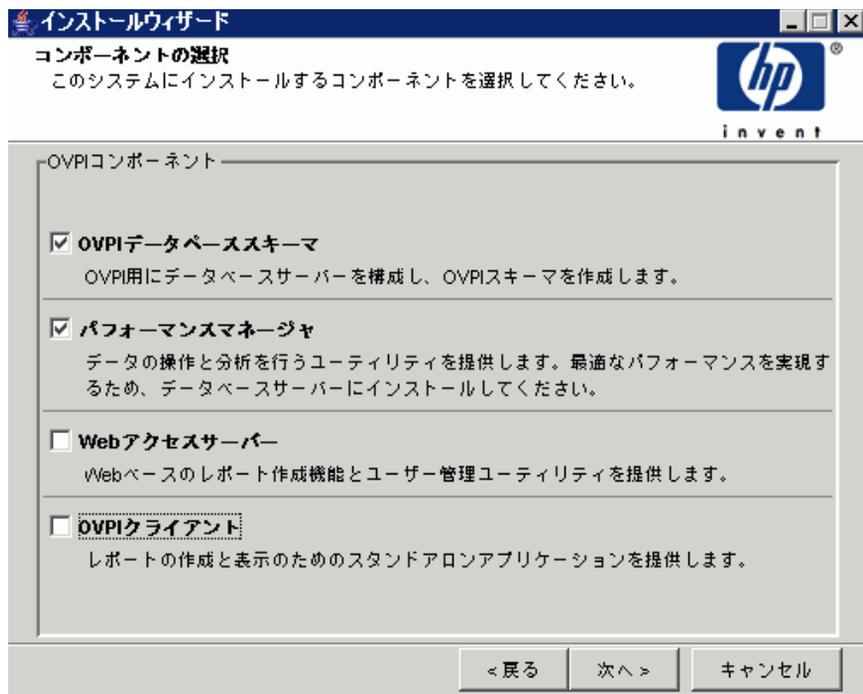
-
- 2 [セットアップユーティリティ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションから **[OVPI 5.3.0]** を選択します。[ようこそ] ウィンドウが開きます。



-
-
- 3 [ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。
- 4 使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

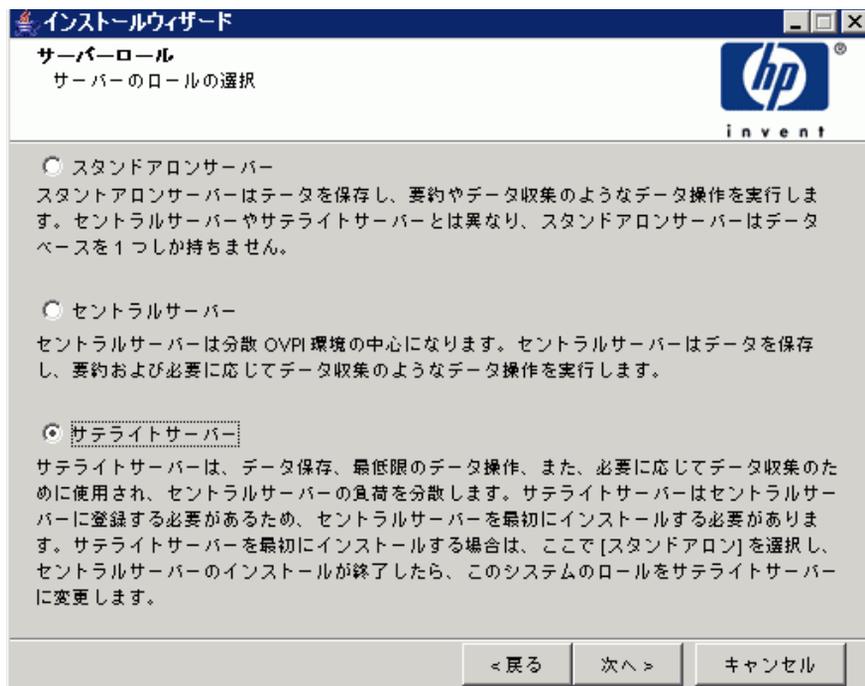
[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。



- 1 ウィンドウの [インストール] セクションで、**[OVPI データベーススキーマ]** および **[パフォーマンスマネージャ]** をクリックして選択します。他のチェックボックスはオフにします。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 3: データベースシステムの役割の選択

[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



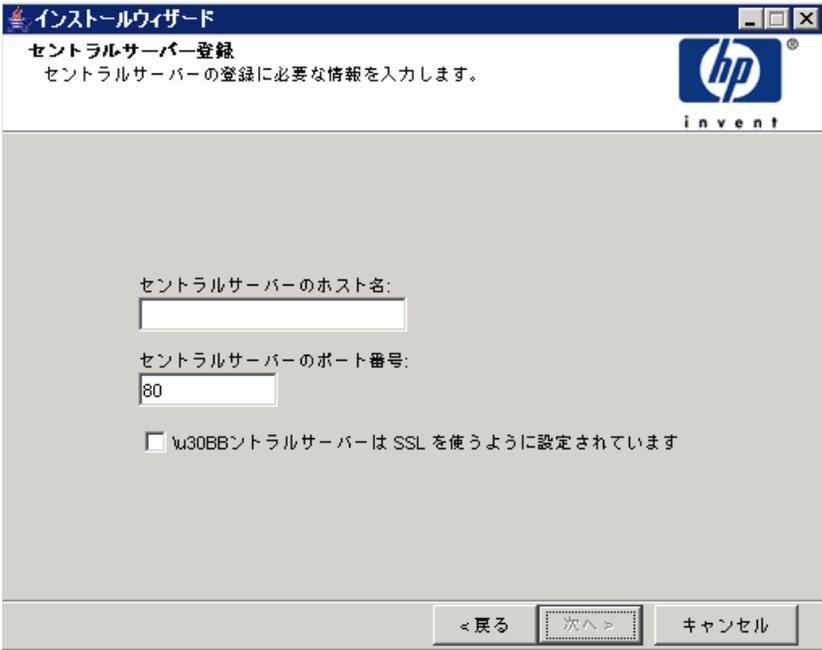
[サテライトサーバー] を選択し、[次へ] をクリックして続行します。

後で役割を変更する場合は、OVPI 管理コンソールのシステム/ネットワークの管理アプリケーションを使用します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

タスク 4: サテライトサーバーのホスト名とポート番号の指定

サテライトサーバーには、登録先の中央サーバーのホスト名およびポート番号 (デフォルト値は 80) を指定するためのオプションがあります。これは、**systems.xml** ファイルに格納されている情報を同期させるために必要です。安全な通信を実現するために、**SSL** を有効にできます。インストールプロセスが終了すると、登録も完了します。

[次へ] をクリックして続行します。[セントラルサーバー登録] ウィンドウが開きます。



インストールウィザード

セントラルサーバー登録
セントラルサーバーの登録に必要な情報を入力します。

hp
invent

セントラルサーバーのホスト名:

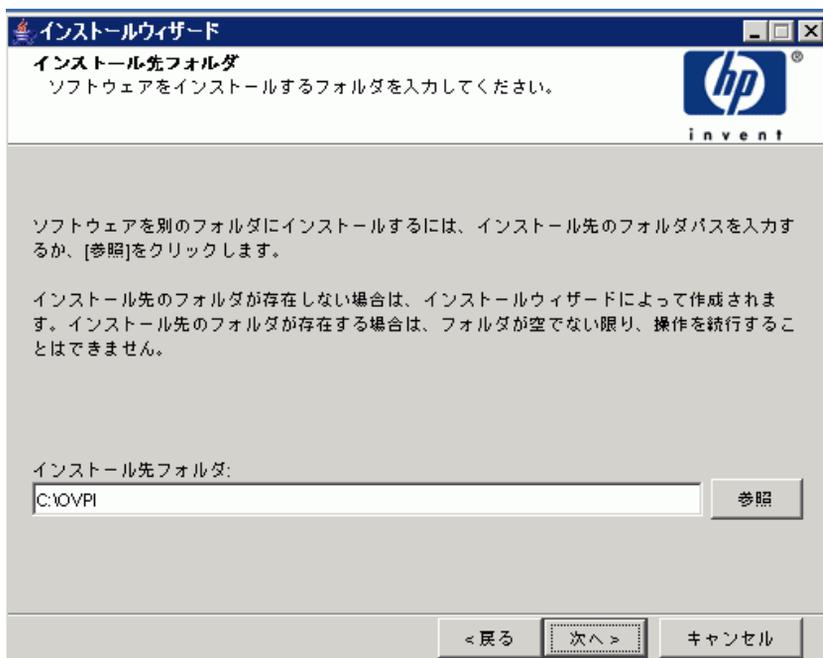
セントラルサーバーのポート番号:

w30BBセントラルサーバーは SSL を使うように設定されています

<戻る 次へ > キャンセル

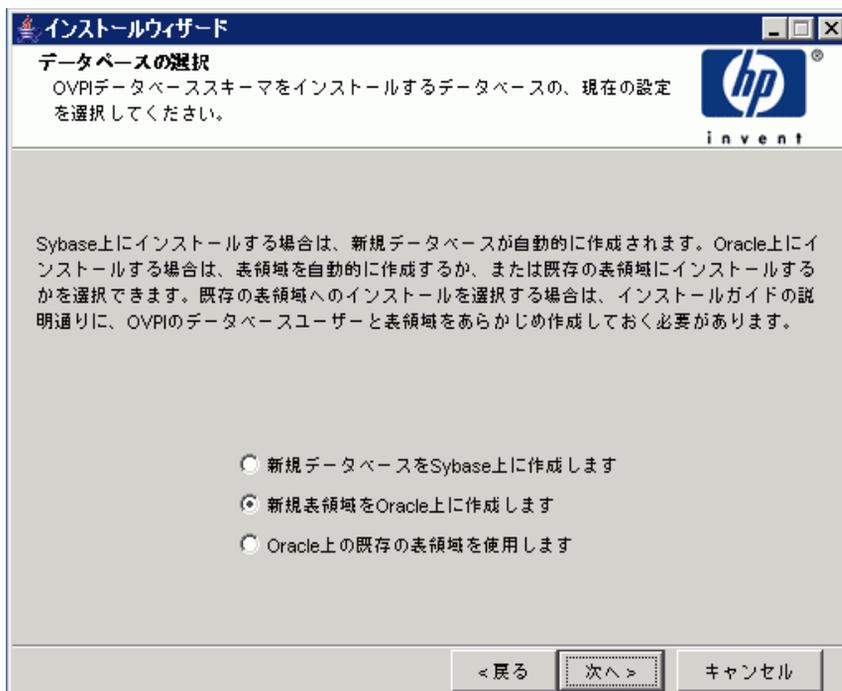
タスク 5: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

[インストール先フォルダ] ウィンドウで、OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、NFS マウントディレクトリ、UNIX ソフトリンク、UNIX ハードリンクドライブ、Windows マップドライブのいずれでも構いません。



- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
 - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
 - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
 - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。



タスク 6: OVPI データベースインスタンスの作成先となる RDBMS の選択

[データベースの選択] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、OVPI データベースインスタンスの作成先となるデータベースを確認し、新しい表領域を作成するのか、既存の表領域にインストールするのかを指定します。

- 1 以下のいずれかのオプションを選択します。

- **[新規表領域を Oracle 上に作成します]**

52 ページの「表領域のサイズ設定のガイドライン」で説明されているデータベースユーザーアカウント (dsi_dpipes) と表領域をまだ作成していない場合はこのオプションを選択します。そのため、dsi_dpipes ユーザーと以下の表領域が存在していないことを確認してください。

- dpipe_default_seg
- dpipe_property_ind_seg
- dpipe_property_seg

- dpipe_upload_ind_seg
- dpipe_upload_seg
- dpipe_rate_ind_seg
- dpipe_rate_seg
- dpipe_summary_ind_seg
- dpipe_summary_seg
- dpipe_overflow_seg
- dpipe_archive_ind_seg
- dpipe_archive_seg
- dpipe_event_ind_seg
- dpipe_event_seg

- **[Oracle 上の既存の表領域を使用します]**

以下の条件のいずれかに当てはまる場合は、このオプションを選択します。

- OVPI をインストールしているシステムで、Oracle Client を使用してリモート Oracle データベースにアクセスする。
- 52 ページの「[表領域のサイズ設定のガイドライン](#)」の説明に従って OVPI データベースユーザーアカウント (dsi_dpipe) と前記の表領域をすでに作成し、54 ページの「[表領域の作成](#)」の説明に従って Oracle の推奨パラメータを調整している。



どのオプションを選択すべきか不明な場合は、**[新規表領域を Oracle 上に作成します]** を選択してください。

2 **[次へ]** をクリックして続行します。

- **[新規表領域を Oracle 上に作成します]** をクリックした場合は、[タスク 7](#) に進みます。
- **[Oracle 上の既存の表領域を使用します]** をクリックした場合は、118 ページの[タスク 10](#) に進みます。

タスク 7: データベースの場所の確定と接続

[データベース管理者ユーザーを使用した **Oracle 参照**] ウィンドウで、**Oracle** データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

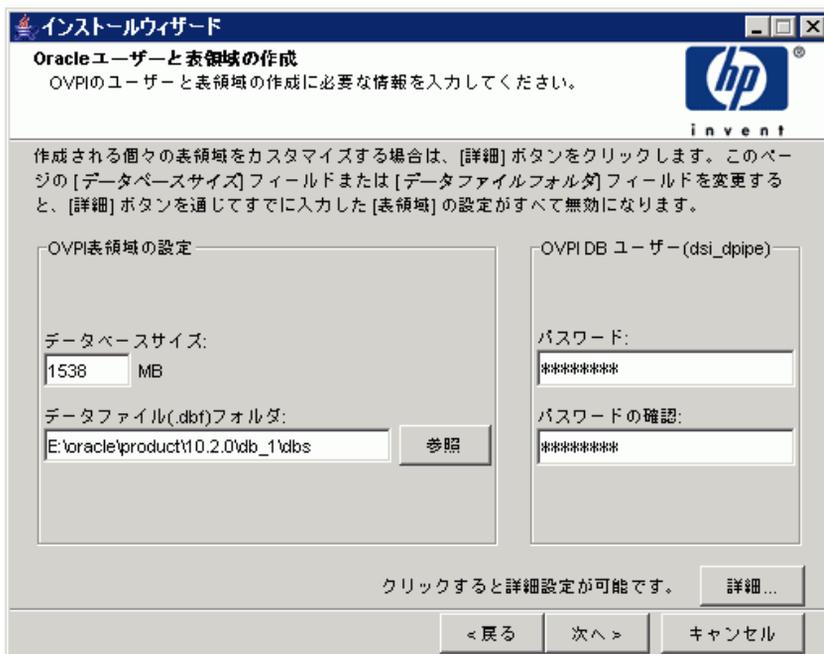
1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。

- **[Oracle インスタンス ID (SID)]:** Oracle データベースのインスタンス名を入力します。

Oracle 環境変数 `ORACLE_SID` が設定されている場合にのみデフォルト値が表示されます。複数のデータベースインスタンスが実行されている場合があるため、表示された `SID` が正しいことを確認してください。

- **[Oracle TCP/IP ポート番号]:** Oracle TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は `1521` です。
- **[DBA 権限を持つ Oracle ユーザー]:** デフォルトは `sys` です。これは変更しないでください。
- **[Oracle ユーザーパスワード]:** Oracle RDBMS のインストール時に作成した `sys` アカウントのパスワードを入力します。
- **[Oracle ホームディレクトリ]:** Oracle のインストール先ディレクトリを指定します。インストールプログラムが Oracle のホームディレクトリの場所を確定できる場合は、それがデフォルト値として表示されます。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[Oracle ユーザーと表領域の作成] ウィンドウが開きます。



タスク 8: Oracle ユーザーアカウントと新しい表領域の作成



表領域は `autoextend` を `on` にして作成されているため、表領域に現在十分な空き領域がない場合、データの増加に合わせてデータファイルが自動的に拡張されます。物理ファイルシステムが **100%** を超えないようにシステムを監視してください。

[データベースサイズ] および [データファイル (.dbf) フォルダ] パラメータの値を変更する前に、[詳細] ボタンをクリックしてデータベースセグメントのデータファイルを変更するかどうかを決めてください。[データベースサイズ] および [データファイル (.dbf) フォルダ] の設定によって、[OVPI 詳細設定] ウィンドウを使用して行った設定が上書きされます。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。

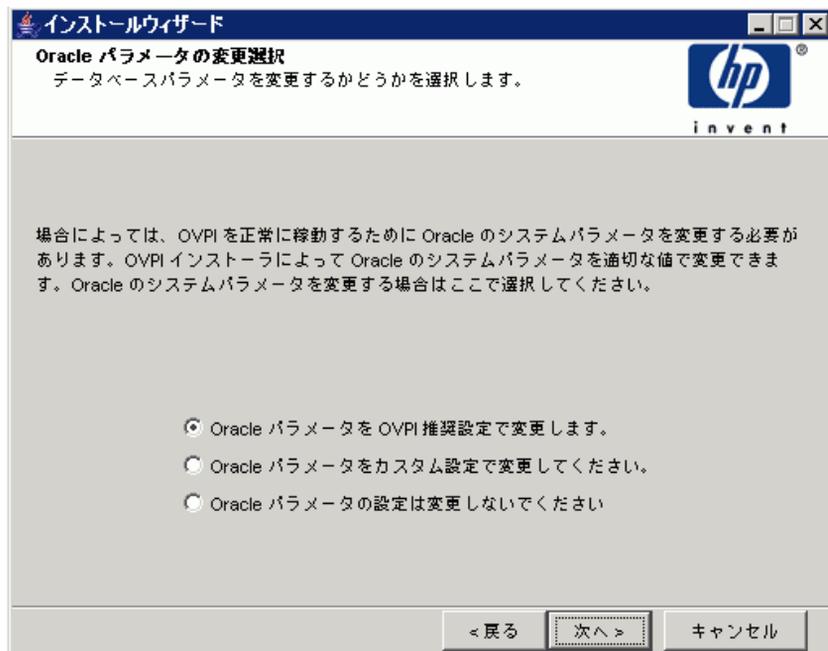
- **[データベースサイズ]:** データベースのサイズを入力します。デフォルトのサイズは **1024MB** です。最小サイズは **500MB** です。表領域は適切に領域を分散して作成されます。
- **[データファイル (.dbf) フォルダ]:** データベースファイル (.dbf) を作成するディレクトリを入力します。
- **[パスワード]:** OVPI データベースユーザーアカウント (dsi_dpip) のパスワードを入力します。

パスワードはアルファベットで始まり、1 文字以上 30 文字以内の長さでなければなりません。有効な文字は、すべての英数字とアンダースコア (_) です。このパスワードは大文字と小文字を区別しません。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。

タスク 9: (省略可能) 特定の Oracle 設定パラメータの変更

[Oracle パラメータの変更選択] ウィンドウには、Oracle の設定を変更する 3 つのオプションが表示されます。



- OVPI の推奨設定に合わせてパラメータを変更できます。
- カスタム設定でパラメータを変更できます。55 ページの[手順 2](#)の表に、値を決定するための推奨事項が記載されています。
 - **[SGA_MAX_SIZE]**: Oracle データベースが使用するメモリーの最大量を指定します。このメモリーは共有メモリーで、すべての Oracle サーバードキュメントによって使用されます。
 - **[PGA_AGGREGATE_TARGET (M)]**: インスタンスに関連付けられているすべてのサーバードキュメントが使用できる、ターゲット集合 PGA メモリーを指定します。デフォルト値は 200M です。
 - **[DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT]**: 順次スキャン時に 1 回の I/O 操作で読み取られる最大ブロック数を指定し、テーブルスキャン時の I/O を最小限に抑えます。
 - **[WORKAREA_SIZE_POLICY]**: 作業領域のサイズ設定のためのポリシーを指定し、作業領域をチューニングするモードを制御します。デフォルト値は AUTO です。この値に MANUAL を指定しないことをお勧めします。
 - **[DB_16K_CACHE_SIZE]**: 一次ブロックサイズを持つバッファのデフォルトバッファプールのサイズを指定します。デフォルト値は TRUE です。FALSE に指定しないことをお勧めします。
 - **[DB_32K_CACHE_SIZE]**: 32K バッファのキャッシュのサイズを指定します。
 - **[PARALLEL_AUTOMATIC_TUNING]**: 並列実行を制御するパラメータのデフォルト値を Oracle が決定するかどうかを指定します。

設定のカスタマイズを選択すると、以下のウィンドウが表示されます。

The screenshot shows a window titled "インストールウィザード" (Installation Wizard) with the subtitle "Oracle パラメータの設定" (Oracle Parameter Configuration). Below the subtitle, it says "設定には Oracle データベースパラメータを入力します。" (Enter Oracle database parameters for configuration). The HP logo and the word "invent" are in the top right corner. The main area contains several input fields for database parameters: SGA_MAX_SIZE (455), PGA_AGGREGATE_TARGET(M) (200), WORKAREA_SIZE_POLICY (AUTO), DB_CACHE_SIZE (512), and DB_32K_CACHE_SIZE (512). At the bottom, there are three buttons: "< 戻る" (Back), "次へ >" (Next), and "キャンセル" (Cancel).

a 必要な値を入力します(図に示されている値は例です)。

- b [次へ] をクリックします。入力した値は [OVPI 詳細設定] ウィンドウに以下のとおり自動的に表示されます。

デフォルト | プロパティ | アップロード | レポート | 概要 | オーバーフロー | イベント | アーカイブ | パラメータ

パラメータの設定を入力します。

SGA_MAX_SIZE
455

PGA_AGGREGATE_TARGET(M)
200

WORKAREA_SIZE_POLICY
AUTO

DB_CACHE_SIZE
512

DB_1BK_CACHE_SIZE
512

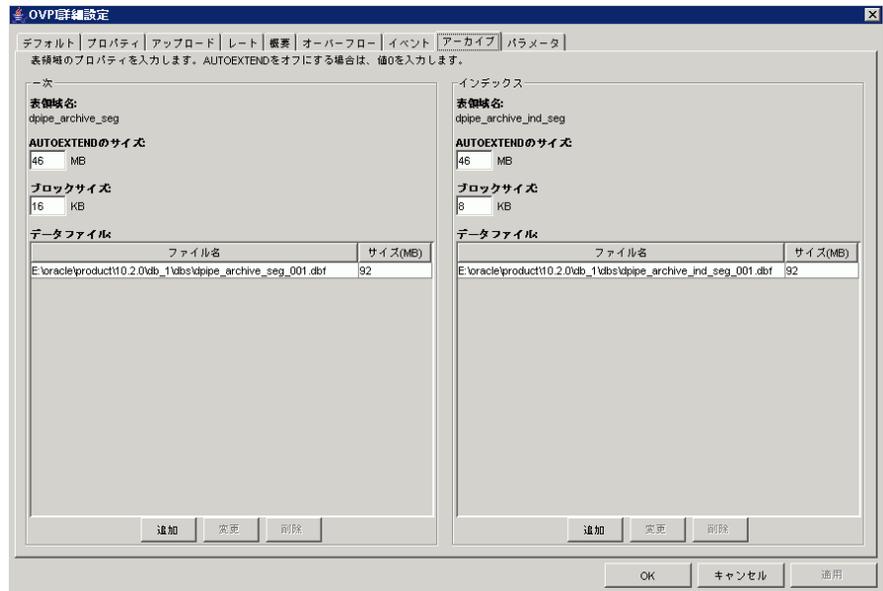
OK キャンセル 適用

- Oracle パラメータを変更しないことも可能です。
- 2 オプションを選択して、[次へ] をクリックします。
 - 3 (省略可能) 必要に応じて [詳細] をクリックし、[OVPI 詳細設定] ウィンドウを開きます。このウィンドウを使用して、表領域を構成するデータファイルの追加、変更、または削除を行います。



[OVPI 詳細設定] ウィンドウを使用してデータベースセグメントを変更した後は、[Oracle ユーザーおよび表領域の作成] ウィンドウの [データベースのサイズ] および [データファイル (.dbf) フォルダ] オプションの値は変更しないでください。これらのオプションの値を変更すると、リセットすることはできません。[OVPI 詳細設定] ダイアログボックスで行った変更が上書きされてしまいます。これらのオプションをリセットするには、インストールプログラムをキャンセルして初めからやり直すことになります。

- a 値を入力して [詳細] をクリックします。

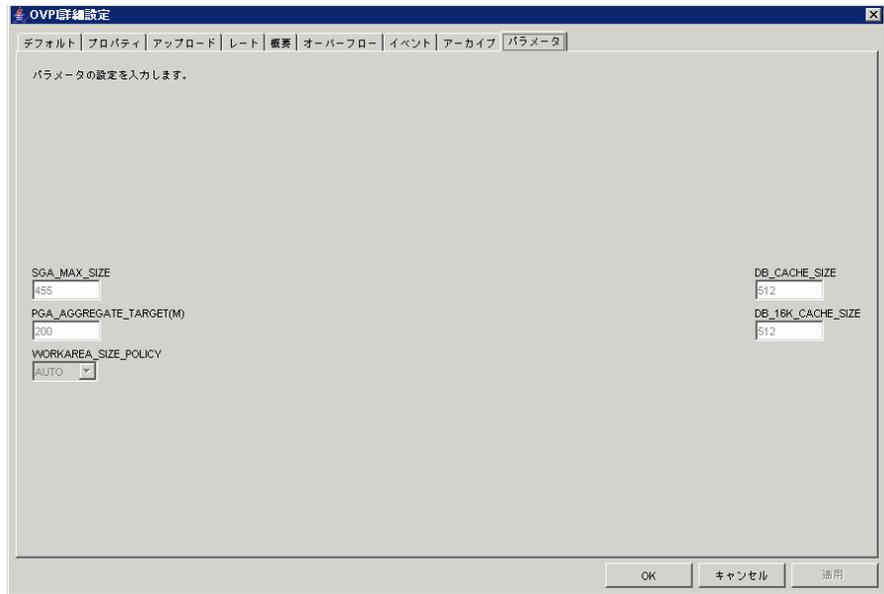


表領域のサイズ設定ガイドラインについては、第3章「Oracle 10g Enterprise Edition のインストール」を参照してください。

- 4 変更する表領域に関連するタブを選択します。表領域のタブは以下のとおりです。
- [デフォルト]: dpipe_default_seg 表領域
 - [プロパティ]: dpipe_property_seg および dpipe_property_ind_seg 表領域
 - [アップロード]: dpipe_upload_seg および dpipe_upload_ind_seg 表領域
 - [レート]: dpipe_rate_seg および dpipe_rate_ind_seg 表領域
 - [概要]: dpipe_summary_seg および dpipe_summary_ind_seg 表領域
 - [オーバーフロー]: dpipe_overflow_seg 表領域
 - [アーカイブ]: dpipe_archive_seg 表領域
 - [イベント]: dpipe_event_seg 表領域

- 5 表領域パラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。それぞれの場合のパラメータは次のとおりです。
- **[AUTOEXTEND のサイズ]**: 拡張するサイズを **MB** 単位で指定します。拡張するサイズに **0** を指定すると、**Oracle** の自動拡張機能は無効になります。
 - **[データファイル]** (ファイル名および **MB** 単位でのサイズ): 各表領域に対して少なくとも **1** つのデータファイルを作成する必要があります。論理名と説明を使用し、オペレーティングシステムの最大値を適用します。
 - データファイルを追加するには、**[追加]** をクリックします。[データファイル] ウィンドウが開きます。このウィンドウでデータファイル名とそのデータファイルのサイズを入力し、**[OK]** をクリックします。
 - データファイルを変更するには、データファイルを選択して **[変更]** をクリックします。[データファイル] ウィンドウが開きます。このウィンドウでデータファイル名とそのデータファイルのサイズのいずれかまたは両方を変更し、**[OK]** をクリックします。
 - データファイルを削除するには、データファイルを選択して **[削除]** をクリックします。

— [OK] をクリックします。次の画面が表示されます。



- 6 [OK] をクリックして、[Oracle ユーザーと表領域の作成] ウィンドウに戻ります。

タスク 10: データベースの場所の確定と接続

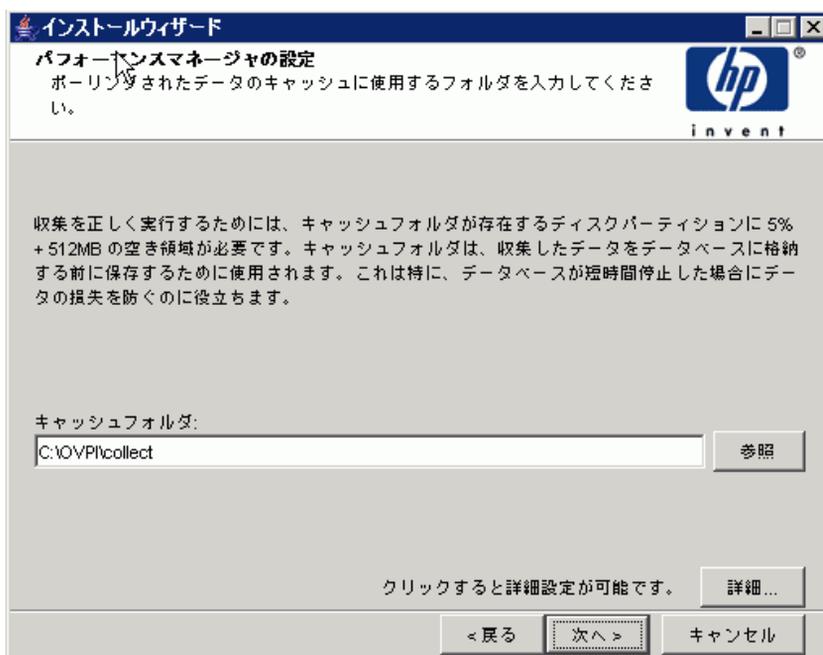
[データベース管理者ユーザーを使用した Oracle 参照] ウィンドウで、Oracle データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
 - **[Oracle インスタンス ID (SID)]:** Oracle データベースのインスタンス名を入力します。
Oracle 環境変数 ORACLE_SID が設定されている場合にのみデフォルト値が表示されます。複数のデータベースインスタンスが実行されている場合があるため、表示された SID が正しいことを確認してください。
 - **[Oracle TCP/IP ポート番号]:** Oracle TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。

- **[DBA 権限を持つ Oracle ユーザー]:** デフォルトは `sys` です。これは変更しないでください。
 - **[Oracle ユーザーパスワード]:** Oracle RDBMS のインストール時に作成した `sys` アカウントのパスワードを入力します。
 - **[Oracle ホームディレクトリ]:** Oracle のインストール先ディレクトリを指定します。インストールプログラムが Oracle のホームディレクトリの場所を確定できる場合は、それがデフォルト値として表示されます。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[Oracle ユーザーおよび表領域の作成] ウィンドウが開きます。

タスク 11: ポーリングの収集の設定

[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウで、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。



- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。

収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの 5% の空き領域に加えて、さらに 512MB の空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが 10GB の場合は、1GB の空き領域が必要です。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[OVPI 詳細設定]** ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。



- a デフォルトのパスのままにすると、**OVPI** をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ (指定するディレクトリにかかわらずここで特定のログファイルが管理される) が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
 - b **[OK]** をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウに戻ります。
- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 12: UNIX システムの場合のみ : オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー] ウィンドウで、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、OVPI が稼動する環境を保存するときに使用します。

インストールウィザード

パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー
パフォーマンスマネージャは、オペレーティングシステムユーザーアカウント trendadmと、グループtrendadmを作成します

HP
invent

trendadmアカウントのパスワードとパスワードの確認を入力してください。入力したパスワードとパスワードの確認が一致しない限り、作業を続行することはできません。パスワードは必ず指定する必要があります。

パスワード:

パスワードの確認:

<戻る 次へ > キャンセル

この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する Web アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、OS ユーザーの作成用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムのアカウントとグループを作成するには、以下の手順に従います。

- a 次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。
 - **[パスワード]**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。また、すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。
 - **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。
- b **[次へ]** をクリックして続行します。
- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存の OS ユーザー用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムアカウントのユーザー環境を変更するには、以下の手順に従います。

 - a 以下のいずれかをクリックします。
 - **[ユーザー環境を変更する]**: このパラメータは、**trendadm** アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数 (**COLLECT_HOME**、**DPIPE_HOME**、**DPIPE_TMP**、および **TREND_LOG**) で更新します。
 - **[ユーザー環境を変更しない]**: このパラメータは、アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から **OVPI** 環境変数を手作業で追加する必要があります。
 - b **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 13: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウで、Web アクセスサーバーがリスンする HTTP ポートのほかに、Web アクセスサーバー用の OVPI 管理者アカウントを作成します。

1 以下のパラメータの値を入力します。

- **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。

▶ このアカウントは **OVPI** の実行環境を保存するのに使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウント (UNIX のインストールのみ) と混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワード]:** Web アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]:** Web アクセスサーバーのデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

[ディレクトリ]: すべての配布レポートを保存するレポートディレクトリの場所を変更します。

- a デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- b **[適用]** をクリックします。
- c **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

[OVPI ユーザー]: OVPI クライアントへのログオンに使用するユーザーアカウントの作成と変更を行います。通常ユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常ユーザーアカウントで OVPI クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、Web アクセスサーバーの管理機能 (**[管理]** リンク) にアクセスできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- a **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (new-user)、パスワード (new-user)、役割 (user) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- b 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- c **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- a ユーザー名を選択して **[ユーザーの削除]** をクリックします。
- b **[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、Web アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

[SSL の設定]: SSL 通信を有効にすると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、以下の手順に従います。

- a **[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効にはなりません。これで、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効になります。

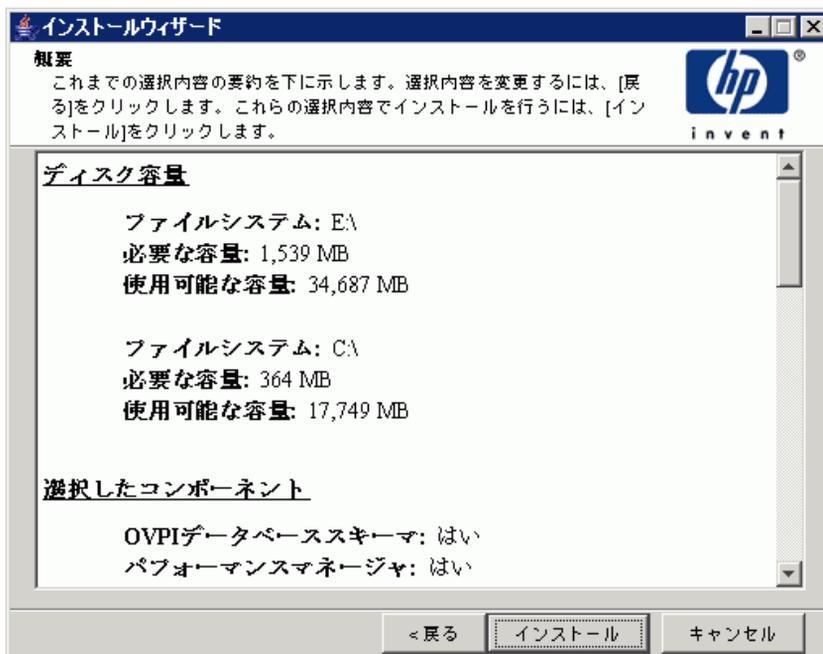
— **[SSL ポート]:** デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。

— **[キーストアパスワード]:** 6 文字以上のパスワードを入力します。
パスワードは記録して安全な場所に保管してください。これは署名入り証明書を作成するときに必要になります。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

- b 残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。
- **[組織]**: 省略可能。自分が所属する組織名を入力します(「ABC システム株式会社」など)。
 - **[組織単位]**: 省略可能。部または課の名前を入力します(「Northeast Sales」など)。
 - **[市町村]**: 省略可能。所在地の市町村名を入力します(「杉並区」など)。
 - **[州 / 都道府県]**: 省略可能。都道府県名を入力します(「東京」など)。
 - **[国]**: 必須。[国] ボックスに 2 文字の国コードを入力します(「JP」など)。
- c **[適用]** をクリックします。
- d **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。**[概要]** ウィンドウが開きます。



タスク 14: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして**[概要]** ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。**[インストールの進捗状況]** ウィンドウが開きます。

タスク 15: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- OVPI のインストールが正常終了したら、**[完了]** をクリックします。
UNIX システムの場合：インストールは終了です。

Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。

- OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
 - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
 - b サポートに問い合わせます。

タスク 16: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

Web アクセスサーバーをインストールするには、129 ページの「[Web アクセスサーバーのインストール](#)」に進んでください。

リモートポーターをインストールするには、139 ページの「[リモートポーターコンポーネントのインストール](#)」に進んでください。

クライアントアプリケーションをインストールするには、136 ページの「[OVPI クライアントのインストール](#)」に進んでください。

Web アクセスサーバーのインストール

データベースをインストールし稼動してから、Web アクセスサーバーをインストールします。

インストール中に、リモート管理サーバーのホスト名およびポート番号を要求されます。これによって、インストールプログラムがデータベースシステムからデータベースの情報をダウンロードします。データベースをまだインストールしていない場合は、インストールが続行されます。ただし、インストール後に管理コンソールを使用してデータベースシステムの設定をする必要があります。

手順の大部分は、スタンドアロンシステムへの Web アクセスサーバーのインストールと同じです。

タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションで **[OVPI 5.30]** を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。
- 4 [使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。

 続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、インストールするコンポーネントを選択します。

- 1 ウィンドウの [インストール] セクションから、**[Web アクセスサーバー]** をクリックして選択します。他のコンポーネントの選択は解除します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 3: OVPI コンポーネントのインストール先ディレクトリの指定

すでに別の OVPI コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。タスク 4 に進みます。

[インストール先フォルダー] ウィンドウで、OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、NFS マウントディレクトリ、UNIX ソフトリンク、UNIX ハードリンクドライブ、Windows マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名にスペースを入れることはできません。
 - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
 - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
 - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

タスク 4: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、Web アクセスサーバーがリスンする HTTP ポートと、Web アクセスサーバー用の OVPI 管理者アカウントを作成します。

- 1 以下のパラメータの値を入力します。
 - **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。

 このアカウントは OVPI の実行環境を保存するのに使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウント (UNIX のインストールのみ) と混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワード]:** Web アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]:** Web アクセスサーバーのデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

- **[ディレクトリ]:** レポートディレクトリの場所を変更するには、**ディレクトリ** を参照してください。
- **[OVPI ユーザー]:** ユーザーアカウントを作成および変更するには、**OVPI ユーザー** を参照してください。
- **[SSL の設定]:** SSL 通信を有効にするには、**SSL の設定** を参照してください。

- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。

ディレクトリ

レポートディレクトリには、配布されたすべてのレポートが保存されます。レポートディレクトリの場所を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- 2 **[適用]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI ユーザー

ユーザーアカウントは、OVPI クライアント（管理コンソール、レポートビルダ、レポートビューア、および Web アクセスサーバー）へのログオンに使用されます。

通常のユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常のユーザーアカウントで OVPI クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、Web アクセスサーバーの管理機能（[管理] リンク）にアクセスできます。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (**new-user**)、パスワード (**new-user**)、役割 (**user**) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- 2 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- 3 **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 ユーザー名を選択します。
- 2 **[ユーザーの削除]** をクリックします。
- 3 **[適用]** をクリックします。
- 4 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、Web アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

SSL の設定

SSL を使用すると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。

SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。

署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、以下の手順に従います。

1 **[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効になりません。これは、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効なことを意味します。

- **[SSL ポート]**: デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。
- **[キーストアパスワード]**: 6 文字以上のパスワードを入力します。パスワードを記録し安全な場所に保管しておきます。このパスワードは、署名証明書を作成するのに必要です。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。

- **[組織]**: 省略可能。自分が所属する組織名を入力します(「ABC システム株式会社」など)。
- **[組織単位]**: 省略可能。部または課の名前を入力します(「Northeast Sales」など)。
- **[市町村]**: 省略可能。所在地の市町村名を入力します(「新宿区」など)。
- **[州/都道府県]**: 省略可能。都道府県名を入力します(「東京」など)。
- **[国]**: 必須。[国] ボックスに 2 文字の国コードを入力します(「JP」など)。

- 2 **[適用]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

リモートデータベースに関する情報の指定

[リモート管理サーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、検索に必要な情報を指定し、リモート **OVPI** データベースに接続するために必要なシステムの情報をダウンロードします。

- 1 以下のパラメータの値を入力します。
 - **[リモート管理サーバーのホスト]**: データベースホストの名前を入力します。
 - **[リモート管理サーバーのポート]**: データベースホストの **HTTP** ポート番号を入力します。

システムがデータベースに接続してデータベース情報を取得できない場合は、警告メッセージが表示されます。続行するには、**OVPI** データベースと **Oracle Listener** プログラムが実行されている必要があります (インストールを続行する場合は、インストール後に管理コンソールを使用してデータベース接続を設定する必要があります)。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 5: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

タスク 6: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- **OVPI** のインストールが正常終了したら、**[完了]** をクリックします。

- UNIX システムの場合：インストールは終了です。
- Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。
- のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
 - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
 - b サポートに問い合わせます。4 ページの「サポート」を参照してください。



Windows システムの場合のみ：Web アクセスサーバーをインストールしたシステムにハードウェア障害が発生した場合は、Web アクセスサーバーを新しいシステムに再インストールします。レポートを配布した場合（設定作業）は、OVPI データベースをインストールしたシステムで `deploytool` コマンドを実行し、Web アクセスサーバーにレポートを再配布します。`deploytool` コマンドの詳細は、『Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

タスク 7: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

クライアントアプリケーションをインストールするには、136 ページの「OVPI クライアントのインストール」を参照してください。

リモートポーターをインストールするには、139 ページの「リモートポーターコンポーネントのインストール」を参照してください。

OVPI クライアントのインストール

OVPI クライアントは、OVPI とそのユーザー間のインタフェースを提供するもので、ネットワーク接続されたシステム上のグループとしてインストールされます。OVPI クライアントの一覧は、18 ページの「**OVPI クライアント**」を参照してください。

タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションで **[OVPI 5.30]** を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。
- 4 [使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。

 続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、インストールするコンポーネントを選択します。

- 1 ウィンドウの [インストール] セクションから、**[OVPI クライアント]** をクリックして選択します。他のコンポーネントの選択は解除します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 3: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

 すでに別の OVPI コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。**タスク 4** に進みます。

[インストール先フォルダー] ウィンドウで、OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、NFS マウントディレクトリ、UNIX ソフトリンク、UNIX ハードリンクドライブ、Windows マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
 - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
 - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
 - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

タスク 4: Web アクセスサーバーにアクセスするのに必要な情報の指定

[リモートの Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、Web アクセスサーバーをインストールする場所についての情報を入力します。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
 - **[Web アクセスサーバーホスト]:** Web アクセスサーバーの名前を入力します。
 - **[Web アクセスサーバーポート]:** Web アクセスサーバーのポート番号を入力します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 5: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。

- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

タスク 6: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- **OVPI** のインストールが正常終了したら、**[完了]** をクリックします。
 - **UNIX** システムの場合：インストールは終了です。
 - **Windows** システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。
- のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
 - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
 - b サポートに問い合わせます。

タスク 7: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

リモートポーターをインストールするには、139 ページの「[リモートポーターコンポーネントのインストール](#)」に進んでください。

リモートポーターコンポーネントのインストール

お使いのシステムに **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストール済みの場合は、リモートポーターコンポーネントをインストールする必要はありません。リモートポーターコンポーネントは **OVPI** パフォーマンスマネージャと一緒にインストールされています。リモートポーターシステムはパフォーマンスマネージャを使用しません。

タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ **OVPI** インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。97 ページの「**OVPI インストールプログラムの起動**」を参照してください。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションから [**リモートポーター**] を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、[**次へ**] をクリックして続行します。

[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、[**次へ**] をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。[**キャンセル**] をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

タスク 2: OVPI コンポーネントのインストール先ディレクトリの指定



すでに別の **OVPI** コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。[タスク 3](#) に進みます。

[インストール先フォルダー] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
 - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。

- インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
- インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

2 **[次へ]**をクリックして続行します。**[データベースの選択]**ウィンドウが開きます。

タスク 3: データベースに関する情報の指定

[リモート管理サーバーの設定]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、検索に必要な情報を指定し、リモート **OVPI** データベースに接続するために必要なシステムの情報をダウンロードします。

1 以下のパラメータの値を入力します。

- **[リモート管理サーバーのホスト]**: データベースホストの名前を入力します。
- **[リモート管理サーバーのポート]**: データベースホストの **HTTP** ポート番号を入力します。

この情報を使用して、パフォーマンスマネージャが稼動している **OVPI** サーバーと、リモートポーラーシステムを自動的に接続することができます。最初に接続したときに、情報ブロックが **OVPI** サーバーからダウンロードされ保存されます。

タスク 4: ポーリングの収集の設定

[パフォーマンスマネージャの設定]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくために使用するキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。

1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。

- ▶ 収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの **5%** の空き領域に加えて、さらに **512 MB** の空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが **10 GB** の場合は、**1 GB** の空き領域が必要です。

- 2 必要に応じて、**[詳細]**をクリックして**[OVPI 詳細設定]**ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。
 - a デフォルトのパスのままにすると、**OVPI**をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ(指定するディレクトリにかかわらずここで特定のログファイルが管理される)が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
 - b **[OK]**をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]**ウィンドウに戻ります。
- 3 **[次へ]**をクリックして続行します。

タスク 5: UNIX システムの場合のみ : オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、**OVPI** が稼動する環境を保存するときに使用します。



この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する **Web** アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、**OS** ユーザーの作成用のウィンドウが開きます。

次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。

- a **[パスワード]**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。また、すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。
- b **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

[次へ]をクリックして続行します。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存の **OS** ユーザー用のウィンドウが開きます。

以下のいずれかをクリックします。

- **[ユーザー環境を変更する]**: このパラメータは、trendadm アカウントの .profile または .cshrc を OVPI 環境変数 (COLLECT_HOME、DPIPE_HOME、DPIPE_TMP、および TREND_LOG) で更新します。
- **[ユーザー環境を変更しない]**: このパラメータは、アカウントの .profile または .cshrc を OVPI 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から OVPI 環境変数を手作業で追加する必要があります。

[次へ] をクリックして続行します。

タスク 6: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

タスク 7: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- **OVPI のインストールが正常終了したら、[完了]** をクリックします。
 - **UNIX システムの場合**: インストールは終了です。
 - **Windows システムの場合**: システムを再起動し、インストールを完了します。
- のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
 - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
 - b サポートに問い合わせます。4 ページの「サポート」

リモートポーラーは、ポーリングポリシーを設定するまでデバイスのポーリングを実行しません。ポーリングポリシーは、管理コンソールのポーリングポリシーアプリケーションで設定します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

OVPI クライアントのみのインストール

OVPI クライアントは、スタンドアロン環境または分散環境のシステムに、他の OVPI コンポーネントをインストールせずに単独でインストールすることができます。このインストールは「クライアントのみのインストール」という方法で、ユーザーはローカルのワークステーションからレポート作成や管理のために Web アクセスサーバーにアクセスすることができます。

クライアントのみのインストールをした場合は、管理コンソールの [ツール] メニューから使用可能なカタログマネージャ、MIB ブラウザ、SNMP 検出、タイプ検出、およびパッケージマネージャが使用できません。また、新しいデータテーブルまたはプロパティテーブルを登録することも、収集データをデータベースに自動的に追加することもできません。全機能を有効にするには、OVPI パフォーマンスマネージャもインストールする必要があります。

クライアントのみのインストールは、136 ページの「[OVPI クライアントのインストール](#)」の手順に従ってください。

6 インストール後の作業

サービスパックの適用

OVPI のインストールが終了したら、OVPI システム用のサービスパックを確認する必要があります。サービスパックがある場合は、最新のサービスパックをダウンロードして適用してください。最新のサービスパックにはそれ以前のサービスパックが含まれます。

サービスパックにアクセスするには **HP Passport ID** が必要です。**HP Passport ID** の取得の方法については、4 ページの「サポート」を参照してください。

このリリース用の最新のサービスパックを検索するには、以下の手順に従ってください。

- 1 次の URL にアクセスします。
www.openview.hp.com/downloads/index.html
- 2 **[Software patches]** をクリックします。
HP Passport のサインインウィンドウが開きます。
- 3 HP Passport ID を入力してログオンします。
- 4 **Performance Insight** のソフトウェアパッチに移動し、サービスパックをダウンロードします。

分散システムでの共通キャラクタセットの使用

分散型構成では、中央データベースサーバー、サテライトデータベースサーバー、およびポーリングシステムが異なるプラットフォームにインストールされていることがあります。オペレーティングシステム間でデフォルトのデータベースキャラクタセットが異なる場合があるため、必ずすべてのデータベースインスタンスと OVPI クライアントが共通のキャラクタセットを使用するようにしてください。

証明書管理アプリケーションのルート権限

証明書管理アプリケーションは、`/opt/OV/bin` ディレクトリに保存されている `ovcert` および `ovconfchg` の各プログラムを使用します。これらのプログラムは、システム上のセキュリティ証明書の管理に使用されます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。これらのプログラムの実行にはルートの権限が必要です。証明書管理アプリケーションは通常、ルートの権限を持たない **trendadm** ユーザーが起動するため、次のコマンドを使用して `ovswitchuser.sh` スクリプトを実行します。

```
/opt/OV/bin/ovswitchuser.sh -existinguser trendadm  
-existinggroup trendadm
```

プログラムを手動で実行する場合は、スクリプトを実行する必要はありません。

レポートパックのインストール前に実行する作業

Unix プラットフォームでは、レポートパックをインストールする前に、次の手順で `changePerm.sh` スクリプトを実行する必要があります。

- 1 Oracle ユーザーとしてログインします。
- 2 ディレクトリ `{ORACLE_HOME}/install` に移動します。
- 3 スクリプト `changePerm.sh` を実行します。

設定作業の実行

すぐに実行する必要がある設定作業は、次のとおりです。

- 1 中央データベースサーバーにレポートパックをインストールし、それを Web アクセスサーバーに配布します。

レポートパックは、パフォーマンスデータを分析するレポートの集まりです。データパイプには、データ収集のときに使用する **OVPI** 用の指令が含まれています。データパイプをインストールすると、**OVPI** が特定のポーリング間隔で特定のタイプのパフォーマンスデータを収集するように設定されま

す。レポートパックをインストールすると、**OVPI** がデータパイプによって収集されたデータを要約して集約するように設定されます。レポートパックとデータパイプのインストールには、管理コンソールクライアントアプリケーションに付属している **OVPI** パッケージマネージャを使用します。さまざまな種類のレポートが選択できます。上級ユーザーは、独自のレポートを作成することもできます。レポートパックをインストールする前に、レポートパックのユーザーガイドを参照してください。

各レポートパックは、収集済みのデータを保存し、分析するためにいくつかのテーブルを作成します。**Oracle Partitioning** オプションを有効にしている場合、各テーブルには多数のパーティションが含まれます。パーティションの数はテーブルに保存するデータの種類によって異なります。たとえば、未処理データ、割合データまたは時間単位のテーブルには **1** 時間ごとにパーティションが含まれます。同様に、日単位のテーブルには **1** 日ごとにパーティションが含まれます。したがって、レポートパックをインストールする場合、データが収集されなくても大量のデータベース領域がパーティションの作成に使用されます。レポートパックをインストールする前に、十分なデータベース領域を使用できることを確認してください。**Performance Insight** によりデータ収集が開始されると、**db_delete_data** が古くなったときに空き領域を確保するためにシステムにより古いデータとパーティションが削除されます。

Web アクセスサーバーが **2** 台以上あるときは、各 **Web** アクセスサーバーにレポートを配布します。中央サーバーがポーリングしていない場合は、中央データベースサーバーにはデータパイプをインストールしないでください。

- 2 サテライトデータベースサーバーでネットワークを検出し、ポーリング予定のノードを探します。検出プロセスでは、特定の **IP** アドレスのデバイスがあるかどうか、デバイスが **SNMP** による管理が可能かどうか、またその場合、そのデバイスがどういった種類か（ルーター、ハブ、スイッチ）を検索するユーティリティを実行します。この情報を使用して、**OVPI** データベースインスタンスのテーブルに書き込みまたは更新をします。
- 3 サテライトデータベースサーバーにレポートパックおよびデータパイプをインストールします（配布はしません）。必ず、中央データベースサーバーにインストールしたレポートパッケージと同じレポートパッケージをサテライトデータベースサーバーにインストールしてください。サテライトデータベースサーバーをポーリングデバイスにしないときは、ポーリングを無効にします。
- 4 サテライトデータベースサーバーでタイプ検出を実行します。

- 5 分散型構成では、分散型構成用のレポートバックとポーリングポリシーを設定します。たとえば、リモートポーラーコンポーネントがインストールされているシステムからデータを収集するように、サテライトデータベースサーバーのレポートパッケージポーリングポリシーを変更する必要があります。
- 6 設定作業には、このほかにも以下のものがあります。
 - 特定の時間に機能を実行するようにスケジューリングする **trendtimer** ユーティリティの設定
 - データコレクションの作成 (データの種類とソース)
 - ポーリングポリシーの設定
 - ユーザーとグループの設定
 - データを表示するためのビューの作成
 - Web アクセスサーバーの設定
 - OVPI データベースの設定
 - レポートのスケジュール設定と生成

すべての設定作業についての詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』に記載されています。OVPI のインストールが終了したらすぐにこのガイドを読むようにしてください。

システムのバックアップ

OVPI のインストール後、データベースおよびインストールした OVPI の両方のバックアップを行ってください。手順については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

OVPI の稼動とデータ収集の確認

OVPI が稼動しデータを収集していることを確認するには、以下を実行します。

- Windows システムの場合

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] をダブルクリックします。

[管理ツール] ウィンドウが開きます。

- 2 [サービス] アイコンをダブルクリックします。

- 3 サービスの一覧から次の OVPI サービスを探します。

— OVPI Timer

— OVPI_HTTP_Server

ステータスは [開始] になっているはずです。

- 4 サービスが停止しているときは、サービス名をマウスで右クリックし、表示されるショートカットメニューから [開始] をクリックします。

- UNIX システムの場合

コマンド行で以下を入力します。

```
ps -ef | grep trendtimer
```

この出力は、次のようになります。

```
trendadm 1755      1  0  Apr 13  ?0:10  
/usr/OVPI/bin/trendtimer -s /usr/OVPI/lib/trendtimer.sched
```

プロセスがリスト内に表示されない場合、OVPI が稼動していません。プログラムのパスは OVPI がインストールされている場所によって異なります。

また、jboss プロセス (Windows の OVPI HTTP Server サービス) を確認します。jboss は OVPI による正常なデータ収集には必要ありませんが、Web サーバーを使用する機能に必要となるものです。たとえば、レポートの表示で必要になります。

以下のいずれかのコマンドを入力します。

```
ps -ef | grep java
```

この出力は、次のようになります。

```
root 22284 22271    0 06:28:04 ?10:11 /opt/OV/nonOV/jdk/a/bin/java  
-Dprogram.name=run.sh -server -Xms32m -Xmx256m .....
```

```
ps -ef | grep jboss
```

この出力は、次のようになります。

```
root      11250 11191  0 Jul10 pts/1    00:06:30
/opt/OV/nonOV/jdk/a/bin/java -Dprogram.name=run.sh -server
-Xms32m -Xmx256m -Dtrend.home=/usr/OVPI -Dfile.encoding=UTF-8
-Djava.awt.headless=true .....
```

プロセスがリスト内に表示されない場合、**Web** サーバーが稼動していません。
プログラムのパスは **OVPI** がインストールされている場所によって異なります。

OVPI の開始と停止

『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』に、各 OVPI コンポーネントの開始および停止の手順が記載されています。

OVPI のインストールのトラブルシューティング

OVPI のログファイル

OVPI のログファイルはすべて `$DPIPE_HOME/log/` にあります。

インストール中に使用されるログファイルは `install.log` という名前です。インストール中のトラブルは、このログファイルで確認します。

OVPI のログファイルの使用方法については、『[HP OpenView Performance Insight Troubleshooting Guide](#)』を参照してください。このガイドは、サポートサイトからオンラインでも利用できます(4 ページの「サポート」を参照してください)。

Windows の場合のみ : NNM の統合

NNM が稼働している Windows システムに OVPI をインストールする際、OVPI のインストール中に **ERROR** または **WARNING** のメッセージが表示される場合があります。これは無視して構いません。

- インストール中に次のエラーが表示される場合があります。

```
failed to copy the file, msvcr70.dll, into the OVPI "bin"
directory
```

- インストール終了後、[詳細] ウィンドウの [エラー] タブに次のメッセージが表示されます。

```
msiexec failed with exit status: 1603
```

[警告] タブに次のメッセージのどちらかまたは両方が表示されます。

```
Higher version of package might have been installed.Failed to
install
```

```
packageHPOvXpl-02.50.100-WinNT4.0-release.msi:{C9C24CC5-23CE-
4B55-8BC0-6D5785924842}
```

```
Higher version of package might have been installed.Failed to
install
```

```
packageHPOvJxpl-02.50.100-WinNT4.0-release.msi:{48C97C18-5AFA-
40FE-B51D-A4EECBE02808}
```


7 OVPI のアンインストール

RDBMS をアンインストールする前に、OVPI をアンインストールする必要があります。

OVPI をアンインストールすると、OVPI が使用しているデータベースから OVPI に関連する表領域と `dsi_dpipe` ユーザーが削除されます。データベースそのものは削除されません。

OVPI のアンインストールで事前に必要な作業

OVPI をアンインストールする前に、以下の作業を実行します。

- OVPI Timer の停止
- OVPI HTTP Server の停止
- OVPI プロセス完了の待機
- Oracle がまだ動作していることの確認

次の環境変数が保存されているディレクトリの場所を確認しておきます。これらのディレクトリは、アンインストール後に手動で削除する必要があります。

- `DPIPE_HOME`
- `DPIPE_TMP`
- `TREND_LOG`
- `COLLECT_HOME`

OVPI のアンインストール手順

OVPI アンインストールウィザードを使用して、OVPI をアンインストールします。このウィザードは、OVPI のインストールによってシステムに追加されたファイルと、すべての OVPI コンポーネントをローカルシステムから削除します。ユーザーあるいはアプリケーションによって作成されたファイル（たとえばログファイルやレポート）は削除されません。

アンインストールウィザードの起動方法以外は、Windows システムと UNIX システムの OVPI のアンインストール手順は同じです。

タスク 1: OVPI アンインストールウィザードの起動

- 1 ローカルシステムにログオンします。

Windows システムの場合：

- a 管理者アカウントを使用してログオンします。
- b Windows のデスクトップから、**[スタート]** をクリックします。[プログラム]、[HP OpenView]、[Performance Insight] の順に選択し、**[アンインストール]** をクリックします。

UNIX システムの場合：

- a root としてログオンします。
- b 次のコマンドを入力します。

```
$DPIPE_HOME/bin/uninstall
```

この例では、*\$DPIPE_HOME* は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 2 [よろこ] ウィンドウが開きます。**[次へ]** をクリックして続行します。
- 3 OVPI をアンインストールしようとするシステムに OVPI データベーススキーマがインストールされている場合は、**タスク 2** に進みます。
- 4 OVPI をアンインストールしようとするシステムに OVPI データベーススキーマがインストールされていない場合は、**タスク 3** に進みます。

タスク 2: Oracle 管理者パスワードの入力 (ローカル Oracle データベースの場合のみ)

[Oracle 管理者パスワード] ウィンドウが開きます。以下のいずれかを実行します。

- Oracle 管理者パスワードを設定している場合は、[Oracle 管理者 (SA) パスワード] ボックスにパスワードを入力し、[次へ] をクリックして続行します。
- Oracle 管理者パスワードを設定していない場合は、[Oracle 管理者 (SA) パスワード] ボックスを空白のままにし、[次へ] をクリックして続行します。

タスク 3: 確認とアンインストール

[概要] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、アンインストールするコンポーネントを確認します。

- 1 必要があれば、[戻る] をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 [アンインストール] をクリックして続行します。

タスク 4: アンインストールの終了

[アンインストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。ウィンドウにアンインストール中に発生した状況が表示されます。終了後、ウィンドウにはアンインストールが正常に終了したのかどうかが表示されます。

- OVPI のアンインストールが正常に終了した場合は、次の手順を実行します。
 - a [完了] をクリックします。
 - UNIX システムの場合: アンインストールは終了です。
 - Windows システムの場合: システムを再起動し、アンインストールを完了します。
 - b 158 ページの「OVPI のアンインストール後の作業」に進みます。
- OVPI のアンインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
 - a [アンインストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある [詳細] をクリックし、詳細情報を確認します。
 - b サポート に問い合わせます (4 ページの「サポート」を参照してください)。

OVPI の手動アンインストール (Windows システムの場合)

Windows システムで OVPI のアンインストールに失敗した場合は、手動で OVPI をアンインストールします。次の場合、OVPI のアンインストールが失敗する場合があります。

- OVPI プロセスが実行中の場合。ファイルの削除は失敗し、アンインストール終了後に警告が表示されます。
- アンインストール中に電源障害のような致命的な問題が発生した場合。
- OVPI データベースが稼動していないか、アンインストールの処理中にデータベースに接続できない場合。

タスク 1: OVPI サービスの停止

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから、**[管理ツール]** をダブルクリックします。
[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- 2 **[サービス]** アイコンをダブルクリックします。
- 3 [サービス] ウィンドウから **[OVPI Timer]** を右クリックし、表示されるメニューから **[停止]** を選択します。
- 4 [サービス] ウィンドウから **[OVPI_HTTP_Server]** を右クリックし、表示されるメニューから **[停止]** を選択します。

タスク 2: Web アクセスサーバーの削除

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開き、次のディレクトリに移動します。
C:\Program Files\HP OpenView\nonOV\PiJBoss\4.0.5\bin
- 2 次のコマンドを実行します。
JavaService.exe -uninstall OVPI_HTTP_Server

タスク 3: Windows レジストリエントリの削除

レジストリエディタを使用して、[HKEY_LOCAL_MACHINE] > [SOFTWARE] > [Hewlett-Packard] > [HP OpenView] の順に開き、次のエンタリを削除します。

Performance Insight

タスク 4: OVPI Timer サービスの削除

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
installation_directory\bin
```

この例では、*installation_directory* は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 3 次のコマンドを入力します。

```
trendtimer -r
```

タスク 5: 特定の環境変数の削除

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから [システム] をダブルクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。
- 2 [詳細] タブをクリックし、[環境変数] ボタンをクリックします。[環境変数] ダイアログボックスが開きます。
- 3 以下の変数を削除します。
 - COLLECT_HOME
 - DPIPE_HOME
 - DPIPE_TMP
 - TREND_LOG
- 4 PATH 環境変数を編集し、OVPI に関連するものをすべて削除します。
- 5 完了したら、[OK] をクリックします。

タスク 6: システムの再起動

OVPI のアンインストール後の作業

OVPI の再インストール時のトラブルを防止するために、次のディレクトリを削除することをお勧めします。

- OVPI ディレクトリ
- .ovpi ディレクトリ

OVPI のインストール先ディレクトリの削除

OVPI ディレクトリは、OVPI をインストールしたディレクトリです。

OVPI アンインストールウィザードによって、OVPI ディレクトリから OVPI インストールプログラムによってインストールされたファイルが削除されます。このウィザードでは、このディレクトリに保存されている作成されたファイル(ログファイル)、ユーザーが作成したファイル、インストールされたレポートパックに配布されたレポートは削除されません。



保存しておく必要のあるレポートやデータが OVPI ディレクトリの中にある場合は、続行する前にそれらのファイルを別の場所に移動しておいてください。

OVPI ディレクトリを削除するには、以下の手順に従います。

- UNIX システムの場合：
 - a OVPI がインストールされているシステムで新しいシェルウィンドウを開きます。
 - b 次のコマンドを入力します。

```
rm -rf $DPIPE_HOME/ovpi
```

この場合、`$DPIPE_HOME` は OVPI がインストールされているディレクトリです。たとえば、`/data` ディレクトリに OVPI をインストールした場合は、次のコマンドを入力します。

```
rm -rf /data/ovpi
```

- Windows システムの場合：以下のいずれかを実行します。
 - Windows エクスプローラで、**[Performance Insight]** ディレクトリを見つけて右クリックします。表示されるメニューから **[削除]** を選択します。

— コマンドプロンプトウィンドウから、次のコマンドを入力します。

```
rmdir /s $DPIPE_HOME
```

この例では、`$DPIPE_HOME` は OVPI がインストールされているディレクトリです。

不要なディレクトリの削除

次の環境変数を保存しているディレクトリを手動で削除します。

- `DPIPE_TMP`
- `TREND_LOG`
- `COLLECT_HOME`

.ovpi ディレクトリの削除

.ovpi ディレクトリには、ユーザーのカスタム設定が保存されています。このディレクトリは、レポートビルダ、レポートビューア、または Web アクセスサーバーを実行したことがある場合のみ存在します。



.ovpi ディレクトリは、ユーザー自身が削除する必要があります。

.ovpi ディレクトリは隠しファイルです。削除するにはディレクトリを見えるようにする必要があります。Windows でディレクトリの表示を変更し、隠しファイルおよび隠しディレクトリを表示します。ウィンドウで [ツール] > [フォルダオプション] と選択し、[表示] タブで [すべてのファイルとフォルダを表示する] ラジオボタンを選択します。

.ovpi ディレクトリを削除するには、以下の手順を実行します。

- UNIX システムの場合：

.ovpi ディレクトリは UNIX ホームディレクトリにあります。

- a OVPI がインストールされているシステムで新しいシェルウィンドウを開きます。
- b ホームディレクトリから次のコマンドを入力します。

```
rm -rf .ovpi
```

- Windows システムの場合：

.ovpi ディレクトリは %SystemDrive%\Documents and Settings\ ユーザー名 にあります。このディレクトリに移動し、以下のいずれかを実行します。

- Windows エクスプローラで、.ovpi ディレクトリを右クリックし、表示されるメニューから **[削除]** を選択します。
- コマンドプロンプトウィンドウから、次のコマンドを入力します。

```
rmdir /S .ovpi
```

RDBMS のアンインストール

続いて RDBMS をアンインストールします。第 8 章「[Oracle RDBMS のアンインストール](#)」を参照してください。

8 Oracle RDBMS のアンインストール

Oracle RDBMS のアンインストールは、先に OVPI をアンインストールしてから行います。第 7 章「OVPI のアンインストール」を参照してください。

Oracle をアンインストールする前に、Oracle を停止します (65 ページの「Oracle の開始と停止」を参照してください)。

RDBMS と Oracle クライアントの両方をアンインストールするには、以下の手順に従ってください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。
Windows システムの場合
管理者アカウントを使用してログオンします。
UNIX システムの場合
root としてログオンします。
- 2 アンインストール手順を開始します。
 - a Oracle Universal Installer を起動します。
[ようこそ] ウィンドウが開きます。
 - b **[製品の削除]** をクリックします。
[インベントリ] ウィンドウが開きます。
 - c 削除するすべての項目のチェックボックスをオンにし、**[削除]** ボタンをクリックします。
確認用のウィンドウが開きます。
 - d 削除する項目を確認し、**[はい]** をクリックします。
選択した製品のアンインストールを確認するために、削除の確認を求め
るウィンドウが表示されます。
- 3 アンインストールツールで削除できなかった残りの Oracle ディレクトリを
削除します。

9 Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード

Oracle 9i を使用している場合は、以下の手順に従って Oracle 10g バージョン 10.2.0.3 にアップグレードする必要があります。

- 1 Oracle 9i のホームフォルダーとは異なるフォルダーに Oracle10g をインストールします。
 - a インストールでは、Unicode (AL32UTF8) キャラクタセットを選択します。
 - b 10.2.0.3 パッチを適用します。
 - c Oracle のデータベースアップグレードアシスタントを使用して、Oracle 9i データベースを Oracle 10g にアップグレードします。

インストールとアップグレードの手順についての詳細は、『Oracle Database アップグレード・ガイド 10g リリース 2』を参照してください。

- 2 パスを確認します。

Oracle 9i に使用したインストールパスではなく、Oracle10g のインストールパス (C:\oracle\ora10 など) が参照されるように環境変数 PATH を編集します。

環境変数 ORACLE_HOME が Oracle10g のホームを参照するようにしてください。

- 3 Windows システムでは、次のようにレジストルを編集します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE のレジストリエントリを編集し、ORACLE_HOME を Oracle10g のホームに設定します。

- 4 Oracle 9i のリスナーを停止し、Oracle 10g のリスナーを起動します。
- 5 {NEW ORACLE_HOME}\network\admin\sqlnet.ora のエントリが以下のようにになっていることを確認します。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (TNSNAMES, HOSTNAME, ONAMES)
```

- 6 OVPI 5.30 にアップグレードする前に、すべての SQL セッションを閉じます。そうしないと、OVPI 5.30 のアップグレードウィザードですべての SQL セッションを閉じて再試行するように指示するポップアップが表示されます。
- 7 10g Database Control サービスを停止します。

リモート Oracle データベースのアップグレード

前述の手順 1～7 を実行します。データベースをアップグレードした後、以下の手順を実行して OVPI 5.30 固有の表領域を新しく作成します。

- 1 リモート Oracle データベースでアーカイブ用とイベント用の表領域を明示的に作成します。以下に SQL*Plus を使用して `dpipe_archive_seg` 表領域を作成する方法の 1 例を示します。

```
CREATE TABLESPACE dpipe_archive_seg DATAFILE
'dpipe_archive_sef.dbf' SIZE 10M REUSE AUTOEXTEND ON NEXT
10M MAXSIZE UNLIMITED LOGGING ONLINE PERMANENT EXTENT
MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE SEGMENT SPACE MANAGEMENT
AUTO;
```

- 2 この手順を繰り返して次の表領域を作成します。
 - `dpipe_archive_ind_seg`
 - `dpipe_event_seg`
 - `dpipe_event_ind_seg`

OVPI 5.30 へのアップグレード前の接続確認

リモート Oracle マシンで SQL*Plus セッションを開き、設定を確認します。バージョンは Oracle 10.2 となっているはずです。

SQL*Plus セッションを開始して、Oracle クライアントからリモートデータベースへの接続性を確認します。

10 OVPI 5.30 へのアップグレード

現在使用している OVPI が次のいずれかのバージョンであれば、OVPI 5.30 にアップグレードできます。

- OVPI 5.1 Service Pack 9 以上
- OVPI 5.1.1 Service Pack 9 以
- OVPI 5.1.2 Service Pack 4 以上
- OVPI 5.20

OVPI 5.30 へのアップグレードは、スタンドアロン環境と分散環境のどちらでも可能です。この項で説明するインストールプロセスはすべての環境に適用されます。ただし、分散型構成では、最初にデータベーススキーマをアップグレードする必要があります。手順は第 9 章「[Oracle 10g Enterprise Edition へのアップグレード](#)」に記載されています。データベースがアップグレードされていれば、分散しているコンポーネントを任意の順序でインストールできます。

リモートポラーは OVPI とは別にアップグレードしますが、手順は同じです。

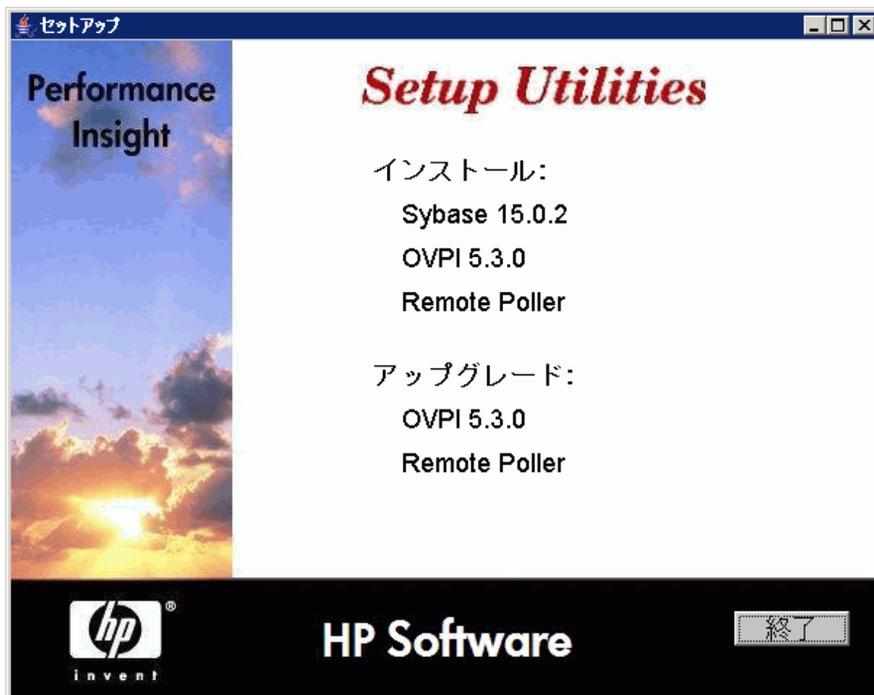
OVPI をアップグレードする前に、Oracle 10g へのアップグレードを行う必要があります。

アップグレード前の作業

- タスク 1: オペレーティングシステムに必要な適切な Java パッチをインストールする必要があります。OVPI 5.30 には Java 1.4.2.13 が搭載されています。Java はアップグレード時にシステムに自動的にロードされ、OVPI でインストールされた以前のバージョンの Java は置き換えられます (30 ページの「[実行中の Java 用パッチの確認](#)」を参照してください)。
- タスク 2: OVPI 5.30 へのアップグレードを開始する前に、必ず OVPI Timer プログラムを停止してください。Timer の停止方法および起動方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

ウィザードを使用したアップグレード

- 1 製品 DVD からセットアップユーティリティを実行します。次の画面が表示されます。

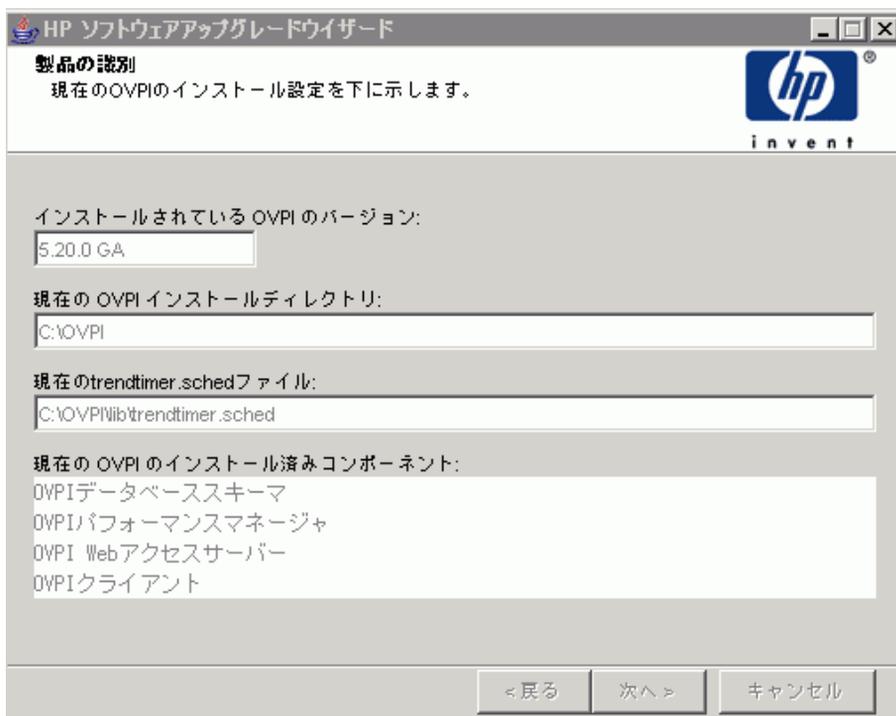


- 2 [OVPI 5.3.0] を選択します。インストールウィザードが開きます。



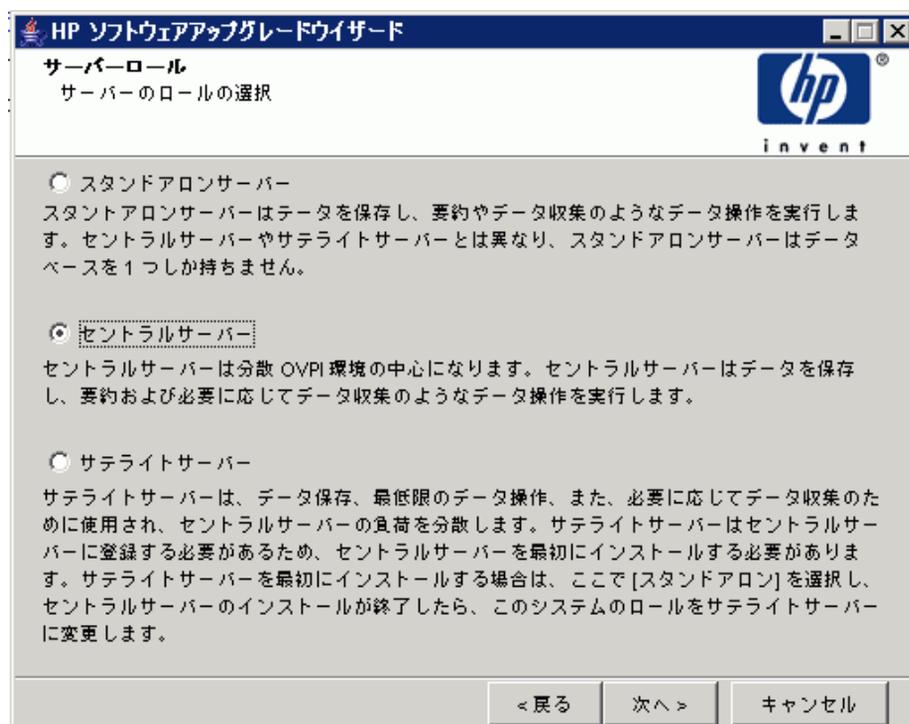
- 3 [次へ] をクリックします。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。

- 4 使用許諾条件に同意し、**[次へ]**をクリックします。[製品の識別] ウィンドウが開きます。



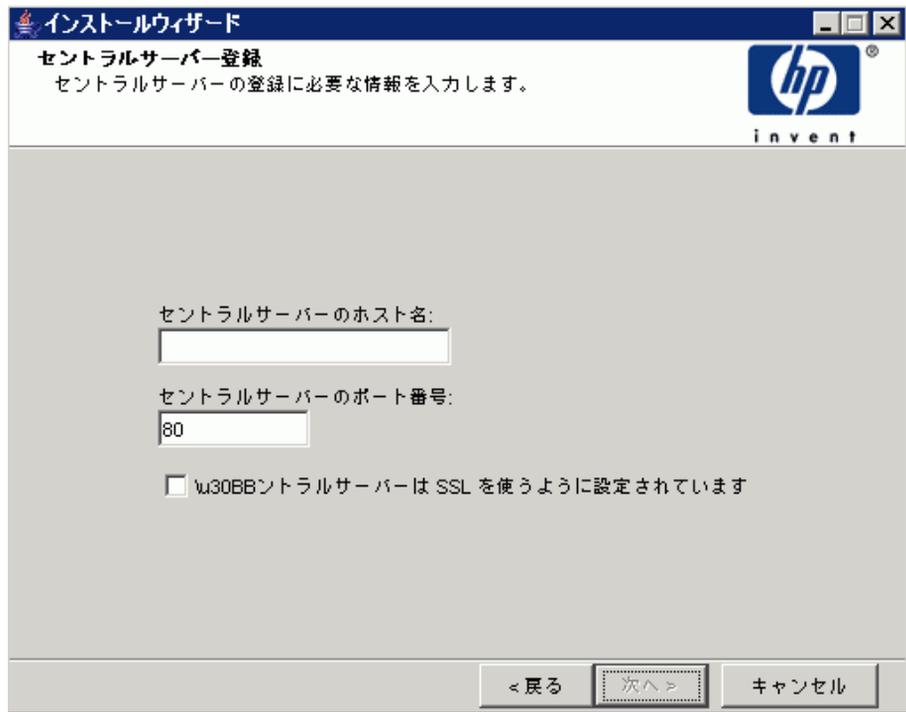
[製品の識別] ウィンドウには、インストール済みの既存のコンポーネントなど、現在インストールされている製品の情報が表示されます。

- 5 [次へ] をクリックします。[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



- 6 OVPI をインストールする環境を選択します。

[サテライトサーバー] を選択すると、[セントラルサーバー登録] ウィンドウが開きます。



インストールウィザード

セントラルサーバー登録
セントラルサーバーの登録に必要な情報を入力します。

hp
invent

セントラルサーバーのホスト名:
[]

セントラルサーバーのポート番号:
[80]

w30BBセントラルサーバーは SSL を使うように設定されています

< 戻る 次へ > キャンセル

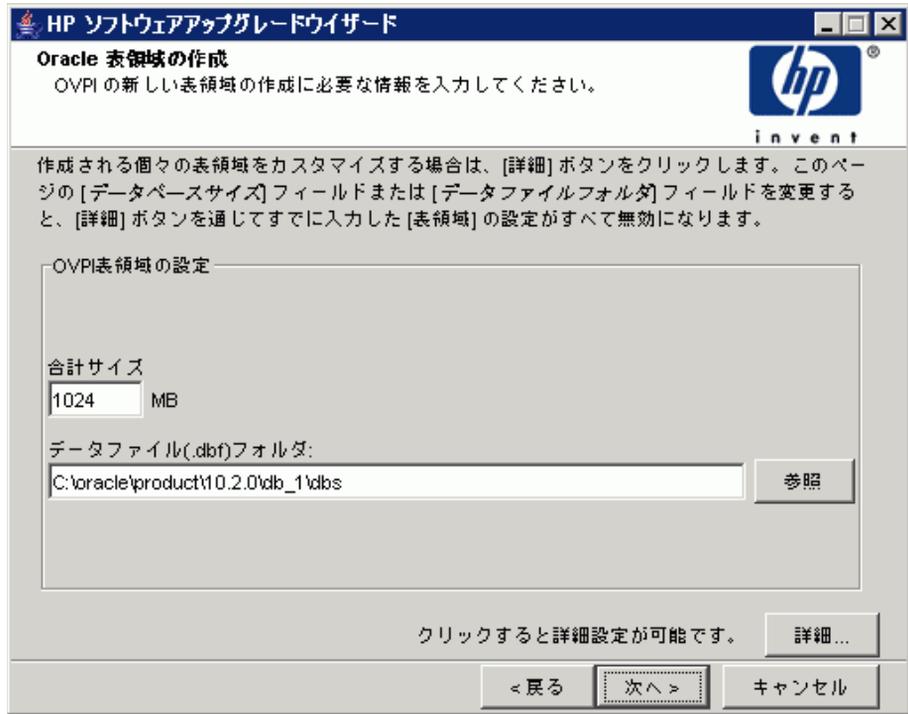
- 7 ホスト名とポート番号を入力します。SSL を有効にする場合は、チェックボックスをオンにします。

- 8 [次へ]をクリックします。[OVPI データベースユーザーを使用した Oracle 参照] ウィンドウが開きます。

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "HP ソフトウェアアップグレードウィザード". The main heading is "OVPI データベースユーザーを使用した Oracle 参照". Below the heading is the instruction: "Oracle データベースを特定し、接続するために、次の情報を入力してください。". The HP logo and the word "invent" are in the top right corner. The dialog is divided into two main sections: "サーバー設定" (Server Settings) and "ユーザー設定" (User Settings). In the "サーバー設定" section, there are three input fields: "Oracle インスタンス ID (SID):" with the value "oldpid", "Oracle データベースホスト:" with the value "lwin2k3jp1", and "Oracle TCP/IP ポート番号:" with the value "1521". In the "ユーザー設定" section, there are two input fields: "OVPI データベースユーザー:" with the value "dsi_dpive" and "パスワード:" with a masked value "*****". At the bottom left, there is a field for "Oracle ホームディレクトリ:" with the value "C:\". To the right of this field is a button labeled "参照". At the very bottom of the dialog, there are three buttons: "< 戻る", "次へ >" (which is highlighted with a dashed border), and "キャンセル".

Oracle のホームディレクトリを入力します (最初に Oracle をバージョン 10g にアップグレードする必要があります)。

- 9 [次へ] をクリックします。[Oracle 表領域の作成] ウィンドウが開きます。



このウィンドウが表示されるのは、Oracle がローカルマシンにインストールされている場合のみです。

リモート Oracle データベースへのインストールでは、Oracle データベースでアーカイブ用とイベント用の表領域を明示的に作成する必要があります。以下に SQL*Plus を使用して dpipe_archive_seg 表領域を作成する方法の 1 例を示します。

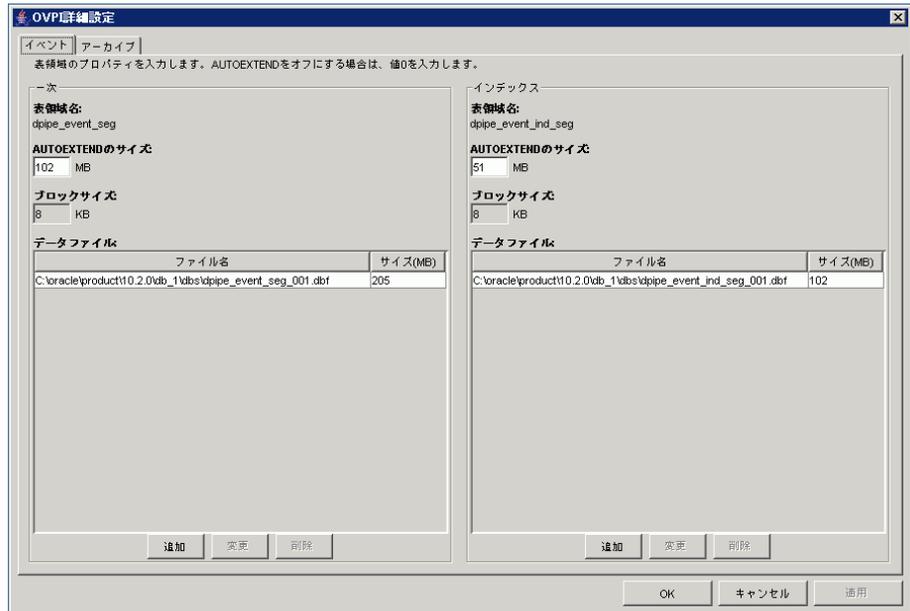
```
CREATE TABLESPACE dpipe_archive_seg DATAFILE
'dpipe_archive_sef.dbf' SIZE 10M REUSE AUTOEXTEND ON NEXT
10M MAXSIZE UNLIMITED LOGGING ONLINE PERMANENT EXTENT
MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE SEGMENT SPACE MANAGEMENT
AUTO;
```

これを繰り返して次の表領域を作成します。

- dpipe_archive_ind_seg
- dpipe_event_seg

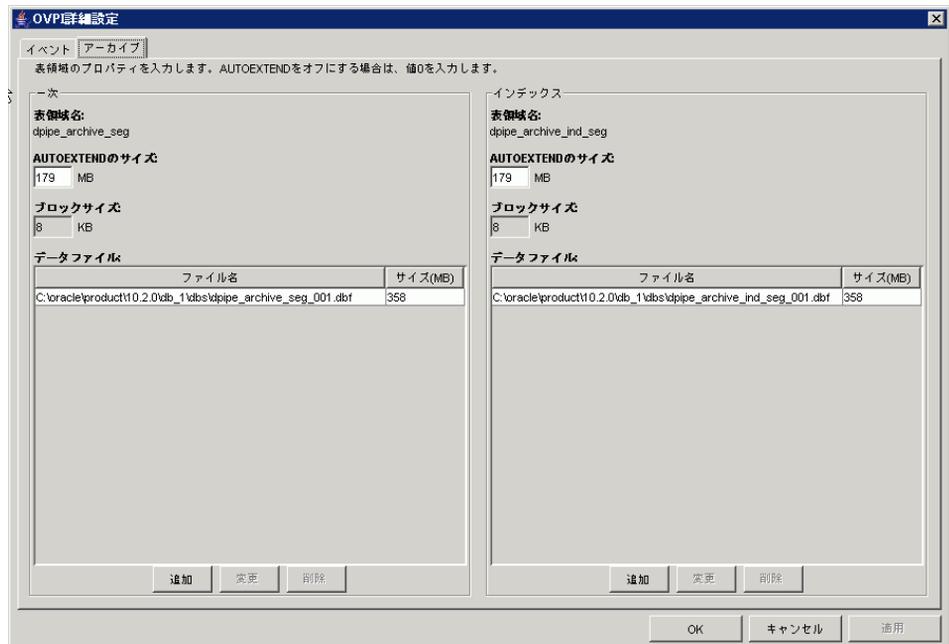
— dpipe_event_ind_seg

- 10 **[次へ]** をクリックします。[OVPI 詳細設定] ウィンドウの [イベント] タブが開きます。



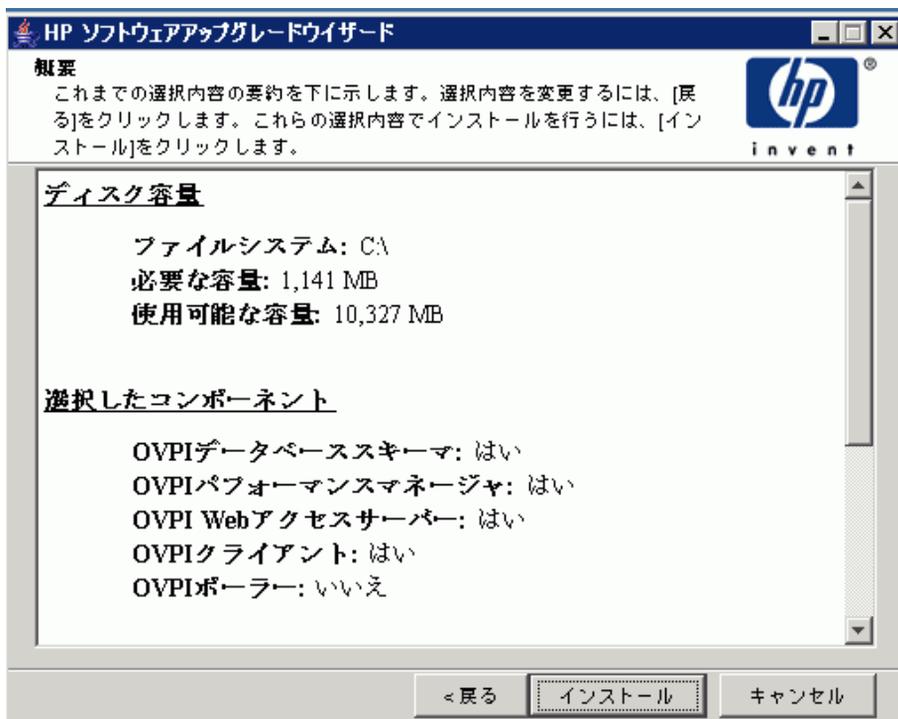
このウィンドウを使用して、イベント用表領域 `dpipe_event_seg` および `dpipe_event_ind_seg` に関連するデータファイルの追加または変更を行います。

[アーカイブ] タブをクリックします。



このウィンドウを使用して、アーカイブ用表領域 **dpipe_archive_seg** および **dpipe_archive_ind_seg** に関連するデータファイルの追加または変更を行います。

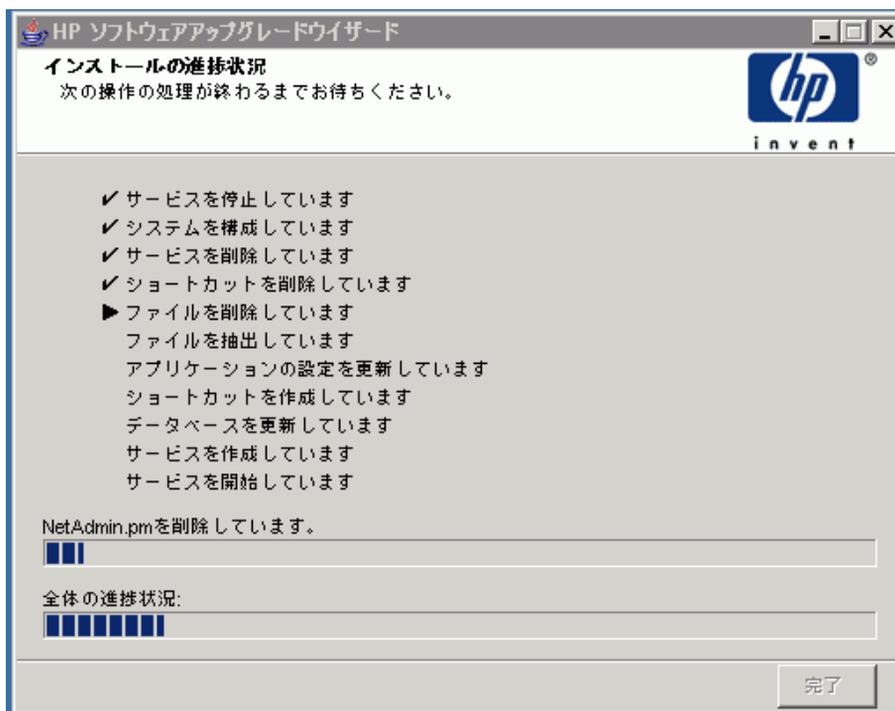
11 [OK] をクリックします。[概要] ウィンドウが開きます。



[概要] ウィンドウには、実行されるインストールの情報が表示されます。この時点で [戻る] ボタンを使用すれば、変更可能です。

ウィザードでインストール項目を特定することで、OVPI の特定のコンポーネントのみをインストールできます。選択内容によって、インストーラーが実行するアクションおよびウィザードが表示するウィンドウが異なります。

- 12 **[インストール]** をクリックします。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。



インストールは終了です。

レポートパックのアップグレード

OVPI を 5.30 にアップグレードした後、レポートパックを OCT07RP(2007 年 10 月)リリースにアップグレードする必要があります。

リモートポーターのアップグレード

OVPI では、OVPI のインストールとは別に、リモートポーターのインストールやアップグレードを実行できます。

リモートポーターをアップグレードするためのインストールプロセスは、[データベースの役割] ウィンドウが表示されない点以外、OVPI をアップグレードするプロセスと同じです。

アップグレード後の作業

OVPI 5.30 にアップグレードした後、OVPI Timer プログラムを起動します。Timer の起動方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

索引

C

Common Desktop Environment, 36

D

DVD のマウント (UNIX), 70, 98

H

HP Passport ID, 145

J

Java 関連パッチ, 30

N

Network Node Manager, 35, 151

O

Oracle

インストール
既存のリモートデータベースの使用,
60

インストール後の作業, 63

設定パラメータ, 82, 112

データベースに接続, 87, 110, 118

Oracle データベースに接続, 87, 110, 118

Oracle のインストールプロセス, 46

Oracle の停止, 66

[Oracle ユーザーおよび表領域の作成] ウィン
ドウ, 88, 111, 119

OVPI

アンインストール
事前に必要な作業, 153
開始と停止, 150

OVPI 管理者アカウント, 92, 123, 130

OVPI クライアント, 18

管理コンソール, 19

レポートビューア, 19

レポートビルダ, 19

OVPI コンポーネント

OVPI クライアント, 18

Web アクセスサーバー, 18

データベース管理ソフトウェア, 17

パフォーマンスマネージャ, 17

リモートポーター, 20

OVPI データベース, 17

OVPI データベースインスタンス, 17

OVPI のアンインストール

UNIX での, 154

Windows での, 154

事前に必要な作業, 153

OVPI の開始, 150

OVPI の機能, 11

OVPI の構成

例, 31

OVPI の停止 , 150

S

SNMP セキュリティパック , 34

SSL, 94, 125, 132

有効にする , 132

Sybase

データベースに接続 , 79

デフォルトのポート番号 , 31

Sybase データベースに接続 , 79

U

UNIX

OVPI のアンインストール , 154

サポートされているデスクトップ , 36

UNIX システム

DVD のマウント , 70, 98

W

Web アクセス , 33

Web アクセスサーバー , 18

デフォルトのポート番号 , 31

ブラウザの要件 , 33

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウ ,
92, 123, 130

Windows

OVPI のアンインストール , 154

あ行

アカウント

管理者 , 93, 124, 132

ユーザー , 132

アンインストールウィザード

起動 , 154

インストール

Oracle

Oracle データベースサーバーのイン
ストール , 46

Oracle データベースの作成 , 48

表領域の作成 , 51

既存のリモートデータベース , 60

データベースの設定 , 48

インストール後の作業 , 63

[インストール先フォルダー] ウィンドウ , 77,
107, 130, 137, 139

インストールに関する問題

ポーリングおよび SNMP の接続性 , 33

レポートを利用するクライアントの接続
性 , 33

[インストールの進捗状況] ウィンドウ , 96,
127, 134, 138, 142

インストールの前提条件 , 37

インストール前の作業

HP Compaq ユーザー , 36

Network Node Manager との統合 , 35

Red Hat Linux システム , 36

SNMP セキュリティパックのインストー
ル , 34

Web アクセスの計画 , 33

オペレーティングシステムソフトウェア
の更新 , 28

国際化の計画 , 36

ポートの識別 , 31

ウィザード

アンインストール , 154

ウィンドウ

Oracle ユーザーおよび表領域の作成 , 88,
111, 119

Web アクセスサーバーの設定 , 92, 123,
130

インストール先フォルダー , 77, 107, 130, 137, 139

インストールの進捗状況 , 96, 127, 134, 138, 142

概要 , 127, 134, 137, 142

データベース管理者を使用した Oracle 参照 , 87, 110, 118

データベースの選択 , 78, 108, 130, 137, 140

パフォーマンスマネージャの設定 , 88, 119, 140

リモート管理サーバーの設定 , 134, 140

運用環境

スタンドアロン , 9

図 , 10

分散 , 11, 13, 14

オペレーティングシステム

更新 , 28

リリースレベルのパッチ , 28

オペレーティングシステムソフトウェアの更新 , 28

か行

[概要] ウィンドウ , 127, 134, 137, 142

管理コンソール , 19

デフォルトのポート番号 , 31

管理者アカウント , 93, 124, 132

キャッシュディレクトリ , 88, 119, 140

共通のキャラクタセット , 64, 145

国際化 , 36

さ行

サーバー

データベース , 17

分散 , 12

サービスパック , 145

サテライトデータベースサーバー , 12

システムのバックアップ , 148

システムの要件

サポートされているデスクトップ (UNIX) , 36

デフォルトのポート番号例 , 31

スタンドアロン環境 , 9

図 , 10

設定作業 , 146

た行

チェックリスト , 37

中央データベースサーバー , 12

追加

ユーザーアカウント , 93, 124, 132

データベースインスタンス , 17

[データベース管理者を使用した Oracle 参照] ウィンドウ , 87, 110, 118

データベース管理ソフトウェア , 17

データベースサーバー , 17

サテライト , 12

中央 , 12

リモート , 18

データベースシステムの役割 , 76

データベースのインストール (Oracle) , 46

データベースの作成 (Oracle) , 48

データベースの設定 (Oracle) , 48

[データベースの選択] ウィンドウ , 78, 108, 130, 137, 140

デスクトップ (UNIX)

インストールでサポートされている , 36

デフォルトのポート番号, 31
例, 31

な行

ネットワーク接続性, 31

は行

パッチ

Java 関連, 30

リリースレベル, 28

パフォーマンスマネージャ, 17

[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウ, 88, 119, 140

表領域

作成 (Oracle), 51

ファイアウォール

OVPI ポート, 31

インストールに関する問題, 33

ブラウザの要件

Web アクセスサーバー, 33

分散環境, 11

いつ使うのか, 15

インストールの順番, 100

機能, 11

共通のキャラクタセット, 64, 145

サーバー, 12

ポート

ネットワーク接続性, 31

ポート番号

例, 31

ポーリング, 20

ポーリングおよび SNMP の接続性, 33

や行

役割

データベースシステム, 76

有効にする

SSL, 132

ユーザーアカウント, 132

削除, 93, 124, 132

ユーザーアカウントの削除, 93, 124, 132

ら行

リモート Oracle データベース

既存のデータベースの使用, 60

[リモート管理サーバーの設定] ウィンドウ, 134, 140

リモートデータベースサーバー, 18

リモートポラー, 20

レポートディレクトリ, 131

レポートビューア, 19

レポートビルダ, 19

レポートを利用するクライアントの接続性, 33

ローカライズ, 36